
けいおん！ 2つのこたえ

アンリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん！ 2つのこたえ

【Nコード】

N5476N

【作者名】

アンリ

【あらすじ】

『けいおん！』の舞台にオリ主を2人加えた二次創作です！
文才が皆無なので色々な意味で許せる方のみ閲覧下さい。

また基本的にオリ主視点で送っていきますが、2人いるためコロコロ変わります。

かなりの読解力をお持ちでも、意味不明になってしまいかねないの

ですが、それは自分の文章力が皆無な事が原因なので遠慮せず罵倒してください。

それではお暇の方よろしかったらご覧ください！

第1話（前書き）

回想ぽく始まっています。

ある男子生徒（主人公）視点で書いています。

第1話

「湊とは別のクラスか…残念だな。」

「何が残念なのか分からない。私はむしろホッとしてるから。」

「相変わらずだな…せっかく同じ桜ヶ丘高校に入ったんだから仲良くやろうじゃないか。」

「小学校、中学校と同じだったのに今更珍しくもないわ。」

「小学校の時はもうちょい優しかったじゃないか!」

「その過ちに気付いたから、今こうなってんのよ。」

「だから…まあいいか。湊かそういう性格なのは分かってるからな。」

「何でも知ってるみたいない方で。それじゃ、3組さん。」

「はいはい、それじゃあな2組さん。」

2人同時に教室のドアを開ける。

隣り合ったクラス、そのどちらにもすでに何名かの新生が席に座るクラスに、一人は後ろのドアから、一人は前のドアからそれぞれのクラスに入っていた。

「はい、皆さん揃ってますね。それじゃあまず、皆さんご入学おめでとございます。私が1年3組の担任の高橋です。これから3年間よろしく願います。」

新入生の登校時間になりクラスの全員が座った所で、担任の高橋先生がタイミング良く入ってきた。

「えー、クラスを見て分かる通り、殆どが女子生徒ばかりですが、桜ヶ丘高校は今年から共学になり、見て分かる通り男子生徒もいます。皆さん仲良くして下さいね。」

その発言で注目を受けるのが、クラスに僅か4人しかいない男子生徒だ。

二十四の瞳以上の瞳が自分含めた男子生徒に注目する。

「はい、それじゃあもうすぐ入学式なので、皆さん廊下に並んで下さい。並びは今座ってる出席番号順でお願いね。はい、じゃあ立た立った。」

高橋先生が手をパンパンと二回叩くと、生徒達はそれに合わせたかのようにぞろぞろと廊下へと出て行く。

この時も皆初対面が殆どのためか、殆どの生徒が無言だった。

まあたどたどしく話しを繰り広げる女子や、長い黒髪の子に後ろから肩を回していた茶髪の女の子がいたりもした。

俺は数少ない男子生徒と話しをしようとしたが、出席番号が離れていたためか、話すには少し離れていたのととりあえずは真面目に列に並んでいた。

そして他の1年生の教室の生徒含めた全員が並び終わると、みんなして仲良く入学式へと向かった。

「入学式お疲れ様でした。それでは一応今日はこれでおしまいなのですが、せっかくですしクラスの皆さんに自己紹介をしてもらいましょうか。…そうですね。名前だけでもなんでもいいので、とりあえず出席番号早い方からお願いします。」

定番の事なのだが、高橋先生の一言にクラス全体がざわつき始める。

やはり第一印象は大事なので考え込むのも分かるが、聞いた瞬間机に突っ伏す程のことか、出席番号1番さん。

…そういつ俺も結構緊張してるんですけどね。

「それじゃあ出席番号1番の秋山さん。お願いします。」

「ひっ！」

…

…ひ？

出席番号1番、秋山さんは呼ばれると奇声を発しながら立ち上がる。

…なんか驚かせることあったか？

秋山さんの発した奇声に周りがざわつく。

「はい、皆さん静かに。…それじゃあ秋山さんお願いね。」

その少し騒ぎ出したクラスを先生が諫め、笑顔で秋山さんの方を向きながら、壇上の方へと促した。

「は、はい！」

秋山さんは意を決して壇上まで、長い髪をたなびかせながら歩いていき、流れるように壇上までたどり着いた。

それはもう貫禄があり、よく見ると物凄く美人の秋山さんがあのように自信溢れる風に歩くと、しっかり者の委員長タイプだな…なんて考えていた。

きつとクラスの人気者になるんだろうな…なんて考えていると、秋山さんが咳払いを一回し、自己紹介を始めた。

「…皆さん…始めまして…。わたしのやまえ…な、名前は！あきやま…秋山漣…です…。よ…よろしくお願いします！」ゴンッ

…

…なんか色々すげえ…。

ぼそぼそと何かを言った後、自分の名前を始めから噛み倒し、最後に勢い良く挨拶したのと同時に教卓に頭ぶつけてる。

秋山さんはそこから全く動かない…それを先程秋山さんと肩を組んでいたカチキューシャをした茶髪の女の子が、肩に担ぎながら無理やり席に戻した。

「あ…こいつはこいつやっなんで気にしないで下さ…い。あは、あはは。」

「…それじゃあ次は浅田さん。お願いします。」

そうして初日は終わっていった。

その後机から一度も顔を上げない秋山さんをみんなして心配（好奇の目）しつつも、つつがなく自己紹介は続いていき、最後の人まで終わると、先生がてきとーに纏め解散となった。

俺がクラスを出るときには、倒れ伏せる秋山さんとその肩をポンと叩く田井中さんの姿があった。

その後人気者になるだろうと予想されていた（男子一同より）秋山さんは、休み時間になると直ぐに田井中さんとどこかにいなくなり、姿すらあまり見せなくなっていた。

そんなは○れメタル秋山さんと初めて話したのは、部活動の仮入部期間が終わってから直ぐの、平凡な日の昼休みだった。

弁当を家に忘れた俺が学食から帰ってきた時、ふと教室の前のドアの近くの席の隣に置いてある物に目がいった事があった。

下の方が丸くては大きく、上に視線をずらしていくと細長い直線が…まあ簡単に言うならベースの形をしているものだった。

それは俺にとって少しは興味を引くもので、ベースの置いてある壁際のすぐ近くの空いていた席に勝手に座って、触れないでただぼーっと眺めていた。

「俺のより…ちょっと短くて小さいかな？なんてベースなんだろう？」

「…フェンダー…だよ…。」

「えっ？」

俺のぼんやりとした独り言に、返事が返ってきた事に驚き、返事が聞こえた方…真後ろに振り向く。

そこには長くて綺麗な髪を持ち、身体全身でオドオドしながら、少し涙目になっている秋山さんが立っていた。

「…あつ、これ秋山さんのなんだ。ふえんだーって言うんか。聞いたことある気がするな。」

そこで俺が座ってる席が秋山さんの席だと言うことに気付いた。

「あつ、ごめん。勝手に座っちゃって。」

すぐさまぱつと立ちあがり、どうぞ、と手を差し出しながら言った。

「あつ…ありがとう。」

なぜか秋山さんは礼を述べた後、自分の席にそつと座る。

スカートに変な折り目が付かないように注意しながら座る仕草を、間近で見て少しドキツとした。

「いや、俺もベース弾くんだけど、実は全然ベースの事知らなくてさ。ふえんだーだっけ、それも聞いたことある程度なんだよね。」

ひとまず不信がられないように、自分がベースを見ていた理由を話す。

先程からフェンダーの発音がいまいち分からず、ふえんだーと少しぼやけた物言いになっているのは気にしない。

その発言を聞いて、秋山さんがピクリと反応しこちらを振り向いた。先程までオドオドしていた全身が一変して、今ではこちらを見る顔に、なぜか輝きを感じる。

そして次に秋山さんが発したのは、

「ベース弾くんだ！どんなベース？どのくらい弾いてるの？弦は何使ってる？利き手は？それから…。」

とベースに関しての事を、こちらの答える暇も与えずの質問だった。てか最後の質問はベースと関係あるのか？

「えーっと…使ってるベースは…ベッケンバウアー？みたいなやつ」「リッケンバッカーか！モデルは？」…それは分らんけど、ベース始めたのは5年前だな。利き手は右利きだけど。」

「そっか、5年もやってるんだな！いや、リッケンバッカーか！私もベース初めて買ったとき悩んだんだよね！なんでリッケンバッカーにしたの？」

俺が質問に間違えつつも、たどたどしく答えるとすぐさま新たな質問を繰り広げてくる。

…秋山さんってこんな活き活きと話せるんだな。

「それは親父がくれたからかな。両親が趣味でバンド今でも組んで、それに付き合ってたらベース教えてもらって、ある程度弾ける

ようになった所で、誕生日に貰ったんだ。」

「そうなんだ！じゃあ好きなベースリストは？」

…これは本当に秋山さんなのか？

実は秋山さんの皮を被った田井中さんとかじゃないのか？

「いや、俺音楽関係の知識全く無くてさ。ベースリストどころか自分の使ってるやつすら分からないんだよね。」

「そうなんだ。…それじゃあ「おい、漣！何してんだ！」」

そんな俺の不甲斐ない反応に負けじと、質問責めを続ける秋山さん
を呼んだのは、皮被っていると予想されていた田井中さんだった。

「あれ、お邪魔しちゃったかな、漣ちゃん？」

「っゝ馬鹿っ！そんなんじゃない！私は！…えっと…」

「ああ、白木遊だ。自己紹介遅れてごめん。」

「あつ…ごめん。…それで白木君とベースの話をしてただけだよ！
白木君ベース弾けるんだってさ！」

秋山さんがこちらをチラチラ見ていたので、今更ながらちゃんと自己紹介をする。

「ベース弾ける…それマジかよ！」

「あつ… ああ、別に上手くもなんともないけどな。」

田井中さんも俺がベースを弾けると聞いた途端、驚きの表情を浮かべる。

…ベースってそんな難しいものだったのか…。

「そうだぞ。だから別に白木君とそんなはな「それはさておき、白木！今日の放課後空いてる？良かった、それじゃあちよつと付き合ってくんない？」こら！そんな強引に話を進めるな！困ってるだろ！」

…なんか2人してすげえはしゃいでいる…。

たぶんその理由のど真ん中に位置するのが俺なのだが、完全に蚊帳の外状態になっている。

なんだかこれ以上巻き込まれたらめんどくさそうだと感じた俺は、2人がコントを繰り広げている間に鳴ったチャイムの音をキツカケに、そつと自分の席へと戻っていった。

…絶対放課後呼び止められるな…。

「よ〜し！それじゃあ行くぞ〜白木！」

ほらやつぱりな。

田井中さんはホームルームが終わると直ぐに俺の席の前に立ちふさがり、仁王立ちして昼間に言っていた事を実行しようとしていた。

「…まあ暇だから良いけどさ。どこに連れて行くつもりなんだよ。」
席の隣に掛けていた鞆を引っ付かんで、立ち上がる。

「いいところ、だよ。よし、行くこうぜ！ 漣！」

そういつて答えをはぐらかし、ただ腕を引っ張って俺を連れて行く田井中さん。

そんな強引な田井中さんに溜め息を吐く秋山さん。

そして状況が全く掴めない俺の3人で見た目仲良く教室を出た。

3人は生徒達を作る流れとは逆らい、階段を駆け上がり、そしてようやくたどり着いたのは…音楽室？

「さあ入った入った！」

たどり着いた最上階に待ち受けていた部屋に俺が立ち尽くしているのを、田井中さんが扉を開けて無理やり部屋に押し込んだ。

「よし、ムギ！ カモ連れてきたぞ！ ……ってまだ来てないのか。まあいいや。よし、とりあえず白木はそこに座って！」

…カモらしいんで逃げた方がいいんじゃないか、って気がするがここはとりあえず大人しく座っておこう。

「それじゃあこの紙に自分の名前やら判子やらして」だから突然すぎる！」「ウギャー！」

また秋山さんに拳骨もらってる田井中さんを取りあえず置いといて、俺は渡された用紙の中身を確認する。

「これって…入部届？」

「そう。実は私達軽音部に入ってるんだ。…といっても私達含めて3人しかいないから、正式に部になってないんだけどね。」

そこになってようやく秋山さんが少しずつ説明をしてくれた。

もうすぐおやつの時間といった場合に、

窓からの光が眩しい音楽室で、

俺の前には入部届が置かれている。

もう桜も少ししか残っていない4月の中頃に、俺はまだ出来てもい

ない軽音部に勧誘された。

第2話（前書き）

アニメだと1話終わり…ですかね

第2話

ぼかぼか陽気で暖められた教室で、俺は一人ほぼど真ん中に位置する自分の席にぼんやりと座っている。

春の陽気は毎年のように眠気を誘うもので、肘を突きながら欠伸をかみ殺すのに必死になるばかりだ。

先程の三時間目の英語が終わって間もない事もあり、眠気はピークに達している。

それなんで休み時間を利用して、少しでも回復を望みたいところなのだが…

「おゝい、遊！今度こそ入ってもらおうぞ！」

そんな重要な安眠時間は、本日4回目の妨害によってまたも妨げられた。

「…あのな、律。だから俺は入んないって何回も言ってるだろ。」

「私だって何回も入れ、って言ってんだから入れよ！」

…これだ。

今朝から続く休み時間の度に行われるイベント…軽音部への勧誘が再び強制的に起こる。

「漣、お前から律になんとか言ってくれよ。」

もちろん律の隣にはいつものように漕がいる。

その漕に俺は助け舟出した。

「遊…諦める。律はそういうやつなんだ…。」

その助け舟を漕はそっと受け流す。

「そんな…」

「それじゃあ話も纏まったことだし、この入部届にサインしてもらおうか！」

「だからしないって言ってんだろ〜！」

もう堂々巡りだ…。

「なんでだよ〜！こんな美女3人から誘われてるのに断るんだよ〜！…もしかしてこっちなのか？」

そついうと律は右手を開いて、甲を左の頬に当てた。

「なわけあるか！てかそんなこと大声で言うな！周りに勘違いされるだろ！」

「じゃあなんでだよ！私達をその気にさせといて、気まづくなったらポイツと捨てるのか！」

「その発言も誤解しか生まねーよ！ああ、田中さん！誤解だからそ

んなこそこそ話さないで〜！」
俺のクラスでのキャラが〜。

一学期の始めのキャラ決定期に悪いイメージがついていく〜。

「律、もう諦めよう。遊にだって事情があるだろうし。もうすぐチャイムも鳴るからさ。」

「くっ…このままで済むと思うなよ〜！」

そういつて律と澪はそれぞれの席に戻っていった。

…また来るんだろうな〜、律のやつ…。

今日だけで4回…昨日の放課後を入れたら5回も勧誘されている。

昨日もあっさり断ったんだけど、その後も小一時間くらい説得されただよな〜、後からきたムギと合わせて3人に。

そういえば呼び名だが、その時に律に無理やり変えられた。

殆ど初めて話す2人と初対面の1人の名前をいきなり呼び捨ててるのに少し躊躇いも感じたが、秋山さん…じゃなくて澪が恥ずかしがりながらも、俺の名前を呼んだのでしょうがなくみんなを呼び捨てにすることを許容した。

そんな事実も併せてか、クラスで少し変な噂が立ったとか立ってないとか。

そんなこんなで今日のところは授業が終わると直ぐ帰宅した。

やはり放課後も律に誘われたが、今日は予定があったためきっちり断った。

…マジでっついで…。

俺は家に着くとすぐさま自室に入り、ベッケンバウアー…じゃなくてリッケンバツカーを担いで再び外へ出る。

外には既に運転席に座り俺を待つ母さんの姿があった。

「遅いぞ〜、遊〜。」

「悪い悪い。ちょっと帰るのに手間取って…。あつ、湊は学校から直接行くってさ。」

「それじゃあ行きましようか。レッツゴー!」

そういつて俺と母さんに乗せた車は目的地へと向かう。

目的地とは歩いても20分くらいのところなのだが、流石に荷物を持ったままだと俺はともかく年食った母さんには長距離だろう…口が裂けても言えないが。

住宅街を通り抜け、人通りの多くなる駅前の駐車場に車を止める。

その駐車場のすぐ横の建物が目的地…俺はスタジオに自分のベースと母さんのギターを持って入っていった。

重々しい扉を開け中に入っていくと、すでに湊は到着していてMYスティックを握りドラムの位置を一つ一つ微調整していた。

「早かったな。こっちは最速でこれだったのに。」

学校から家まではダッシュ、家からは一度も信号に引っかからずここまで来たってのに。

「…学校出るのが遅かったからじゃない…?」

…いつもの湊らしく、相変わらず面白くもなんともないことを話す。

俺はベースのチューニングを湊に教わりながら終え、続いて入ってきた母さんと3人で合わせる。

母さんがギター、俺がベース、湊がドラムをそれぞれを奏でていく。

…なんか湊今日はやけに強く叩いてる気がするな…。

「お〜い、ミナちやくん。」

今度ライブで行う曲を一通り演奏し終えたところで、スタジオのドアを開け入ってくるふくよかな人影が1人…松原さんだ。

通称マツさんは演奏が終わるタイミングを見計らって部屋に入ってきて、特有の砕けた笑顔を見せている。

「マツさん。どうしたの。」

そんなマツさんの好意的な笑みも気にせず、湊は普段と変わらず冷静に、一見冷たく返答した。

まあこれが湊にとっての親しい人への態度だということとは、ここにいるメンバーの周知の事実のため、誰も気にすることはない。

「来週の金曜日なんだけどさ、どうしてもメンバー足らなくてさ。手伝ってくれない？」

マツさんは俺の両親とは別のバンドも組んでいるのだが、どうやらメンバーが集まらなかつたらしい。

メンバー全員が基本的に社会人のオヤジバンドなので、しょっちゅうメンバーが欠けることがあるのだが、そういつときに活躍するのがサポートメンバー、俺や湊である。

学校などの用事であり練習に参加できない俺達は、演奏できる場所をそういった方法でこれまで作ってきた。

ヘルプを受けた湊はいつものようにこちらを一瞥する。

俺はその視線をシッシツと振り払うような動作をする。

これもいつも通りの態度：『いいから頑張ってこい』という合図。

湊は毎回全く変わらないこの動作をしつかりと確認してから、マツさんのヘルプを受けた。

そして湊はマツさんのバンドメンバーが集まるスタジオへと移動していった。

来週までという短い時間で大まかな曲の進行から細かな演出を覚えなければいけないのだから、一分一秒惜しいのだろう。

…まあこれまで何度もそんな事態をくり抜けてきた湊なら、2日もあれば余裕なんだろうけどな（実証済み）。

湊が出て行ったことで奏でられる音がベースとギターのみとなり、その後は親父と他のバンドメンバーが来るまで自主練をひたすら繰り返しているだけだった。

…これで5回連続で湊だ。

確かに湊は単純に考えて3倍可能性があるし、オヤジバンドに若い女の子がいると少し見た目爽やかになる。

だから湊ばかりがサポートを頼まれるのも分かるのだが…なんだか
んだで俺はステージに数ヶ月は立っていない。

まあ俺の担当はベースで、俺に頼む前に基本的に同じベースリストで
ある親父が先に誘われる。

その時点で更に不利なのだから…しょうがないっちゃしょうがない。

…それでも俺はステージに立ちたかった。

練習の時はメンバーとしか味わえなかつた一体感を、会場全体と感
じ会えるスケールの大きい一体感…それが味わえるあの舞台に立ち
たかった。

けどまだまだガキである俺には、一緒に演奏してくれるであろう
メンバー候補が湊くらいしかない。

よって自分でバンドを組むことすら出来ない状態なのだ。

…そんな悔しさを無理やり押し込み、今日を終えるのは何度目にな
るんだろっつな。

『軽音部に入れよ〜!』

ふと昼間の律の台詞が頭の中に反響した。

「軽音部…か。」

一つ寝返りを打つ。

スタジオから帰ってきて早々に風呂に入り、ベッドに倒れ込んでからずっと同じ体勢だったため、少し筋肉が固まっていた。

今日は一日中同じ事を言われ続けたためか、頭にびったりと律の台詞が残っていた。

部屋中に骨がボキボキなる音が鳴り響く。

「そういうのも…いいのかもな。」

とにかく今日はもう寝よう。すでに決心した思いを伝えるのも明日。

俺はゆっくりと眠りの世界へと落ちていった。

「じゃあな、遊！」

「また明日、遊。」

次の日の放課後、律と澪は俺に一言告げてすぐさま何処かへと向かおうとしていた…たぶん音楽室だろう。

今日の律は昨日までとは違い、勧誘など全く行わずただ普通に朝の挨拶をして、ただ普通の日常会話をしただけだった。

けして軽音部の話はしない…てか音楽の話すらしなかった。

たぶん澪やムギに止められてんだろうな、と確信に近い考えを抱く。

そして足早に去っていく2人を俺はただぼんやりと眺めていた。

…よし、それじゃあ行きますか。

いつも通り鞆を片手に持ち、手の甲を肩に乗せるように鞆を背中に回す。

湊は今日もバンドの練習があつて、すぐさま帰宅しただろう。

そして俺は人の流れに乗って階段を下へと降りていった。

「なあ、やっぱり遊を誘おうぜ。」

「迷惑してたんだから止める、って昨日決めただろ！」

「でもさ。あと一週間しかないんだぜ。それまでにあと1人捕まえなきゃいけないだぞ。」

「それはそうだけど、やっぱり澁ちゃんの言うとおり無理矢理は良くないわよ。」

「ムギまで！じゃあどうすんだよ！」

「それを考えるのが部長なんじゃないのか、律？俺達を引っ張ってくれや。」

「まだ部が成立してないから部長じゃないやい！」

「そんな理屈あるか！だいたいいつも律はワガママなんだよ！」

「なんだよ！そういう澁だって何にもアイデアないじゃないかよ！」

「なんだと！」

「ふ…2人とも落ち着いて！」

「来て早々修羅場とか勘弁してくれ。俺はもっとゆっくりまったり音楽を楽しみたいだけなんだよ…。」

「…？」

「へっ?」

「あら?」

透、律、ムギはそこでこの場では有り得ない声色の低い声が聞こえていることに気が付いたのか、声のする方向：音楽室の入り口の方に振り向いた。

「だからまあ仲良くやろうぜ。何について騒いでんのかは知らねーけど、音を楽しむ、って書いて音楽なんだからさ。」

そこに立つのは昨日入部を断った170cmを超える身長をしていて、軽薄そうな顔をしている短髪の男子生徒だった。

「ん?そんな俺の顔が良いからって見つめられると、照れちまうからやめてくんない。」

「「「遊さん!!!」「」」

「それでその部長(仮)。入部届持ってきてやったぞ。ありがとう受け取りやがれ。」

俺は律に近付くと、右手に持っていた入部届をビラビラと眼前にたなびかせる。

律はそれをただ無言で受け取った。

「遊…本当にいいのか?」

無言で入部届を受け取る律の代わりに、漣が俺に訊ねる。

「俺はな、追っかけてくるもんには拒絶反応を見せちまう。」

「？」

漣は俺の発言を聞いて頭を傾げる。

まあ待ってって。

まだ結論は話してないから。

「でも急に離されちまったら追わずにはいられない性格なんだよ。」

…決まった！俺格好いい！

「…なにが言いたいんだ？」

「私もよく分からなかったわ。」

…へっ？

「いやいや！だからこれは「よっしゃ〜！軽音部の幕開けだ〜！」

…もういい…、俺が悪かったさ…。」

こうして新生軽音部が創設された。

ドラマー兼部長田井中律、ベース秋山漣、キーボード琴吹紬、そして黒一点の俺、4人が集まったことによって。

これらがどんな化学反応を見せるのかはまだ分からない…。

「そつえばギターは誰がやるんだ？」

…律！、いきなり勢いを摘むな！

第3話（前書き）

再び初日の話からです。

視点がいろいろ変わってて、見にくいと思いますがご了承ください…

すみません！拙い文で！

第3話

「はいはい、それじゃあな2組さん。」

そういつて遊は3組の教室へ入っていくのを、一瞬で確認してから2組へと入っていく。

中にはあまり生徒はいなくて、私を含めて5人しかいなかった。

話しているのは茶髪の女の子とメガネを掛けた女の子だけなので、やたらと静かな音が聞こえる。

私は教室の前黒板に貼ってある座席表に則って自分の席へと座った。

入学早々一番後ろの席を引けたのは、ラッキーというほかない。

といつてもすぐに席替えする可能性も否めないので、ぬか喜びにならないようこの辺で余裕を作っておこう。

私が席に鞆を掛けて20分程だつてようやくクラス全部の席が埋まった。

因みに先生は15分ほど前から来ている。

…初日から遅刻してくる人もいるのね…。

「はい、みんな揃ったようだね！じゃあ高校生活初のホームルームを始めたいと思います。僕がこのクラスの担当の橘です。皆さん一年間よろしくお願いします。」

…一年間だけなんです、とか突っ込みを入れるべきなのか迷う話し方をしないで下さい…。

「せっかくの入学式に間に合うよう桜が咲いてくれたので、皆さん綺麗な桜の木を見ながら登校できたと思います。それじゃあさっそく自己紹介でもしていきましょうか。」

それじゃあで繋がる要素がないわよ。

それに自己紹介を今したって、クラスメートの名前を覚えられるやつなんていないんだからする必要あるの？と思ってしまった。

「それじゃあ綾辻さんから順に行こうか。その場でいいんで、名前と趣味、又は長所とか何でも良いから一つ挙げていこうか。」

結局なのだが、席替えは登校初日に行われた。

帰る間に番号の書いてある折り畳まれた紙を、一人一枚ずつ引いてから帰らされて、次の日の朝には新たな座席表が黒板に貼ってあ

った。

結果私はクラスで一番左後ろ…つまり窓際の最後尾を引き当てていた。

そして私は現在3時間目の歴史を終えたばかりの休み時間を堪能していた。

窓の外をぼんやりと見ながら、自宅から持ってきた水筒に容れてきた飲み物を一口一口とすすする。

私はとても外交的な性格とはいえないのは自覚している。

そのためこうやって1人で休み時間を過ごすことなど、小学生の頃からのので慣れている。

別にあえて周りを遠ざけている訳ではなく、話し掛けられたら適当に相づちなり返事をするし、冗談は言ったりはしないが世間話程度ならこちらから振ることもある。

しかし今はそういう気分にもならず、ただ1人ぼんやりとしていたかっただけだ。

気持ちが落ち着かない…落ち着かない理由も理解している。

それは昨日のこと。

遊を尻目にまた私がサポートを頼まれたこと。

…そしてそれを打ち捨てられた子犬のような表情で見ていた遊を忘

れられないから。

確かにこれで5回連続…累計21回目だ。

意外とライブに出たがる遊の約4倍は私がサポートメンバーを務めていた。

その累計21回の内、15回は昨日のような表情をしていた事も明確に覚えていた。

「はあ…。」

そんな遊の表情が頭の中を駆け回り、私の気分すら犯していくのだった。

…一口すすする。

いつの間にか空になりかけていたのにその時気付いて、再び水筒から液体を注いだ。

今日もサポートメンバーとして、マツさんのバンドと一緒に演奏しなければいけない。

学校終わってからすぐさま向かうよう伝えているから、遊と一緒に帰って遠回りする時間はない…というより、マツさん達にとっては一分一秒を惜しむくらいなので、そんな自分の都合を押し付けることは出来なかった。

なみなみと注がれたカップをこぼさないように注意を払いながら口元へ近付ける。

そういえば昨日話していた子達は誰なんだろうか？

昨日の放課後、スタジオまで一緒に向かおうと約束はしていないものの、そうしようと思えば3組の前で待っているように見えたのは2人の女の子と仲良さげに話す遊の姿があった。

その後話しかけてきた遊に、『私は直接向かうから急ぎなさい。私より10分遅れたら罰ゲームね。』と言っている自分がいた。

…二口する。

外をぼんやりと眺めながら、私の昨日の行動を顧みているとふと誰かに見られている視線を感じた。

首を90°正面に戻し前を向くと、犯人はすぐに見つかった。

ボサボサの癖のある茶色の頭を2本のヘアピンで一部だけととのえてようとしている？女の子…平沢さんだ。

ただただこちらをじっと見てくる平沢さんに、少しばかり不信を抱きながらもとりあえず話しかけてみる

「…どうしたの？」

それを期に平沢さんは席を立ち、私の席の後ろまで数歩歩く。

「みなちゃん…。やっぱりいい匂いだ〜。」

そういつてここ数日行っている事を今日も私の許可なく始めた。

後ろからガバツと抱き付いて、肩に顎を乗つけてリラックスする…
これがここ最近の平沢さんが毎日行う行為だ。

「だから止めなさいって。暑いから。」

「ふわふわ〜。ぷにぷに〜。」

「…それは私に対する侮辱として受け取ってもいいのかしら。それに甘い匂いってこれのことでしょう？」

私は右手でカップを掲げる。

そこからは特有の甘い匂いが香っていた。

「違うよ〜。みなちゃんからの匂いが良いんだよ〜。それに柔らかいし。」

「…あと5秒数えるまでに離れなさい。痛い目に遭いたくなかったらね。」

「ええ〜！こんな気持ちいいのに〜！」

そういいながらも平沢さんは渋々といった感じで離れていった。

「よろしい。二度とやらないように。」

この台詞も何度も言っているのに聞かないのは…私舐められてる？

「それより聞いてよ〜、みなちゃん。」

「今の私の発言をそれより、なんて軽くあしらうんじゃないわよ。」

「和ちゃんが部活してないだけでニートだって言うんだよ！そうじゃないよね、みなちゃん！？」

「平沢さんには悪いけど、そう言われても仕方ないんじゃない。実際家に帰ってもゴロゴロしてるだけなんですよ？」

平沢さんは最初の自己紹介でいきなり『好きなことはゴロゴロすることです！』とクラス全員に発表していた。

「グサツ！…でもみなちゃんも部活入ってないでしょ？」

平沢さんは一度自分の胸に矢でも刺さったかのような演技をした後、反撃を始める。

「私は課外活動してるから。前にも言ったでしょ？バンド組んでるって。」

正確にはサポートメンバーなので組んではいないのだが、そんな細かい違いなど分からないだろう。

あえて説明することでもない。

「うー…じゃあ私もバンド組む！」

「楽器買うところからメンバー集めるまでで3年間終わりそうね。」

「グサグサツ！」

とうとう平沢さんは倒れ込んだ…また私に抱きつくように…。

「ねえ、湊。良かったらなんだけど唯の事助けてやってくれない？」

私がいっまでもうだうだとしながら抱き付く平沢さんを放って置いてみると、何枚かのプリントを抱えた真鍋さんに話しかけられた。

「真鍋さん…、あなたの所為でこうなってるんだからね。」

「分かってるけど…。でもこうでも言わないと唯は動かないと思うの。でも私は生徒会の仕事があるから、あんまり手伝ええないし…。お願い！」

「いやよ。私放課後は忙しいの。」

真鍋さんの頼みを即断る。

「お願い！私、唯に頑張ってもらいたいのよ！」

「みなちゃん！私からもお願い！」

真鍋さんに習って私の横にパツと移動し、2人共々頭を深々と下げた。

教室中から大小様々な声が響きわたる。

その教室の一角、少し周りよりも静寂が包んでいて、2人が頭を下げていて1人がそれを見て困惑している。

…一分経過、2人は何一つ無駄口を叩かず頭を下げている。

…一分三十秒経過、あの平沢さんすら真面目に頭を下げている。

よほど二トにはなりたくないのかもしれない。

…二分経過、もうすぐ四時間目のチャイムが鳴る。

…分かった。お昼休みにでも手伝ってあげるから。」

そこでしょうがなく折れる。

「でも放課後は本当にダメだからね。忙しいのは本当なんだから。」

「ありがとう、湊。そう言ってくれと思ったわ。」

「言わせといて何言ってるのよ…。」

「あら？そんな気は全然無かったわよ。」

「はいはい。」

「良かったね、和ちゃん！」

「…唯…何のことが分からないで頼んできたの？」

「うん…。」

…はあ…面倒な事引き受けちゃったかも…。

「で、軽音部に入部してみました！」

右腕をビシッと前に出し、そこから手だけをこねまたビシッと上に
向けながら平沢さんは言った。

私は白米へと向かっていた箸をぴたりと止めた。

「平沢さん…前に言った話し聞いてたのかしら？」

私は頭を抱えるのみだった。

あれからというものお昼休みになる度に、私は平沢さんを連れて部活動誘いの紙が貼ってある掲示板まで足を運んだ。

そこには様々な部活の紹介がされていたのだが、平沢さんが目ざとく発見した軽音部のポスター…正確にはそこに描かれていたギター？の絵を見つけた時に、私があることを言った。

「軽音部は廃部寸前で、もし入ってもすぐに無くなっちゃうかもしれないからやめときなさい…って言ったわよね。」

「…そ、そうだったっけ…？」

これだ…。

平沢さんは予想通りと言っているのか分からないが、記憶力が極端に悪く前の日に『じゃあ今日の放課後、調理部に行ってみる！』と言ったのを、たぶん5時間目の授業中には忘れ、次の日の朝こちらから聞いた所で思い出す、といったことが何度あったからだ。

因みに調理部含め諸々の部活は真鍋さんによって却下が出たため、お蔵入りとなっている。

なんでも爆発させかねないとか…。

私は化学部は薦めてないんだけど…。

「…まあいいか、仮入部期間は過ぎてるけど、ちょっと見に行ってみてから決めれば良いんだから。」

「もう入部届出したから大丈夫だよ。」

…

「…入部届…出しちゃったの？」

「うん！だからもう行くの忘れたりしないよ！」

平沢さんは的が外れた事を仰りながら、メロンパンを頬張っている。

「もし軽音部が創部されなかったらどうするのよ？」

「大丈夫だよ。私が入ればきつと。」

「つまり辞めにくくなるってことは分かるわね？じゃあ一つ質問、平沢さんは何か楽器弾けるの？」

「あつ！それならね、私幼稚園の時に、先生にカステネット叩くの褒められたことあるから大丈夫！」

えっへん！と口の周りにメロンパンの粉をつけながら自慢してきた。

「…軽音部では基本的にギターとかベースとかそういう楽器を使うと思うわよ。もちろんカステネットは全然使うことないでしょうね。」

「

「…えっ？」

「まあ今から覚えれば良いんじゃない？リズム感はあるみたいだからきつと大丈夫よ。」

「え〜〜っ！」

「このくらい1人で行きなさいよ。」

「怖いんだよ…。見捨てないで〜、みなちゃん！」

今私達が立つのは階段を一番上まで上がった先にある教室…音楽室だ。

ここにきた理由はただ一つ…昨日私が出した入部届を無しにしてもらう事だ。

私は深呼吸を一つして、音楽室のドアを開け…ようとしては、躊躇うといったことを何度もしていた。

だって軽音部は人数不足で廃部寸前なのだから、『絶対に逃がさない〜！』くらい脅されるのではないかと不安になってしまったから

だ。

「失礼します。」

そんな躊躇する私に替わってみなちゃんがドアを開け、颯爽と入っていった。

「待つてよ、みなちゃん！」

その後ろ姿にすがりつくように私は音楽室に入っていく。

音楽室の中は想像していたものと違っていて、柔らかな光が差し込む空間だった。

「すみません。こちらは軽音部の…遊？」

昼寝したら気持ちよさそうだな、なんて思っていると、先に入ったみなちゃんが立ち尽くして軽音部の人達を見ていた。

その顔は驚きに満ちていて…

少し悲しげな顔をしていた。

第3話（後書き）

なんかキャラが上手く出来てないな、って投稿してから思いました。

直せよ！俺！

第4話（前書き）

まだアニメの第1話です

第4話

もうあと少しで5月を迎えようとしていたある日のこと、雲一つない空とは対象的に私の心には暗雲がたちこめているように気分の優れなかった。

といっても別に体調を崩したという訳ではなく、なんとなく身体の一部一部の動作が感覚に比べ遅いような気がしていただけだ。

別段理由があるというわけではないので、尚更どうしていいのかわからなかった。

…遊と演奏しなくなって一週間が経過していた。

以前までなら一緒に下校して、一緒にスタジオに行って、一緒に演奏する、といった事が週に3回、多いときで5回はあったのだが、それがすでに十日もないのだ。

しかもその理由をそれとなく聞いてみても、そういう話になるとすぐに気まずそうに笑って誤魔化そうとしてくるだけだった。

そのため一週間が経った今でも、理由が分からずじまいになっている。

…別にそれが今回の不調の理由だとは思ってはない。

今日も遊が教室からいなくなっているのを確認してから、平沢さんと音楽室へと向かった。

理由は平沢さんが入部届を出してしまった軽音部に、入部することを辞めることを伝えるためだ。

平沢さんは私の説明を聞いた後、何故かは分からないが軽音部を何かの恐怖の対象として認識し、入部を断りに行くことを決めたのだ。もちろん私は曲がりなりにも元女子校なのだから、そんな見ではつきりと分かるような畏怖の対象はいないだろう、と思っている。

あえて説明するだけの余裕がこちらにも無かったので、スルーしたが…。

それで平沢さんは今日の放課後に断りに行く事を決めたようだ。

そこまでは別に良いのだが、その後『一緒に断りに行って〜!』と泣きつかれ、今に至る。

まあ先週にライブは終わったので、放課後が暇になったので仕方なく付き合っていた。

「う〜…怖いよ〜みなちゃん…。」

「いいからとつとと入るわよ。…失礼します。」

「ああ〜、待ってよ〜みなちゃん!」

先程からドアの前で躊躇っている平沢さんを無視して、私が先にドアを開けた。

「すみません。」

私は辺りを伺うように軽音部へと入っていった。

そこには音楽室にあつて当然といえる楽譜立て、ドラムなどが並んでいて、他には長椅子や棚が置いてあつた。

そしてお目当ての軽音部員は、音楽室の中程の座席が4つ、四角になるように並んだ席に座していた。

軽音部員はドアの開く音を聞いてこちらを向いている。

手前側に黒の長髪の女の子、その正面にカチューシャをした茶髪の女の子、黒髪の女の子の隣にはクリーム色の長髪をした女の子が座っていた。

そしてクリーム色の髪の女の子の正面、カチューシャをした女の子の隣に座っていたのは…

「遊？」

最近話す機会すら少なくなった、隣のクラスの男子生徒だった。

「あれ？湊、どうしたんだよ？」

遊は1人立ち上がると、私に訪ねてきた理由を聞いてきた。

「私は…ここにいる平沢さんに付いて来ただけで…平沢さん…ギターが物凄く上手い入部希望者の平沢さん!？」

いつもより要領の悪いような回答をしている私を無視して、カチュ

「シャをした女の子がガバツと立ち上がり、平沢さんへと近寄っていく。」

「えっ？えっ？」

平沢さんはなされるがままにグイグイと先程まで座っていた席の方に引っ張られていく。

「遊！ちよつとどけ！そこは平沢さんの席だ！」

ピクッ

「律が立てばいいだろ！」

ピクピクッ

「律も遊も落ち着けて。2人きてくれたんだから、2人共立てばいいだろ？」

ピクピクピクッ

「お客様ね。遊さん、お茶のお手伝いお願いしても良いでしょうか？」

ピクピクピクピクッ

「OK！じゃあ俺とムギは準備してるから、その間に律と漣で話を聞いていてくれ。」

…ピキッ

「じゃあ湊と平沢さんは…どうした、湊。そんなおっかない顔して？」

「気安く話しかけないで。知り合いだと思われるじゃない。」

「？まあとにかく座って待ってなって。美味しい紅茶でも…って湊には飲み物はいらさないか。」

そういつて遊はムギさんと2人で紅茶やらお菓子やらの準備に行ってしまった。

平沢さんも無理やり座らされていたので、仕方なく私もムギさんが座っていた席に座る。

「えーっと、こちらが平沢さん、だよな？すまないが名前を聞いてもいいかな？私は秋山澪っていうんだ。」

隣に座っている秋山さんが、こちらに気を使って名前を聞いてきた。

「…別に私はただ付き添いに来ただけなんで、気にしないで下さい。」

それを私は比較的冷たい声質で突っぱねた。

「あっ…ごめん。」

「おいおい、せっかく澪が気にかけてくれたんだから、自己紹介くらいしたあげなって。」

そこで紅茶の乗ったお盆を持った遊が、紅茶を一人一人に配りながら私に言ってきた。

「遊、彼女と知り合いなの？」

そこで今までずっと平沢さんに質問責めしていた律さんが、私の説明を遊に求めた。

「遊が話しかけてきたから、遊なんかと知り合いに思われちゃったじゃない。次回から気をつけてよね。」

「そんなこと言うなよ。お兄ちゃん泣きたくなるだろ。」

ぶいっつと顔を逸らす私の頭を撫でながら、遊は流れのまま説明した。

「えっ…えっ！えーっ！お兄ちゃんって…遊って年上！？浪人してたのか！」

…律さんは全くもつて的外れな反応をした。

「してねーよ！…俺と湊は双子なんだよ。二卵性だから似てはないけどな。一応俺の方が先に生まれたからお兄ちゃん、ってことだよ。」

「本当生まれた瞬間から私は不幸なのよ。誰かさんの所為で。」

「湊…なんか今日機嫌悪くないか？目尻がいつも以上につり上がってるぞ。」

「話しかけないで、歩く変質者。変態が移るじゃない。」

「変質者は普通歩くわ！」

「遊…そこがツッコミどころじゃないぞ…。」

すつとぼけた発言をするバカ兄貴に、秋山さんが呆れたながらもツッコミをいれる。

「まあ湊がこうなのはいつものことだし、それより今は新入部員だ。えーっと、ひらさきさんだっけ？」

「平沢さんよ。本当記憶力無いわね。」

私を無視して話を進めようとするバカに、キツチリと訂正を入れてそうはさせまいとする。

「ちゃんとあとで説明してやるから。えーっと、平沢…。」

「あつ、平沢唯です！よろしくお願いします、お兄ちゃん！」

…ブチッ

「いや…俺は「遊、黙ってて。」「…何故に俺が「黙ってて。」「…はい。」

「平沢さん。これだけ時間があつたんだから、もう言えたわよね。じゃあ私は帰るから、あとは頑張つてね。」

「ま、待つてよ、みなちゃん！置いてかないで〜！」

「そうだ、みなちゃん。親友を置いていくなんて」「次その名で呼んだら一生許さないから。」「…すみません…。」

「ちよつと待ってよー！…えーつと、えーつと、…すみません！入部するの辞めさせて下さい！…っていいにきたんです！」

席を立ち、ドアノブに手を掛けようとしたところで、ようやく平沢さんは胸の内を吐き出すように、本題を切り出した。

「えっ…。」

律さんは驚愕の表情を浮かべて動かない。

なんだか額の光具合も収まった気がする。

「…すみません…。私ギターも弾けないですし、軽音、ってもっと簡単な音楽についてやると思ってたから…。期待させちゃってすみません…。」

平沢さんの正真正銘の心からの言葉に、私を除く4人が啞然とする。

まあ別に4人いるみたいだから、平沢さんが入部しなくても軽音部は創部するみたいだし、わざわざ止める人もいないだろう。

「それじゃあ…。」

平沢さんも言いたいことを全て言い終え、私の方へとことこ、歩いてきた。

私は平沢さんが手の届く位置まで近付いてきた事を目で確認してから、今度こそドアノブに手をかける。

「…ちよつと待った。」

そんな誰しもがこのイベントは終わったと思いこんでいたその時、この場で唯一性別の異なる人間が動き出した。

「でも音楽には興味あるんだよね。だったらとりあえず俺達の演奏聞いてみてから考えてくれないかな？俺みたいな初心者もいるから、平沢さんでも安心して入って大丈夫だからさ。」

遊が初心者…少し引つ掛かる点があるが、その言葉を聞いて『演奏してくれるんですか！？』、と平沢さんがキラキラした顔つきで、部屋の中央に位置する長椅子に戻って座ってしまったため、しようがなく一時保留して私も平沢さんの隣に座る。

「みんな、準備できたか。」

「ああ！」「はい！」

「私の役目を取るな！」

一番最前列にいる遊が楽器の準備を終えると、後ろを振り返って他のメンバーを伺う。

律さんだけは不服そうにしていたが、他のメンバーは元気良く返事をする。

…って遊が持つてるのって…。

「よし、じゃあ『翼を下さい』です。…てかこれしか練習してないんで、出来ないんですけどね。」

「そんなことわざわざ言わなくていいだろっ！いいからやるぞっ！
はい、1、2、3、4！」

カツ、カツ、カツ、とスティックをぶつける音が4回響き渡る。

それを合図に4人がメロディーを奏で始めた。

『翼を下さい』：誰もが一度は聞いたことがある曲だと思うが、今奏でられているのはそれをアレンジしたものだっ。

通常よりテンポが速く、より軽快な曲調に仕上がっている。

原曲よりも若者向けのこれは、平沢さんにはお気に召したようで今ではリズムに合わせて拍手をしている。

確かにカスタネットがあれば上手く叩けているだろう、と全然関係ないことを考えてしまった。

曲は最後の大サビを迎え、4人のノリも最高潮に達する。

今では平沢さんは鼻歌混じりに楽しそうに聞いている。

そして最高潮に盛り上がり、スネアのタタンという音で幕を閉めた。

少しの静寂の後に、パチパチと一つの拍手が聞こえた。

先程まで一緒になってノリにノってた平沢さんのだ。

遊は額に滲む汗を拭いながら、『ありがとうございます』と私達に

向けて礼をした。

「えへへ、…どうだったかな？」

先程まで威勢の良かった律さんが、少し照れながら平沢さんに評価を訊ねた。

まあ…あれだけノリノリで聞いてくれたのなら、好評が得られたと思うだろう。

「えーっと…なんていうか…、すごく言葉にしにくいんですけど」

「うんうん！」

律さんは平沢さんの答えを食い気味に熱心に反応する。

…私は1ヶ月弱平沢さんと生活してみても分かったことがある。

それは…全く行動が読めないことだ。

「あんまり上手くないですねー！」

…やっぱり。

遊や律さんが『バツサリだ〜！』って顔してるわよ。

「確かにそうだった。リズム隊の2人がしっかりしてないし、キーボードもそれで微妙にずれてたし。」

私もその流れに乗って、思ったままの事を口にした。

「何よりギターが技術不足ね。初心者もいいところ、ってレベルだわ。」

特に遊に対しては厳しい視線付きで酷評した。

凹む軽音部員…。

まあまだ結果は出てない…。

「でもなんだかすごく楽しそうでした！私この部に入部します！」

「へっ？」「

…

再び啞然とする軽音部員。

秋山さんと律さんがお互いの頬をつねっている。

いち早く立ち直った遊はムギさんとハイタッチしてした。

「湊…、悪かったな、黙ってて。」

「…」

「…俺さ、正直湊が羨ましかったんだ。俺よりも父さん達の力になれてるし、なによりステージに立てることが、さ。」

「…確かに私の方が頼まれるから…。でもそれは私が器用貧乏だからだし…。」

「それでもだよ。…実は隠れてギターの練習始めたのも、湊がいたからだよ。…まだまだなんだけどな。」

「…」

「晩飯の時にでもちゃんと話ささ。…サポートメンバー辞める、って。」

「勝手にすれば。それじゃあ私は練習あるから。」

「ああ、…頑張れよ。それとすまん。」

「なんで謝るか分からない。じゃあね。」

ガチャ…ガチャン

「お〜い、遊〜！何やってんだ〜！今から歓迎会するぞ〜！」

「分かった分かった。今行くから少し待ってっ。」

第4話（後書き）

湊はヤンデレじゃないから！

ちょっと気にしすぎなだけだから！

第5話（前書き）

ここからアニメ2話に入っていきます。

第5話

時刻は午後三時過ぎ、部屋中にカチャカチャという西洋陶器のぶつかり合う音が聞こえる。

今日は晴れ渡った空が広がっていて、窓から部屋の中に吹き込む風がとても気持ちよかった。

そんな暖かく柔らかい春の風を堪能していると、横から手が伸びてきて目の前にカップを丁寧に置いていく。

カップには透き通った鮮やかな深紅の液体が入っていて、外から吹き込む新緑のすっきりとした香りと、喧嘩せず混ざり合って鼻腔へと流れ込む。

俺は音を立てないようにとカップに手をかけ、眼前まで持ってくる。

途端に新緑の香りよりも紅茶の甘い香りが強くなる。

それがまた喉をかき鳴らす要因となる。

眼前にあるカップを更に口元へと近づけていく。

そして甘い匂いに誘われるように、深紅の液体を流し込み、先程から渴きに渴ききっていた喉の奥を潤した。

口の中に液体を流し込むと、香りまで同時に流れ込み身体全体で茶葉からでる成分を味わうことが出来た。

甘美な感覚に全身を許していると、コトツ、と何かが置かれる音が

鳴る。

そこを見やると、桜の花びらがポイントに入った皿にエクレアが人数分置かれている。

…ああ、ここはいい喫茶店だな…。

「ここは喫茶店じゃないんだ！ちゃんと練習するぞ！」

…せっかくトリップしてたんだから、邪魔しないでほしかったな…。

「まあ落ち着けよ、遷。唯も入った事だし、まずはティータイムからだろ？」

「昨日やっただろ！遊ものんびりし過ぎだ！」

「今日ギター家に忘れちゃったからパスで。」

「なに〜！ズルいぞ、遊！じゃあ私もスティック忘れたからパス！」

「あつ、じゃあ私もキーボード忘れた〜！」

「えっ！？じゃあ〜、えーっとえーっと…私も何するか忘れたからパス！」

「みんな悪乗りするな〜！！！」

「律も部長なんだからちゃんとしろよ。」

「やゝい、怒られてやんの。」

「遊もだ！」

「俺部長でも何でもないだろ！」

「遊さんは副部長でしょ？」

「いつのまに！？陰謀の匂いが！」

「エクレア美味し〜。」

…今日も軽音部は平和です。

「はあ…ごめんな。平沢さん。本当はこんなんじゃないんだけど…」

「唯、でいいよ！私も澪ちゃん、って呼ぶから！」

「えっ…」

急に澪はもじもじし始める。

唯の方をちらちらと上目遣いに見ながら、口をパクパクとさせる。

「じゃあ…ゆ、い？」

時間にしてほんの十数秒、漣は顔を真っ赤に変色させてから小さな声で途切れ途切れに呼んだ。

「なぐに、漣ちゃん？」

唯は名前で呼ばれるのが嬉しいのか、満面の笑みを浮かべ漣に返事した。

「うっ…。」ボンッ！

それに反応してまたもや紅潮した漣の頭から煙が噴火した…いや、そんな気がしただけだけどね。

「漣は恥ずかしがり屋なんだ。ついでに怖いものが苦手、男性が苦手エトセトラエトセトラ。」

「その男嫌いの所為で、最初はいちいちビクビクされてて、すごい罪悪感感じてたんだぞ…。」

幼なじみで漣の事をよく知る律がカバーする。

この2人は本当に仲が良く登下校を共にするのは当たり前、休日暇になるととりあえず、と相手の家に行ったりして、ほぼ毎日顔をあわせているらしい。

「そうだ！ねえ、漣ちゃん。漣ちゃんはどうしてギターじゃなくてベースにしたの？」

「えっ！それは「どうやら漣の中ではギターはバンドの中心に位置するらしく、そこに立つなんて考えるだけでも不可能だかららしいぞ。」」

漣が質問に答えようとしたところで、俺が割り込んで先に答える。

前に俺に話した時にも（全く聞いてない）勝手に自爆していたので、今回もきつとなるだろう、と先に手を打っておいたのだ。

それでも顔を真っ赤にして、俺のことを上目遣いで見てくる。

…やめい。

「そうなんだ。なんだか漣ちゃんらしいね！」

…確かに。

「じゃあムギちゃんは？キーボード凄く上手だよね。キーボードどのくらいやってるの？」

唯は次のターゲットと定めたムギに顔を向ける。

「私は4歳の頃からピアノを習ってたの。コンクールで賞を貰ったこともあるのよ。」

「それはすごいな！なんで軽音部なんかに入ったんだよ？」

「おーい、遊。それ軽音部員が言う台詞じゃないぞ。」

「だって部長をあんなちゃらんぼらんがやって…あぶなっ！」

律の奴が手元に置いてあったピックを顔目掛けてぶん投げてきやがった…。

なんとか抜群の反射神経を見せ避けた…あれ？

「今投げたの俺のピックじゃねーか！」

「へーん！置いてた遊が悪いんだよ〜！」

仕方なくお茶会の席から離れ、野蛮な猿に投げ捨てられたピックを拾いに行く。

「クスクス…、私はこれがあつたから入部したの。一緒にいたら楽しそうでしょ、唯ちゃん？」

「そうだね、ムギちゃん！」

「はあ…、いい加減にしる2人とも！」
未だ小競り合いを続ける2人を、微笑ましいと見守るムギと唯…そして堪忍袋の尾が切れ、容赦なく2人の頭を叩く溻。

まるで漫才師と観客の図だった。

「じゃあ遊君はなんでギター？」

大人しく席に座り、頭を抑える俺に今度はお鉢が回ってきた。

ちなみにちゃんとお兄さんから遊君へとシフトチェンジをさせた。

最初は渋ってたが、土下座までしてようやく変えることに成功した。

「ギターが一番カッコいいから…かな。」

視線を外し、ぶっきらぼうに答える。

「でも遊はベースやってたんだぜ。でもな「言うなっ!」「」

「?なんでベースやってたのに、今はギターなの?」

「実は私と律とムギの演奏を聞かせた事があってな。その後、『漣には勝てないからギターにする』って言ったんだよ。」

「ぎゃ〜!止めて〜!人の恥ずかしい過去をほじくり返さないで〜!」

「…ドンマイ!遊君!」

唯はなんか凄い嬉しそうな顔をして、肩をたたいてくる。

仲間を見つけた、と満面の笑みに書いてあるのが見えた気がする。

「へえ〜、みんないろんな理由がある「私はスルーかよ!」「…だつてりっちゃんはいメージできるし〜。」

「確かに。ドラムかMCかガヤだよな。」

普段も演奏中もうるさいしな。

「なに〜!私にだって複雑な事情の一つや二つあるわ!」

これは昨日決めたこと。

ギターが2人いれば演奏の幅が広がる、と漣の提案を唯が飲んだ形で決まった。

…全然考えずに頷いているように見えたのはきつと気のせいだ。

「えっ？」

エクレアの2本目に手を出し、口の周りにべったりとカスタードクリームをつけながら、唯はその言葉で思考を停止させた。

まあ昨日決めただけで、ギターみたいな高価なものを簡単に買えるなんて思えないので、期待はしていない。

「あつ、私ギターやるんだった。」

「忘れてたんかい！！」

ボケにはツッコミ…唯の両隣に座る（正確には、俺は唯の斜め左前）2人でビシッとツッコむ。

俺は言葉だけで殴ったりは勿論しない。

「ま…まあ昨日の今日だし、仕方ないんじゃないかな。」

「た…確かにな。」

ムギと漣は心の中ではずっとこけつつも、しょうがない…とフォローする。

「ギターか……。ギターってどのくらいするの？」

「うーん……。安いのなら1万円代からあるけど……。あんまり安すぎるのも良くないからな。5万円くらいあれば丁度良いのが買えると思う。」

漣はその質問に人差し指を顎に当てながら、斜め上を見上げつつ答えた。

「5万!?」……私のお小遣いの10ヶ月分……。」

「どうして遊まで驚いてるんだよ?遊のギターはもつとするだろ?」

「はあっ!?!?」

「たぶん10万円代だよ。」

「じゅ……。じゅうまんえん?」

「20ヶ月分……。」

2人して机に突っ伏す。

先程の漣と同じように頭から煙がぷすぷすと出ていた。

「はっ!りっちゃん!」

その時唯に電流走る。

「部費で落ちませんか」

「落ちません」

しかしそれはあまりにも愚策だった…。

唯は再びバタリと倒れた。

「とにかく楽器が無いことには始まらないし…」

「よし！それじゃあ今度の休みにギター見に行こうぜ！」

律はバツと立ち上がり、なぜかガッツポーズをしながら提案した。

「休みの日…って土日か。まあ俺は大丈夫だけど…」

結果みんなが了承して、日曜の昼に駅前で待ち合わせする事が決まった。

「よし！それじゃあ今日はこれで解散だ！帰るぞ〜！」

「お〜！…！」

「練習つ…！…はあ〜…もういい。」

ため息を吐きつつも鞆と、自分のベースを肩に掛ける。

「よし！じゃあ今日はみんなで駅前のマックにでも行こうぜ〜！」

「うん！行こー行こー！」

「悪いけど俺パスな。この後職員室行かなきゃなんねーんだ。」

そこで1人鞆を担がない俺が話に割り込んだ。

「え〜！一緒に行こうよ〜！」

「仕方ないだろ、唯。遊にだって事情があるんだから。」

「そうよ、唯ちゃん。遊さんを困らせちゃダメ。」

泣きつく勢いを見せたお子様を、年上（精神年齢的に）2人が宥める。

「じゃあついでに音楽室の鍵も頼むな！じゃあな〜、遊！」

律は全くそんなことを気にせず、準備室の鍵をポイツと投げて帰ろうとしていた。

「へいよ。みんなもまたな。」

ポイツと投げられた鍵をパシッと受け取り、そのままみんなに別れの挨拶をする。

「じゃ〜ね〜、遊ぶ〜ん！いつか絶対マック行こうね〜！」

「お先に失礼しますね、遊さん。」

「また明日な、遊。」

パタンっ…タン、タン、タン…

「…よし、じゃあセットしますか。」

俺は音楽室のドアから離れると、音楽室の倉庫のドアを開ける。

律のドラムセットや譜面台などの備品が置かれている中に、俺が今朝持ってきた黒のケースがてきとーに置かれている。

俺はそれを片手で担ぎ上げ、再び普段のスペースへと戻る。

「えっと…これをここに刺して…あつと、チューナー忘れてた。」

ぎこちない手付きで準備を進めていく。

「…こんなんでもいいか？まあ今日はこんな感じでいいか。」

普段湊にやってもらったチューニングだが、自分でやるとこつも時間がかかることを再認識した。

自分のスペックの低さのため息の1つも吐きたくなるが、まあ今更だろつ。

左手で弦を軽く押さえ、右手を踊らせる。

指から生み出された振動が身体を震わせた。

夕暮れの音楽室で1人奏でられる音は、普段音楽室からたまに聞こえていたであろう合奏よりもシンプルで小さくて…でも同じくらい楽しく弾けた。

4本の弦から重低音が奏でられる。

頭の中で律のパワフルなドラムが、ムギの繊細なキーボードが、漣の支持するようなベースが、そして未だ聞いたことの無いギターの音を想像して合奏する。

上手いとか下手とかはどうでもいい…ただ楽しく、好きなように音が紡がれていく。

「やっぱベースの方がいいな〜！この低音が身体に響く感じが良いんだよな〜！それなのにこうして…こうすれば気持ち良く高音出せるしな〜！…ってもうこんな時間かよ！」

すでに辺りはもう真っ暗になっていた…時間にして1時間強？

「やべっ…そろそろ帰らないと…。またやっちゃった…。」

確か2日前も警備員さんに、注意されるまで演奏してたもんな。

アンプのポリリウムを絞って、シールドを外す。

アンプを元の位置に戻して、ベースと鞆を肩に引っ掛けた。

自主練…ただしベースのだが…。

前までの練習場に行きづらくなったことと、漣の前で弾くのは未練たらたら男に見えるため、こうして遅くまで残って練習している。

朝ベースを準備室に置きに来て、夜持って帰る…これが週に2回ほどの習慣だ。

…まあこれが2回目なんだけどな。

音楽室の鍵を閉めて、職員室へと向かう。

…こんな軽音部が練習しないの、湊にバレたら絶対怒られるだろうな…。

第5話（後書き）

まあ単なる日常の風景です。

正直カットしても良さそうな所ですが、まあせっかく仕上げたんで、ただ載せたかった…って気持ちでアップしました。

第6話(前書き)

まだアニメ2話です！
しかもまだまだ続きます！

第6話

「やばいつ！遅刻する！」

「あれ？遊、どこ行くの？」

「わりい！ちょっと急いでるんだ！早くしないと待ち合わせに遅れちまう！」

「またなの？夜遅くまで遊んでるからよ。何度言ったら分かるのかしら。。。」

「お説教はあとで！それじゃあ行ってくる！」

ボタン！タッタッタッ…

「何よ…あんなオシャレしちゃって。。。」

「遊は軽音部の子とデートらしいわよ。やっとあの子にも春がきたのね〜！」

「…お母さん、何で知ってるの？」

「湊から貰った服を着てるのを見て、これは何かあるな〜、と思って聞き出したのよ。結局軽音部の子と買い物ってことしか分からなかったけど。。。」

「そんな頬を膨らませても可愛くないからね、私の年齢のトリプルスコアの人。」

「歳は言つな〜!!」

「…じゃあ私も出掛けるわね。」

「無視するな〜!!…でどこに行くの？尾行？」

「スペアの弦を買いに行くだけよ。それじゃあ行ってくるね。」

「は〜い。晩御飯までに帰ってくるのよ〜!!…ふ〜ん、一昨日そのスペアを買いに行ったばかりなのにね〜。ふふっ。」

時間25分前：なんとか間に合ったな。

ふう、と一息を入れて近くのベンチに腰をかける。

白く小さな塊の雲がまばらに存在するも、ほぼ快晴の青空が広がる日曜の昼、11時前。

駅のロータリーから少し離れた木陰の作られたベンチに、俺は1人座っていた。

今日は軽音部のみんなと楽器店に行き、唯専用ギターを探そう！という趣旨で約束された。

俺としてもギターの（とベースの）スペア弦やらを買いたかったので丁度良かった所だ。

家からダッシュして、普段20分かかかる道のりを無理に8分に縮めたため、体中が酸素を求め息遣いが荒い。

ぜー、はー、という音が耳の奥からリズムよく聞こえてくる。

そもそも何故こんな早く来ているのかと言うと、父さんに『男は女の子が来る20分前には待ち合わせ場所に着いてないといけない』という男限定のルールを仰せ遣っているからである。

…ちなみに湊には『女の子は5分遅れるくらいが丁度良い』なんて教えていたが…。

そのため湊との待ち合わせの時に限り、お互いの性別がよく逆転する。

「財布は…まあ結構あるだろ。」

黒のジーンズの左ポケットに収まる財布を、入れたままポンと叩く。

この厚みなら2万弱くらいならありそうだな。

小遣いは月1万と結構貰っているのだが、それだけでなく今までの蓄積がこの膨らみを生み出している。

「おはようございます、遊さん！」

「おはよう。一番はムギか。まあ妥当かな。」

普段のイメージからなんとなく来る順番を予想していたのだが、本命ムギ、對抗湊、大穴律の下馬評が出来上がっていた。

結果本命が本命の意地を見せ付けた形となる。

「他の皆さんは？」

「まだ来てないみたいだ。まあ15分前だしそんなもんじゃないのかな。」

普段なら5分後に集合完了するからな。

「そうなんですか。私こうやってお友達と待ち合わせするの、って初めてだったから早く来ちゃって。」

「いやいや、早く来る分はむしろオツケーだからな？…けどな、逆に遅刻しちまうと何言われても絶対服従しなきゃなんなくなっちまうんだよ…。たとえば10秒でもな…。」

すでに実体験で体験済みだ。

「おう！ムギに遊！早いな！」

「おはようムギ、遊。待たせて悪かったな。」

二着は対抗と大穴の2人：ビデオ判定なら大穴かな。

「おはよう、りっちゃん、漣ちゃん！」

「おゝす、2人とも。」

「唯はまだか？」

「まあ唯だしな。万馬券だし、まだ来ないだろ。」

「万馬券？」

対抗馬が首を傾けて聞いてくる。

「いや、こつちの話。それより今日行くのは10GIAでいいの
か？」

10GIAがこの辺で一番大きく、メジャーな楽器販売店だろう。

CD、DVDも販売してるから音楽好きでなくとも、一度は来店し
たことがあるだろう店だ。

「そうだな。私はそこしか知らないから良いんだけど。漣は
何か他は分かるか？」

「うーん：電車を使えばもう少し大きな所もあるけど：今日の所は
いいんじゃないか？」

「そうだな。唯のギターの下調べ感覚だから、近場でいいだろ。
それで肝心の唯は？」

すでに長針が真上を向いている…1時ピッタシだ。

「ん？あれ唯じゃねえ？おゝい！ゆゝいゝ！」

だいたい50メートル先か、相変わらずピョンピョンと全体的に跳ねた髪型をしている万馬券がようやく見えってきた。

「あつ！りつちゃん！」

「手は振らなくて良いから、早く来いよ！」

「うん！」

唯はタツ、とかけ始める…すぐにおばちゃんにぶつかって倒れた。

次にペコペコ頭を下げつつも、笑顔でおばちゃんとなんか話している。

次に近くにいたベビーカーに乗る赤ちゃんを眺め始めた。

次に犬を見付けて、なんか抱きつき始める。

次に、次に、次に…

…

たった50メートルがこんなにも遠いとは…。

律も澪も俺と同じようにがっくりと肩を落とす、唯の気が済むのを

ゆっくりと待っていた。

ムギだけはなんか凄く楽しそうにしてたけど…待つのが楽しいのか？

「いや、お待たせしました。おはよう、みんな！」

「おつす。じゃあ早速行きますか。唯、いくらくらい持ってきたんだ？」

たかだか5分遅れくらいじゃ何も言わない。

普段の自分を考えれば当然だ。

「えーつとね、お母さんに無理言って、お小遣い前借りしたから5万円くらい。」

5万か：ギターどんくらいするか分かんないけど、そんな大金あるんなら大丈夫なんじゃないかな。

「それだけあればまあまあのギターが買えるぞ。」

そして俺の考えは、漣により真実味が増した。

「…でも、今なら買える〜…。」

「ちよい待て。」

漣がふらふらと洋服屋に入ろうとした唯の襟首をガツと引き寄せる。

「それはギター買うお金だろ!」

「でも〜…。」

「いいじゃんいいじゃん!ちよつと入って見ようぜ〜!」

「ちよつと律!」

漣のお怒りのお言葉虚しく、律、ムギ、唯の順に店に入って行ってしまった。

…

「…行かないのか?」

「…遊は?」

「ここ女性服専門店だからな。二度と入りたくない。」

「そっか…。」

そわそわ、そわそわ、チラッ、チラッ

「…別に行つてきて良いぞ。俺はその本屋にいるから終わったら電話してくれ。」

「!…ごめん。じゃあなるべく早く戻ってくるからな!」タツタツ
タツ…

俺を気にして動かなかった澁も、了承の言葉に心底嬉しそうな表情を見せ、ピョンピョンと店の中へと飛び込んでいった。

ポツンと1人残された俺。

「よし…じゃあ行こつかな。」

見た感じ2時間くらいいけそうな気がする。

とりあえず1時間やって、後は適当に…とプランを組み立てる

そして俺は本屋の隣にあるカラオケ店へと突っ込んだ。

ひっさしぶりだな〜!

…

…

…

「で、結局2時間歌って、満足して帰ろうとした…であってるか?」

「すみません。」

「私達がたまたま見付けなかったらどうするつもりだったんだよ！
携帯の電源も切ってたし！」

「すみません。」

「遊君しっかりしてよね！」

「すみません。」

「でも私達が丁度お店出たときに会えたからいいじゃない。私達も
同じくらい楽しんじゃったんだから。」

「そうだな。じゃあ昼飯奢ったんだから、チャラな。」

「急に態度をデカくするな！！」「」

「いつ！…た〜。」

2つの拳が頭に強襲した。

「まあまあまあ。」

「それじゃあ次はどこに行こうか？」

「そうだな〜…。」

「あれ？何か忘れてる気が…」

「楽器だ！楽器！」

「ああ、そういえばそうだったっけ。」

「遊も忘れてたのっ！」

えーい、涙目で見てくんじゃない！

「じゃあ早速向かうか！」

「「「お〜！」」」

「…はあ、やっとか。」

「ドンマイ！漣は間違っていないからな！」

「ここが楽器屋さんか。」

「私達もよく使ってるんだぜ！」

「私は初めて。」

「俺は何回か来たことあるな。」

楽器店10GIAに入ると、すぐに様々な楽器の並ぶコーナーへと向かう。

そこにはお目当てのギターだけでなく、ベースやドラムセット、他にもアンプやスタンドまで色々な物が売られている。

「すごい！ギターがいっぱい！どれを選べばいいか分からないよ……。」

「考えるな……感じる。」

「そうだな、唯は女の子だし、初心者だからネックが細くて、ギターが軽いのにすれば「わ〜！これ可愛い！」」

俺の戯れ言は何もなかったかのように溻に無視され、溻の的確な助言を唯は無視した。

「どれだ？ギ……ブソン？おい！これ25万もするぞ！」

「あつ、本当だ……流石に手を出せないね……。」

「あつちにもつと安いのがあるぜ〜。」

「でも……。」

チラチラとギブソン・レスポール何度も見やる唯。

やっぱり諦めきれないらしい。

「25万じゃな〜。」

「…そう言えば私も今のベース買うとき悩んで、悩んで…手に入れたんだよな。」

「私も中古のドラムセット値切って、値切って…」

「結局盗んだ、と。」

「ちゃんと買ったっつーの!」

「店員さん泣いてたけどな。」

ツッコミを入れる律に更に濁がツッコむ。

「ねえ、値切るって?」

そこで一番『値切る』事が似合わないムギが意味を聞いてきた。

「欲しいものを手に入れるために、努力と根性でまけさせる事だよ」
「!」

「凄いですね!何か憧れます!」

過去に店員を泣かせた値切ラーの律の説明を、キラキラした表情で聞いている。

ムギは何かと憧れる体質というか、性格というかよく分からない特性をもっているが、これは憧れる場面じゃない気がする…てか庶民

がみんなやる訳じゃないからな！

「…やっぱこれが良いのか、唯？」

俺達が話をしている間も、ずっと同じギターを眺めていた唯に訊ねる。

唯はその発言すら聞こえないほど、集中して見続けている…てか俺みんなに無視されてたりしない！？大丈夫！？

「…よし！じゃなみんなでバイトしよう！」

そこで部長より提案。

「バイト？」

「ああ！唯のギター代を払うために！」

「ええっ！…そんなの悪いよ。」

そりゃそうだ…俺でも流石にそこまで厚かましくなれない。

「これも軽音部の活動の一環！ってことで。」

「私もやってみたいです！」

「りっちゃん…、ムギちゃん…。」

それでも2人はノリノリだ。

「…漣、俺達もやんなきゃいけないみたいだぞ？」

「…しょうがないさ。何より唯のためなんだから。」

「…しゃーないな。」

「漣ちゃん…、遊君…。」

…こうなりゃ俺も覚悟を決めた。

「よし！それじゃあ来週の休みに、みんなでバイトするぞー！」

「「「「お〜！…！！！！！！」」」」

「じゃあ今日は帰るか。行こうぜ…ってあれ？湊じゃん。」

「遊…。」

「どうしたんだよ、そんなこそこそして。」

「別に…それでなんで軽音部でバイトすることになったのよ？」

「あゝ、まあ成り行きだな。湊は何買いに来たんだ？」

「私は…弦を買いにきたの。」

「あゝ、その手に持つてるや…っ。」

「…」

「それ…ベース用のか？」

「…うん。今度のに必要だから。」

「…そっか。」

「…遊、また一緒に…やらない？遊だったら全然いつでも戻れると思うし、それに「湊」…何？」

「…ごめん…。」

「…そっ。」

「俺は軽音部を選んだんだから、こっちで頑張るよ。」

「…」

「湊？」

「…分かった。それじゃあまた家でね。」

「？ああ、じゃあまた家でな。」

すたすたすた…

「…湊泣きそうだったな。相変わらず泣き虫なんだから。」

「ね、遊君。どうしたの？」

「うわっ！抱きつくな！」

「お、何照れてんだ、遊。」

「普通照れるわ！」

店内に騒ぎ声が響いた。

それを背に私は一人帰路へとついた。

第6話（後書き）

この辺基本的にノープランで書いてたんで、辻褄が合うのか…不安ですね（笑）

第7話（前書き）

やっとバイト始めます。

第7話

ペラッ

「楽しんで儲けられるバイトって無いのかよ。」

ペラッ

「そんなのあるわけないだろ。」

ペラッ

「あゝ！ウエイトレス募集だつて〜！これは〜？」

ペラッ

「でも遊さんと一緒に出来なくなりますよ？」

ペラッ

「いやっ！私を見捨てないで！一緒に過ごした日々はただの遊びだったの！？」

ペラッ

ペラッ

「…いやっ！私まだ捨てられたくない！」

ペラッ

「…おい！何でも良いからコメントくれ〜！」

「遊、ちょっとうるさいから黙ってて。」

「…はい。」

明けて月曜日、俺達軽音部員はいつものように音楽室でゆったりまったり、午後のティーブレイクを堪能していた。

みんなが話したいことを好きなように話して、みんながそれを広げていく…そんなお気楽な部活動？を毎日のように送っていたのだが、今日はいつもより少し真面目な表情で、一つの雑誌を全員でのぞき込むように見ている。

バイト求人誌：俺達が唯のギターを買うために、中身を舐め回すかのように見ているのがそれだ。

ついでに今あっちいけ、と長椅子の方に追いやられたのが俺だ。

「…つーか接客業なんて溲出来んのかよ？なんかぶつぶつ言ってるぞ。」

「…お客さんが怖かったら注文取りに行けない、失敗したら周りの人に注目される、私が失敗したらみんなに迷惑かかる…」

ぶつぶつ…

「…接客業は却下だな。他には…」

「これなんてどうかしら？」

律がペラペラめくっていた求人誌をムギの指が止める。

そこに書かれていたのは…

「…交通量調査？」

「ああ車の通った数を数えるやつか。」

「これなら漣にも出来そうじゃん！どうだ、漣？」

4人の視線が一点に集中する。

「…うん、それなら出来そう。」

バイトやるに当たって最大の関門である秋山嬢の了承を得て、軽音部最初の活動である資金確保作戦が一気に進む。

てかまだ一回も合わせてないのに、軽音部なんて名乗っていいのか？

昼休みの時間を利用して、求人誌に書かれた番号に電話してみると、タイミングが良かったのか人気が無かったのかは定かではないが、一挙5人の採用された。

日時は今週の土日の2日間。

俺達は殆どが初めてのバイトということもあり、4日間だけお菓子とお茶をバイトの話を肴にしながら過ごした。

そして当日…

「じゃあ必ず2人が調査をしている、というのを守ってお願いします。私は5時になりましたらこちらに来ますので、そちらの記録用紙をその時に渡して下さい。よろしいですね？」

「……はいっ！（はっい。）」「……」

長々とだるそうに要領悪い説明を受け、みんながやる気を見せた良い返事をする。

「…じゃあお願いしますね。」

その返事に満足したようで、雇用者はすたすたと路肩に停めた車へと向かっていった。

あまりにもしつかりした高校生に感心したからか、ドアミラー越しにこちらをチラチラと見ている気がする。

「…おい、遊。ちょっとやる気出せよ。」

「おいおい…やる気に満ち溢れている俺を捕まえて、何言っかと思

えは…。」

「じゃあ返事くらいちゃんとしろ！その所為であの人凄く怒ってたじゃないか！」

「ちゃんとしただろ、ビブレード効かせて！」

「それが駄目なんだよ！！！」

ゴッ…

「よし！それじゃあ張り切ってやりますか！」

「遊君…大丈夫？」

調査すべき道路が広々とよく見えるよう置かれたパイプ椅子に座り、腕をまくる。

なんか頭がズキズキするが気にしない。

「それにしても何で俺じゃなくて唯がカウンター持ってるんだよ。」

「

「なんか薄ちゃん淒く考えてから私に渡したよね。なんだったんだろう？」

カチッ

「…俺はこれに負けたのか…。」

カチッ

「?とにかく頑張つてバイトしょ！」

「へいよ。…つてすでに二台分押してないぞ。」

「えっ!?!…てへへ、失敗失敗。」

カチカチカチッ

「…もういいや。」

それから基本的にテキスト不真面目男の俺と、天然のんびり屋の唯は仕事に集中するなんて事殆ど無く、話していたら予定の時間が過ぎた…って感じだった。

「お〜い!そろそろ交代しようぜ〜!!」

「おつ、もうそんな時間か。じゃあ後は任せ…た?」
手を振りながらこちらに近付く律…1人。

それを見て上がりかけた腰が止まる。

「遊はもう一回だぞ。」

……はい？

「じゃあ頑張つてね、遊君！」

「ちよっ！？…いやいや、田井中さんや。こりゃあいったいどういう事ですか？」

唯は律と替わるように休憩地点へと走っていく。

「どこの方言だよ、それ。あと遊は休憩無しな。」

「さらつと理不尽叩きつけてんじゃねえ！」

「じゃあ遊は私達女の子だけの時に、誰かに襲われても良いって言うの？」

「そんな上目遣いされても変わらん！…もしそうなら大声で助けを呼べ。警察呼んできてやるから。」

「…助けられないのかよ…。」

「だから上目遣いは…まあいいか。任せろ、足は早い方だ。すぐに連れて来るから。」

「結局助けないんか！」

カチッ

「律：お前のことは忘れないよ。」

「勝手に殺すな〜！てか助けるよ〜。私みたいな可愛い子がいるんだから、あり得なくは無いだろ〜？」

… ああ、めんどいなあ〜。

律の事だから助けるって言うまで退かなそうだし、だからってな〜。…。

… よしっ。

「確かに律みたいな可愛い女の子がいたら、その危険はあるよな〜。」

「えっ!?!?…!」

「そういえば軽音部には確かに美人所が集まってるけど、その中でも部長を任されるくらいの器量を持つるのは律だけだもんな。本当に凄い女の子なんだな、律は。」 「えっ…えっ!」

「いや〜、律はきつとこれまでめちゃくちゃモテてきたんだろうな〜。こんなに可愛いし。ファンクラブなんて出来てたりして。」

… 律の弱点…それは意外と恥ずかしがり屋であることある事だ。

あまりそんな一面を見せないのだが、俺はムギに誉められる度に、微妙に顔を朱くしているのを見逃してはいなかった。

そういうときは、照れ隠しに笑って話を無理やり終わらそうとする

癖みたいなのがあるので、今回も照れくさくなって、すぐに話を終わらせるだろう。

「ん？どうした律？なんか顔が朱いぞ？」

「！！」

いかん…完全勝利を予感してか、つい顔がにやけてしまう。

この後『ハッハッハッ！とうとう私の美しさに気付いたか！』とかなんとか言ってこの話は終わるはずだ。

うまく行けば『しょうがないから、今回は私が1人でやってやるから休憩していいよ！』とか言ってくれんじゃないか、って期待までしてしまう。

「…遊。」

「ん？なんだ、律？」

あれっ？

「私気分が悪くなったから、休憩する…あとは任せた…。」

すたすたすた…

…

カチッ

…

「…あれ？」

カチカチツ

…

…カチツ

…

「遊、何したんだ？」

「いきなり犯人扱いつ！！」

それから5分後、俺の前に現れたのは少し不機嫌な漣だった。

「律が『漣！何も言わず替わってくれ！』って凄い形相で言ってきたぞ。遊が何かしたんじゃないのか？」

「…うーん、心当たりないな。」

一つしか。

「そうなのか…。律どうしたんだろっな？」

やはり長年の付き合いだからか、漣は律の様子が心配のようであつた。ここからは見えない休憩所の方をチラチラと見ている。

カチッ

…なんか気まずい。

律の件はたぶん（100%で）俺が原因だし、漣はそれを本気で心配している。

とても『俺の休みっていつ？』なんて聞けるタイミングなんかじゃない。

「なあ、遊。」

「ん？」

カチッ

「遊ってさ…本当はベースやりたかったんだよね？」

「あのな、何度も言うけど俺は今ギター一筋なの。確かに最初はベースにしようかな、くらいには考えてたけど、ギターもやってみたかったから別に良いんだって。」

「それは何度も聞いたけど…。」

「じゃあこの話はお終い…ってこれも何度も言っただけだね…。」

カチッ

…

カチッ

「濡ってさ…良い女、だよな。」

「ヒイ!!」

「悪かった！言い方間違えた！濡は本当に友達思いの良いやつだな、って言いたかったの！」

ズサツと距離を取る濡に、俺は慌てて訂正文を出す。

「ん…なんで？」

スススツと滲みよるように近付き、先程までと同じように席へと着いた。

「周りのことを気に出来るやつだからだよ。」

カチッ

「今だって手に着かないくらい律の様子を気にして、俺の心情を気にして、他には部活動をちゃんとするよう俺達を正してくれたりとかな。」

カチカチッ

「ふと思ったんだよ。…濡って良いやつ…違うな。凄い女の子なんだな、って。」

カチボンッ

よくよく考えてみたら、澪はこの会って間もない俺やムギ、唯の事を常に気配りしていた。

怖い話にビビったり、男の俺に怯えたり、また視線が集まるだけで緊張して何も出来なくなる。

それでも場の空気を壊さないように話には参加するし、なんだかんだ俺にも話しかけてくれるようになったし、視線恐怖症も…は治ってないか。

「だからこれからも…どうした、澪？」

なんか顔朱いぞ…？

「…やっぱり遊が悪い！罰として1人でしてろ！」

ガチャン、タッタッタツ…

…カチツ

「何故に!？」

澪がいなくなってから十数秒、俺の叫びは誰にも届くことがなかった。

「遊さん、いったい何があったんですか？澪ちゃんが『ムギ…ちょっと替わってくれないか…』って突然言ってきたんですけど。」

「…犯人扱いしてるとこ悪いが、今回は全くわかんねえ。」
一つも。

「そうなんですか。どうしたんでしょうね、りっちゃんと澁ちゃん？」

「…さあ？」

「…？今微妙な間があったような？」

…やはりムギ相手に言いよどんだのはミスだったな。

カチッ

「いや！別に何も「無いなんて言わないですよ。2人と一緒にいたのは遊さんだけなんですから。」…もちろんですとも。」

心理戦？に瞬殺で負け、今までの流れをムギに話す羽目になってしまった…。

そりゃもう隅から隅まで…。

まあ話すことができるとムギが第三者からの意見をくれるし、まあいいか。

「…というわけだ。…ムギ、なんでそんな目を輝かせてんだ？」

「いえ、気にしないで下さい！それで…。」

「ん？」

カチカチッ

「遊さんはりっちゃんと遷ちゃん、どちら狙いなんですか？」

「今そんな話してない！」

ぶっ飛んだ発言をしたムギに大きな注意と、反比例したような弱いデコピンを食らわせてやる。

「イタッ。」

おでこをさするムギ…本当軽くしかしてないからな？

「えーっですね。それで本題なんですけど…」

「最初からそっちいけて。」

「やっぱり遊さんが悪いですね。」

「…」

まあ薄々そんな感じはしてた。

「じゃあ何が悪かったん？これからはとりあえず注意してみっから。」

「

とりあえず、な。

「うーん…でも…」

カチッ

「でも？」

らしくない態度をとるムギ。

俺の印象として、要点まとめた的確な答えに導いてくれるイメージがあるから、凄く違和感を覚える。

「はっきり言ってくれていいぞ。カッコいいとか頭良いとか。」

後者は未だ家族にも見せたことがない長所だ。

「分かりました。やっぱり治さなくていいと思います。」

…はい？

「それでさっきの続きなんですけど、りっちゃんと「ちょい待て。イタッ！」カチッ

反比例でデコピンの威力が変わった。

ついでにカウンターを押してしまったのはご愛嬌ってことで。

「…俺が悪いんだよな？」

「はい。」

「…でも治すところはないんだな？」

「はい。今のところは。」

「じゃあ未来の俺に期待しよう。」

「そうですね。それでりっちゃんも「それも未来の俺に聞いてくれ。」分かりました。」

…分かんのかい…。

その後俺は本当に休憩無し、飲まず食わずで8時間ぶっ通しでバイトに勤しんだ。

律はあの後ある程度普段通りに戻っていたが、漣とは話すも距離を若干話していた気がする。

第7話（後書き）

話がどんどん原作からかけ離れていきますね（汗）

しかも無理やり詰め込んだから話の内容無いし…

作品終わるまでに改善したい！

第8話(前書き)

バイト編やっとなります

第8話

「みんな、おはよ〜！」

唯が大きく手を振っている。

今度はスムーズにこちらまで来ることが出来た。

今日はバイト2日目。

皆、集合時間に間に合うよう集まり、再び気だるそうな説明を受け気合いの籠もった返事を返し、昨日と同じようにバイトが始まった。

初っぱなから俺と漣が2人きりに…てか俺は今日もずっと座っているのか？

「律のやつ…後でしっぺ食らわしてやる。」

朝来たときから俺の方に注意が向いていた漣と早速2人きりになったのは、律が無理やり俺達2人をパイプ椅子に押し込んだからだ。

「…」カチツ

漣はさっきからずっと無言を貫いていて、カウンターの数字を重ねていく。

こちらとしてもかなり気まずいものがあるが、ここは男として俺から歩み寄るべきだろう。

「なあ、漣？」

ビクツカチツ

「昨日は大丈夫だったのか？なんか急に体調悪くなったみたいだけ
ど。」

まあそんなこと言ってなかったけどな。

「えっ…あゝうん、大丈夫。心配してくれてありがとうな。」

漣は少し戸惑うような表情を見せたが、すぐに感づいたかは知らないが本日初の笑みを俺に向け反応した。

「それより昨日はごめん。急にいなくなったから…。」

「いやいや、すぐにムギが来たから大丈夫だよ。それに今日はちゃんと交代できるんだろ？」

よし、成功だな。

頭がいい（授業見た感じ）漣なら、律が体調崩したって言う事実からミスリードしたくらいに感じ取ってくれるだろうと思ってやってみたが、完璧に成功したみたいだ。

策士白木！ここに誕生！

「あゝ、それは…」

「無いんかい！」

…今日も飲まず食わず、なんてこと無いよな？

「いや…、律がな『次は私が遊とやるから』って朝言ってたから…。」

「律が？」

わざわざなんか話すことなんかあんのか？

…てか

「じゃあ来る前から最初は俺と漣で決まってたのか？」

勝手に。

「あつ……うん…。実は私から頼んだんだ。」

「漣から？」

漣は45。右に姿勢を向き直して座る。

「うん。…昨日のことで…その…あの…謝っておきたくて…。」

…何故にビクビクしてるんだ。

「じゃあそれも済んだし、この話はお終いな。」

てか漣に対して終わらせた話多いな…2種類だけだけど。

「いや…でも「終わりでもいいって。俺がそういつんだからいいだろ？」…うん。分かった。ありがとう、遊。」

「なんか分からんがどういたしまして。」

たぶん今ので気を使ったのバレたな。

澪がそんな顔してる気がする。

やっぱり澪は凄い奴だな。

「ちなみに7台分押してないぞ。」

「えっ！」

「よし、交代の時間だぞ！」

「お疲れ様でした、教官殿。お先失礼します。」

「待て、白木三等兵！貴様は残れ…。」

「そんな…、お許しを〜！」

「じゃあ私は行くから、2人とも頑張れよ。」

「はい。」

そう言つて漣が席から離れると、すぐさま席に座る律。

先に漣から休憩が無いことを聞いていたので、すんなりと俺も二時間目にへと入った。

つか俺の位つて三等兵なん？

カチツ

「そういえば、今日は漣と2人来るの早かったな。どんぐらい先に来てたんだ？」

「うーん…30分くらいかな。時間間違えちゃって。」

「そっか。早いな。」

…

昨日からこんな感じ。

話はするし、態度も変わらない。

けどお互いどう話して良いか分からず、話も繋がらない。

「遊、昨日の晩飯は何だったんだ？」

「ああ…ウチは唐揚げだったな。律は？」

「ウチはオムライス！私がつつたんだぞ〜！」

「へえ〜！律以外と料理出来んだな！」

「お米を炊いただけだけどな！」

「俺でもたまにするわ！」

…

… 会話終了。

なんかズレがあるんだよね〜。

でも少しずつ修復出来てる気がする。

「律、昨日やってたエムステ見たか？司会が引退したんだぞ！」

「注目ポイントそこかよ！」

「テレビ回したらたまたまそこだったからな。その後すぐに別番見
てたし。」

「そこは最後まで見てやれよ！」

おっ、今のは良い感じかもな。

「じゃあ律は何見てたんだよ。」

「弟とゲームしてた。」

「ガキか！」

「なにを〜！じゃあ遊は何見てたんだよ！」

「野球中継。」

「オッサンか！」

…

「…ぷっ」

「…クス…」

「「はははっ！！」「」」

今完全にほつれてた糸を修復出来た気がする。

いや…どっちかっていうと、絡まってた糸を手繰り寄せた、って感じかな。

「はあ〜、やっぱり律とはこうじゃないとな。お互いがお互いを気にして遠慮するなんて俺達らしくないな。」

なんかもやもやしていた理由は、たぶん微妙に相手に気を使った言葉を選んでたからだろう。

いや…無意識にそういうことをしていたからだろう。

俺は意識的にはしようとしていなかったからな。

確かに。遊とはふざけ会ってるのが一番性に合ってるな。」

「これからもキャラ通りめいっばいぼけ倒してくれや。」

「なんでやねん!」ビシッ

「いや、ここはツッコむ所じゃないだろ!」

「ボケてるのは遊だろ〜!部長の私がキレのあるツッコミをしてるじゃんか!」

「なんでやねん!」

カチッ

…流石にアクションは出来ないな…。

俺のツッコミはカウンターへと叩き込んでおいた。

「うーん、飯食ったら眠くなってきた…」

「私も。」

現在一時過ぎ、担当は俺とムギだ。

「ムギは朝から眠そうだったからな。寝れなかったのか？」

「はい…、ドキドキしちゃいました…。」

「またかよ。今日2日目だぞ。」

「そうなんですけど…。」

ムギは昨日も寝れなかったらしく、夕方頃になると瞼を何回も擦っていた。

「私バイトするの初めてで…それもお友達と一緒にできるから…その…凄く楽しみだったんです。」

「ムギは初めてのことにでも興味持つからな。」

休日に友達と遊ぶことにも、凄く目を煌めかせていたからな。

「私…もっともっと皆さんとこうやって何でも一緒に悩んで苦しん

で…そして解決して笑いあっていたんです！」

「そっか…。」

ムギの熱い感情をぶつけられた。

それはこれまで体験したことのない、おっとりぼわぼわと印象付けられていた女の子の精一杯の表現だった。

「じゃあ無理せず、辛くなったらすぐ休憩すること。それが守れんならこのまま居てよし！寝不足甘く見んなよ！」

だから俺はムギの行動をあっさり許容してしまった。

俺もやりたいものがあって、この部活に入ったんだから。

「…って言っても俺もあんま寝てないんだよな。深夜に海外のサッカーの試合あって、それ見てたら3時になってた。」

「じゃあ全然寝てないじゃないですか！」

まあざっと3時間くらいかな。

「俺は男子だし、体力あるから余裕だよ。今日は休憩あるしな。」

カチッ

「休憩あるっていつても、午前中は全部担当したじゃないですか！」

だって昨日律が…なあ。

「休んでるから大丈夫だって。それよりムギは2日寝れてないんだから、休んでてもいいんだぞ?」

ムギはお嬢さんだから、体力的な問題がある…ような気がする。

「大丈夫です。寝てない同士、一緒に頑張りましょう!」

「お…おっ。」

ブルルンカチカチッ

やっとあと30分か…話しながらでも一時間って意外に長いことは昨日分かった。

ブルンカチッ

まあ環境条件とかもあるのかもしないけどな。

日差しが燦々と照らす中、車の動向に注意しながらだとそんなもんだ。

カチッ

「ん？」

今車通つて無かったぞ？

「ムギ、今間違えなかった…って大丈夫か、ムギ！」

俺はつい慌ててムギの体を揺さぶった。

全身の力が抜けてうなだれている、顔が真っ青なムギ相手に。

「えっ…？」

数秒遅れてムギがやっと反応をした。

けして寝起きという反応には見えなかった。

「おい！大丈夫か、ムギ！」

「遊…さん？どうしたんですか？」

返事をくれたムギにひとまず安堵し、冷静になった俺は、身体を揺さぶるのをようやく止めた。

「顔真っ青だぞ。今日はもう休んでろ。」

「！いえっ！大丈夫です！」

パツと姿勢を正そうとするムギ…しかし口元に手を持って行って、再び少し前傾姿勢になる。

それでも脂汗を垂らしながら、誰にでも分かるような作り笑顔を見せる。

「私なら…大丈夫ですから。さああと30分頑張り、イタッ！」

「…」

累計3度目…無言のデコピンが今までで最大の威力で放たれた。

「いいから休め。これ命令だから却下とかできないぞ。ほらおんぶしてやるから早く。」

ムギの前で背を向けて座る。

両手は翼でも意識してるかのように、後ろに伸ばされムギがもたれ掛かってくるのを待っている。

「でも…」

「…」

腕を一回だけ上下に動かす。

前言撤回を許さないとの意思表示だ。

「…失礼します…。」

無言のプレッシャーを与え続けて2分…4台分カウントされずに通り過ぎた所で、ようやくムギは観念して俺の首周りに腕を通した。

「よし、じゃあしつかり掴まってるよ。…よしと。」

「きゃっっ…」

急に立ち上がるもんだから、ムギが軽く悲鳴をあげる。

「…遊…さん…、あの…重くないですか？」

「すげー重い。」

「！」

「うわっ！嘘だよ！ジヨークだから！ムギは羽根のように軽いから、全然重くありません！」

俺の背中の上で暴れる金色の馬を必死に支える。

「…」

ペシペシと頭の上を駆けていた馬の前脚がようやく止まる。

そこでようやく後ろ脚代わりになっている俺の足を前に進めた。

…

…

…

「遊、どうし…ムギ!？」

「どうしたの!? ムギちゃん!」

「何があつたんだ、遊!？」

休憩所…つまり近所の公園の日陰のベンチに、ビルの角を曲がり少しわき道に入つてようやく辿り着いた。

「寝不足が祟つたみたいだ。誰かハンカチかなんか濡らしてきてくれない？」

「あつ、分かつた。」

溼が急いで公園の蛇口に向かう最中に、俺はベンチにムギを下ろし寝かせる。

「みんな…ごめんね…。」

「そんなこと気にすんな、ムギ。…それより大丈夫なのか？」

「うん…全然…平気〜。」

「全然平気そうじゃないよ、ムギちゃん!どこが痛いのか?何か欲しいものとかある?」

「…」スタスタ

「…少し喉が渴いたかな…。」

「!すぐ買ってくるね!」

「あつ…唯ちゃん…。」

「ほら、ムギは横になってろ、って。」

ハンカチを濡らしてきた溼が、起き上がるつとするムギをそつと寝かす。

「全く…無茶すんなよな、ムギ。」

「ごめん…なさい…。」

「ちよつといいか…熱があるって訳じゃなさそうだな。気分はどうだ？」

「うん…ちよつと力が入らないかな…。気持ち悪かったりはしない…。」

「そうか…それじゃあゆつくり休憩すれば大丈夫そうだな。」

「ムギちゃん！買って来たよ！」

「おお、唯！でかしたぞ…って何本買って来てんだよ！」

「だってムギちゃん何が飲みたいか分かんなかったから…。はい、好きな飲んで、ムギちゃん！みんなも好きな飲んで！」

「じゃあ私は、まずはムギだ！」ギャツ！」

「クスクス…グスツ。」

「はっ！ムギちゃんどうしたの！？どこか痛いの？泣いちゃうほど苦しいの！？どうしようみおちゃん！」

「落ち着けて、唯！…どうしたんだ、ムギ？」

「えっとね…私凄く幸せだな…って思ったたら涙出てきちゃって…。私のことをこんなにも心配してくれて、構ってくれて、満足させてくれるみんなが傍にいてくれるのが、凄く嬉しくなっちゃって…。」

「…ムギ。」

「…ムギちゃん。」

「…当たり前だろ！ここにいる私達はみんな軽音部の仲間なんだから…」

「うん…そうだね。」

「そうだな！」

「…ねえ、りっちゃん。」

「どうした、唯？」

「遊君いないよ？」

「へっ？…あれ？あれ？」

カチッ

カチカチッ

…チラッ

カチカチッ

カチッ

…チラッ

「はっ…まるで溼みたいだな。」

カチッ

ムギを休憩所まで送り届け、単身すぐにカウンターの置かれたパイプ椅子へと戻っていた。

「それにしても…あと2時間半か…長いな。」

みんなはムギを心配して、あと30分…1時間くらいは誰も来ないだろうな。

そんならいいしてやっと俺がないことに気付いて…くれるよな？

そしたらたぶん澁が率先してこっちに来るんだろうな。

まあ他2人はなんとなく来ない気が「お〜い、遊くん！」

「…ん？」

この間の抜けた声は…

「はあ〜、疲れた〜。はい！飲み物だよ、遊君！」

一番ムギにべったりくっついてるだろうと予想していた唯だった。

「ムギの傍に居てやらなくていいのか？」

「遊君だって。」

「俺は薄情な奴だからいいんだよ。」

「私は…凄く心配してる…。」

カチツ…カチツ

「だったら付いていてやりゃいいじゃん。俺なら大丈夫だからさ。」

唯の性格からして、めちゃくちゃ心配してるだろう事は、まだ出て2週間程度しか経ってない俺にも分かった。

唯って単純っぽいもんな。

「…」

「?どうした、唯?」

それでも唯は席に座り、拳をギュツと作って俯いている。

「…遊ぶ…ん。」

「どうした?」

唯は顔を全く上げず話し始める…

「わだしね…」

でも声だけでどんな表情をしているか分かった。

「ムギちゃんにあやまれなかつた…」

「はい?」

あやまる…謝る?...何を?

「ムギちゃん…うん…みんなわだしのためにバイトしてくれてる…。わだしのギターのために手伝ってくれてるのに…。クシユ…それに頼つてたらムギちゃんが…ムギちゃんが…」

…ああそういうことか…唯は自分のギターの為のバイトで、ムギが倒れたから責任を感じてるってことか…。

「ムギちゃん…わだしのこと怒ってなくて…あ、やまろう」としてもすぐに『大丈夫だよ』って言うでわだしを責めなくて…。」

責任感じてても謝ることはムギに拒否され、拒否されたからには無理に謝る訳にもいかず、溜め込んでんだな。

「わだし…どうしたらいいか分からなくて…」

そしてその捌け口として1人でいる俺が最適だったわけだ。

唯はとうとう我慢出来なくなり、涙の防波堤が決壊してしまったみたいだ。

体をくるめ、自分の膝上を濡らしていく。

通行人が興味気に…何人かは非難の目でこちらを見てきている。

もちろん後者は俺に対してのみだ。

隣からグスツ…グスツ…とリアルな泣き声がハッキリと聞こえてくる。

っーかこれで嘘泣きだったら、俺は二度と女の子を信用しない。

「…大切にすりゃいいんじゃない？」

「えっ？」

「軽音部のみんなを…みんなで手に入れたギターを…これから増える仲間、道具を…軽音部に関係あるもん全部纏めて大切にすりゃいいんだよ。」

「だいでづ…に？」

真っ赤に腫らし、涙が溜まりすぎて溢れている両目で俺の方を見上げてくる。

だから上目遣いは…ってこれは律か。

「そうすりゃムギだって喜ぶし、もちろん律や漣も嬉しいはずだ。」

「そう…がな。」

「ああ、もちろん俺だってバンドを大切にしてくれたら嬉しいし、俺もバンドを大切にしていきたい、って思ってる。」

俺にとっては不転退の意思を持って入った部活…だからみんなとの『今』を大切にしたい。

「…分かった。」

ゴシゴシと目蓋が真っ赤になるくらい、溜まった涙を拭き取る。

それでもまだ瞳は潤んでいて、鼻水も垂れてくる。

でも…何か吹っ切れたみたいだ。

「…んじゃ、カウンター任せだな。俺ちよつとムギの様子見てくるから。」

「うん！」

カチッ

雨に濡れたひまわりは

今日も綺麗な花を咲かせている。

第8話（後書き）

こころ話くらいは基本的に軽音部のメンバーとの掛け合いを書きた
かっただけです。

なんで色々詰め込みすぎた感が否めないです…

第9話（前書き）

バイト編終わってなかった（汗）

第9話

「はい、お疲れ様。これバイト代だから。」

「「「「「ありがとうございます！すす！）あざす。（「「「「「

「…じゃあ私はこれで…。」

「お疲れでした。」

ギロツ…すたすたすた…

「だから、余計な波風立てるな！あの人また怒ってたぞ！」

確かに今回は殺気？みたいなもんを感じたな。

「な〜んか嫌いなんだよね〜、ああいう真面目な感じの奴。」

「じゃあ溇の事も？」

「そうだな〜…って冗談だから涙目になるな！」

「ダメだよ、遊君！溇ちゃんをイジメちゃ〜ダメ〜！」

両腕を駆使して大きな×を作りながら、警告が入る。

「ああ〜！俺が悪かったから、そんな顔しないでおくれ、溇さん！」

「クスクス…溇ちゃん、遊さんのこと許してあげて。遊さんはただ

好きな子をイジメただけだから。」

「えっ!?!」

「そうなんだ…実は…」

真剣な表情と空気…

「ゆ…う「な」んて違うわ!そんな小学生みたいな真似するか!」
…絶対許さないから!」

いや、俺の所為じゃないよね!今の!

「はいはい…コントはここまでにして…。よし、今から10GIA
に突撃だ〜!」

律が茶封筒片手に拳を上空に突き出した。

「「「お〜!」「」」

それに習い、俺達も茶封筒を掲げる…漣…冗談なんだから、機嫌直
してくれよ…。

ただ1人だけこちらを睨み付けている女の子もいた。

「そういえばバイト代いくらくらいになったんだ？」

「ああ、計算してなかったな。」

「ちよつと待つて。∴ 1人分が∴ 16000円だから∴ 5人で80000円だな。」

流石滲！計算早いな！

「それと唯が持つてる額が∴」

「5万円だから∴ 12万円だね！」

「小学生でもミスんないからな。」

その一言を聞いて傾げる唯∴気付いてないのか？

「13万円よ、唯ちゃん。」

すっかり体調が戻ったムギがやんわりと訂正する。

外とはいえ、日陰で涼しいベンチで2時間くらい寝ていた。

俺が見に行った時には熟睡してたみたいに見えたし、まあ一安心だろう。

「あゝ、そっか！間違えちゃった。」

「じゃあ13万円で買えるのか…結構良いギターが買えるぞ。」

「本当に！」

いやゝ流石湊！ギターの知識も豊富で凄いな！

「でもあのギターは買えなかつたな…。」

律が指差す先にあるのは、25万円もする、そして唯一目惚れしたギター…ギブソン・レスポールがあつた。

「あつ…」トコトコ…ストン

先日と同じように、立て掛けられているギターの前に座り込んでジツと見ている。

やっぱりあれが良いんだろうな…。

「よし！じゃあもう一回バイトするか！」

それはやっぱり軽音部員全員に理解できたようで、律がすぐさまそんな提案を出した。

「そうだな。」

いやゝ、流石湊！友達思いの「遊は黙つてて。」…はい。

「じゃあ次はどんなバイトする？」

「そうだな〜…」

そうと決まれば求人誌また学校に持ち込んで、みんな決めて…

「もういいよ、みんな。」

そんなみんなの勢いを止めるような発言をしたのは…

「私違うギターにするから〜。」

つい先程まで25万ギターを物欲しそうに見ていた唯だった。

「でも…。」

「良いの、ムギちゃん！…私ね、早くみんなと…りっちゃんと、漣ちゃんと、ムギちゃんと遊君…みんなで演奏がしてみたいの！…だから手持ちで買えるギターにするよ。」

「唯…。」

「だから漣ちゃん！どれが良いか教えて！私漣ちゃんが選んだギター大事にするから！」

「…分かった。」

「あとこれも返すね。はい！」

唯は先程みんなから渡された茶封筒を一人一人に返していく。

自分で稼いだ金は自分で使え…って事なのかな。

受け取った後、澁は表情の晴れぬまま、並ぶギターを一本一本しっかりと見ていく。

唯もそれに合わせて後ろからギターをチェックしていた。

きつと唯はみんなを大切にしたいから、こんな事したんじゃないか…って思う。

自分の所為で部活としての練習が滞っていると思ったのかもしい…確かに唯が来てから一回も練習してないんだけどさ。

「…なあ、遊。何とかなんないか？」

「…何とか、ったってな…。」

2人に付いていかず、その場に立ち尽くした律がボソボソと話しかけてきたので、俺もボソボソと返す。

これは唯の考えた結果なのだから尊重してやりたい…けど絶対後悔すんじゃないかな…、って割と確信めいた予感がする。

だけどな…

「ちよつと待ってて！」

「ムギ？」

ふと何か閃いたムギがレジにいる店員さんの所まで駆けていく。

俺と律はただただ間抜けな声を上げるしかなかった。

「…何か話してるな。」

「なんなんだ？…あつ、店員さん驚いてる。」

「電卓持つて何か計算してるぞ？」

益々分からない。

「2人とも！ギター探すのちゃんと手伝え！」

「うわっ！…何だよ、澪か。はいはい…行くぞ、遊。」

「あ…ああ。」

律は澪に手を引かれギターコーナーへと向かう…が俺はムギが気になって、チラチラとそちらを見ていた。

「どうしたの、遊君。」

俺の挙動不審な態度に唯がたまらず声をかけた。

「いや…ムギが何か話し込んでるからさ…。」

「本当だ。何してるんだろ。」

「…ちょっと行ってくる。」

溥には悪いが、今はなんか凄く店員さんを困らせているムギだ。

「何してんの、ムギ？」

「あつ、遊さん。実はあのギターを値切っていたんですけど…、あと8万円がどうしても…」

…

…

…はっ？

「あと…8万？」

「はい…努力してるんですけど…」

25万円のギターがあと8万円？

25万^{ギター} - ? (値切り) || 5万 (手持ち) + 8万 (不足) …

…

…

12万も値切ったのかよ！

「いや…十分過ぎるくらい値切ってるって…」

「でもあと8万円…。」

良識溢れる俺の登場に店員さんも安堵の溜め息を吐く。

そりゃまあ12万円も値切られたら大赤字間違い無しだからな……あれ？

「ムギ…どうしてそんな値切れるんだ？」

大赤字が分かりきった値切りなんて出来るはずがない…。

つまりこのギターはニセモノ「ここのお店、実はうちの系列のお店のの。」…だと思っただぜ。

…って8万円!?

「なぐにしてくれよ？」

とうとうギターを真面目に探していた律、溲まで集合した。

「えっとね…ムギちゃんがあのギターを値切ってくれて…」

「でもあと少し足りなくなっ…。」

「そんなことないだろ？」

「えっ？」

そこで俺は一度唯の手に渡って、突き返された茶封筒を再び唯の前に差し出した。

「あと8万円足りないんだろ？…でもこれが全部集まれば…」

「！ああ、そうだな！」

「確かに！」

漣、律も做って茶封筒を唯の前に差し出した。

「みんなの給料を合わせたら…丁度8万円になるだろ？これで欲しかったギターが買えるな、唯。」

16000円×5人＝8万円…あまりのピッタシな数字に運命さえ感じてしまう。

「でも…。」

「良いんだよ。唯が後悔しなくて済むんなら。」

「そうだな、私達も早く唯と一緒に演奏したいし。」

漣が2人分の茶封筒を唯の右手に持たせる。

「漣ちゃん…、りっちゃん…」

「その代わり大切にすんだぞ！みんなで買った唯のギターなんだからさ。」

俺もそれに便乗して、唯の手に自分の給料袋を滑り込ませた。

「遊君…みんな…あり…あ…りがどう…グスツ！…わだし…絶対
ギダー大事につがうから！」

唯の奴、感極まって泣き出ししまった。

そんな泣きじゃくる唯を俺達は黙って、ただ見ていた。

だってこれは哀しくて涙してるんじゃないから。

だったら泣きたいだけ泣いちゃってもいいんじゃないの。

店員さんもようやく値切り地獄が終わり、再び安堵の溜め息を吐く。

「あ…」。

「ほらっ。ムギも出してやってくれないか？」

「えっ…と、それは良いんですけど…」

「ん？」

そっいえばムギだけ話に参加してなかったけど…

「足りないですよ？」

「…はい？」

5万円 + 8万円 = 13万円だろ？

16000円 × 5人 = 8万円だろ？

「あと16000円足りません。」

…

…

…

「よし、じゃあ話も済んだ事だし、帰るか！」

「おい！遊、どこに行く！戻ってこいって！」

あはは、何言ってるんだ、律。

「…おい、ムギ。どういうことなんだ？あと8万円なんじゃないのか？」

「うん…。唯ちゃんの手持ちにあと8万円足りないの…。」

「なら…」

「唯ちゃんの手持ちって5万円+1万6千円でしょ？」

…

…

「じゃあ…ギターは14万6千円、ってこと？」

「はい…。」

だからあと少しかゝ本当だなゝはははゝ。

「よし、じゃあ帰るか！」

「ちょっと待てっ。」

はははゝ、そんな肩を強く掴まなくてもいいんじゃないか、律。

「おい、どうすんだよ！唯の奴めちゃくちゃぬか喜びじゃねーか！」

耳元でボソボソと、しかしかなり勢いの良い律の声が響いた。

「律…あとは任せた…。俺を捨てて先に行け…。」

「遊、現実から逃げるな！」

えーい、離せ！俺は今からカラオケに行くんだい！

「こんな所で何暴れてんのよ。」

えっ…、この声は…。

「…何よ。」

いつの間にか俺と律の目の前には俺より10cmは身長の高い女の子が…。

「湊？どうして…。」

「…これを買いに来ただけよ。」

湊が投げやりに右手を上げると、そこには換えの弦が握られていた。

「ああ、また切れたんか。」

「そう。ちょっとそこ退いてくれない？」

そういつと湊は俺達が道をあけるのを待たず、ぶつかるようにレジへと進んでいった。

「ありがとうございます。ポイントカードはお持ちでしょうか？」

「はい。」

店員さんもようやく本来の勤務に戻れ、三度安堵した。

…短時間で何回困らせてるんだ、俺ら…。

「それでなんでそんなにはしゃいでるのよ。」

買い物を終え、さっさと帰ってしまうと思っていた湊が予想外に足を止め話しかけてきた。

「実はな…。」

俺はこれまでの状況をかくかくしかじかと説明する。

「ようはお金が足りなかったのね。」

湊は15分くらい掛かった俺の説明を15文字に纏める。

…まあそうなんだけどさ…

「で、平沢さんはなんで泣いてるの？遊が若き衝動を我慢できず襲ったとか？」

「ちがうわ！…ってまだ泣いてんのか！」

流石に泣きすぎだろ！

「みんなのお金を出し合えばギター買えると思ってたから、それで感動してくれたみたいで…。」

「…それで買えなかった事態に気付かず泣き続けてる訳ね、秋山さん？」

「うん。。。」

「…じゃあこれ使っていいわよ。」

「これって…。」

「このお店のポイントカード。これだけあれば足りるでしょ？」

「に…2万ポイント！」

「こゝ、こんな使ってもいいのー!？」

「ついでに貯めてただけだから気にしなくていいわよ。別に無くてもいいものだし。」

「湊：ありがとうな。お兄ちゃん助かつ「遊は黙ってて」…なんで溼みたいなこと言ってくんだよ…。」

「でもこれで買えるわね。良かったね、唯ちゃん！」

「うん！うん！」

「お前絶対聞いてないだろ。」

こうして唯は念願のギターを手に入れることができた。

紆余曲折があつたが、湊含めみんなの協力によって手に入れたのだ。

きつと…いや、絶対唯はこのギターを大事に使ってくれるだろう。

こうして軽音部に新たにギタリストが加わった。

「じゃあポイントの余り俺にくんない？」

「却下。」

第9話（後書き）

ようやく唯がギターを手に入れました。

…無駄に長かった気がする…。

あと何故か分からないんですけど、感想が書けない状態に変更されてまして、前回の話の後感想を書こうとしたら出来なかった！みたいなことがありました…

感想書こうとした方、本当にすみませんでした！

自分も感想が無くて『今回はさらに糞だったかな』とか『もしかして読まれなくなったのかな』とかめっちゃくちゃ不安でした…。

まあ自分のミスなんで自分が全面的に悪いんですけどね。

ですので、今回は是非とも感想を頂きたいです！

お暇でしたら一言でいいのでお願いします！

長々と失礼しました。

第10話(前書き)

オリジナルの話です。

湊視点ですつといきます

第10話

「あゝ、部活が楽しみだよ！早く放課後にならないかな？」

ベタ〜ゴロゴロ…ベタ〜

「そんなに軽音部が楽しいのかしら。唯にも真剣に打ち込めるもの
が出来たのね。」

「全然真剣そうには見えないけどね。」

あんな机に突っ伏してうだうだしている人が真剣なんて、私は信じ
ない。

「中学時代は休み時間は凄く元気だったわよ。それこそ帰るまでに
エネルギーを使い切るくらい。」

「…じゃあ今は体力を温存してる、って訳？」

「無意識にだとは思うけど…」

「早くムギちゃんのお菓子食べたいな！」

「…確かに本能っぽいわね。」

「…昔から思うままに生きてきているから…」

溜め息を吐く和に同情の念がつい湧き出てくる。

「あゝ、みなちゃん。和ちゃん。」

少し離れた位置で話していた私達を見つけ、わざわざ席をたって抱きつきにくる…というか私に抱き付く。

「だから暑いから止めなさいって何度も言ってるでしょ。」

むぎゅ…べたべた

「結局許して貰えるって本能的に察知してるんじゃない?」

…それは名前を呼ぶことを強制されたときのことを言ってるのかしら、和?

「みなちゃん! あったかい! 良い香り〜!」

「はあ…もう良いわよ…。」

もう1ヶ月拒み続けても続けられたら、こんな態度になってもしょうがないだろう。

「ねえ…軽音部楽しい?」

手持ち無沙汰に陥った私はとりあえず唯に質問してみる。

「うん! お菓子おいしいし!」

もうそれは聞いた。

「それだけ?」

「他にもいつぱいあるよ！りっちゃんも面白いし…湊ちゃんも可愛いし…ムギちゃんも優しいし…遊君は…カッコいい！」

「あの遊…がね。」

「たしかその遊君、ていうのが湊の双子のお兄ちゃんだったわよね。」

「まあ…残念ながらね。」

本当に運が悪い。

本当に…

「湊にとってどんなお兄さんなの？」

「唯に聞いているでしょ。たぶんそのままの評価の人間よ。」

「ギターが上手くて面白くてカッコいい男子…って評価だったと思っわ。」

「…少なくともギターは上手くないわね。あとは唯次第だから任せらるわ。」

あとで唯に遊の失敗談教えておこう…面白くてカッコいい人から残念でドンマイな人に変わりそうね。

「ねえねえ、みなちゃん？」

「何？」

「みなちゃんも軽音部入らないの？みなちゃんも楽器弾けるんだよね。」

…この子は本当に空気読めないのね。

「私は…今のバンドで手一杯だから。」

「そっか。みなちゃんと一緒に演奏したかったな。セッション…だっけ？」

「残念だけど諦めなさい。」

あと残念だからって私の肩の上でべったり落ち込むのは止めなさい。

「じゃあ一回だけ一緒に、部室で演奏すればいいんじゃないの？」

そこで和が和らしくない突飛な発言をしてきた。

「和…なんでそんな子供みたいなのさうしょっか、みなちゃん！
…子供が乗ってきちゃったじゃない。」

「それくらいなら湊は協力してくれると思ってね。お願いね、湊。」

「絶対いや。」

そうなんでもかんでも言うこと聞くなんて大間違いなんだから。

「だいたい和は私に唯のこと押し付けすぎなのよ。」

「いや…なの、みなちゃん…」

「あゝ、だから唯も直ぐに泣き脅しを使わない！」

「たぶん本能的に弱点が分かってるんじゃない？」

「和…はめたわね？」

「さあ、どうかしらね。」

「私のこと嫌いなもの、みなちゃん！」

「分かったから泣かない！」

「さっ！…ここが音楽室だよ！」

「準備室でしょ…。本当に今日やるの？」

「女に二言はない！、だよ、みなちゃん！」

「…はいはい。」

「それじゃあゴ〜！」

唯はドアを開くと、私の背中をグイグイ押して入っていく。

必然と私の身体も中へと入っていく。

「みんな〜！おはよ〜！」

「いや、もう夕方だから…って湊？」

中には声のした方向を見て、予想外の人がいたことに驚く人が1人居た。

「…こんにちは、田井中さん。」

別に親しいわけでもないのに、1ヶ月してようやく判明した苗字で呼ぶ。

「私もいるよ！りっちゃん！」

田井中さんからはきつと肩口から手が生えて見えているんだろう。

「え〜っと…もしかして遊に用事か？遊は掃除当番だからまだ教室にいるんだよ。」

それは知っている。

秋山さんと仲良く掃除しているのが、連れて行かれてる際に見えたから。

「今日はね〜…なんと新入部員として「嘘つかない。」」

肩口から顔を出してきた所に躊躇わずチョップを叩き込む。

「…今日は演奏しにきたの。」

全く話に着いていけない田井中さんに、しょうがないので私が説明をする。

唯の我が儘で一度限りセッションすることを。

「そっか〜。湊も楽器弾けるんだな〜。担当は？」

「そんな事より早く終わらせましょ。唯は早くギター持って。田井中さんはセット準備して。」

私は早速とばかり2人を催促する。

このままだと座り込んで話し込んでしまいかねない。

「まあまあ、みなちゃん。とりあえずゆっくりしようよ〜。」

「それに演奏するにしてもまだベースもないしな。」

「じゃあ…って楽器がないか…。」

辺りを見回してもそれらしいものは無かった。

「じゃあ私がドラムやるから、唯がギターで…」

「なんか寂しくないか？それ…。」

「みんなと一緒にセッションしたいの〜。」

否決。

「じゃあ今度楽器持ってくるから、その時に…」

「な〜にそんな急いでんだよ。ゆっくりしなって、湊。」

とつかさつきから湊、湊っていきなり名前で呼ばれてる…田井中さんって見た目通り馴れ馴れしい。

「それとも何かあるの、みなちゃん？」

「それは…」

つい黙り込んでしまった。

それを馴れ馴れしい田井中さんは見逃さない。

「ん〜？やつぱりなんかあるんじゃないか？…例えば遊に会いたくないとか。」

「なっ！」

そんなすぐに凶星を突かれるとは…馴れ馴れしい田井中さんは『あれ、当たった？』みたいな顔をしているが実はなかなか鋭い人…
……………な訳ないか。

「え〜。どうして遊君がいるとダメなの〜？」

今度は100%天然物だと断言できる唯からのメスが入る。

「それは…」

「それは？」

「私…遊の…遊の前…」

「おい〜っす。お父さんとお母さんが帰ったぞ〜。子供たちよ、元気にしてたか？」

「なっ！き、急にお母さんなんて言っな！」

「遊の前に立つと、遊を殴りたくて溜まんなくなるからよ。」

「へえ」。今日は白木さんと一緒に練習出来るのか。」

「一回きりだけだね。」

秋山さんは練習という言葉をやけに強調して話した。

…なんでそんな反応してる…のは当然か。

今日の前にはケーキとティーカップが各々一組ずつ用意されている。

まるで喫茶店にでも来たのかと錯覚しそうなくらい、部屋中が紅茶の香りで満ちていた。

「…なんで殴られたのか聞いてもいいでしょうか？」

「じゃあ早速合わせましょ。秋山さん、楽譜ある？」

「まだ聞いちゃダメですか、そうですね…。」

遊をスルーして秋山さんが何事もなく楽譜を手渡してくれる。

可愛らしい字がちよこちよこと書かれている楽譜だった。

「この曲の見せ場…注意…ポイント…」

「ああ！それは気にしないで！」

斜め前に座る私の手に握られた楽譜を、必死に手を伸ばして見せないように表面を手で覆う。

「別に隠すことないと思うけど…。」

「澗ちゃんはすごい恥ずかしがり屋なの。」

「…個性的なメンバーを集めたこと。」

天然と大ざっぱと恥ずかしがり屋とお嬢様とバカ。

「みなちゃんも入りたい？」

唯がキラキラした目で見てくる。

どうやら羨ましがってるように見えたみたいだ。

「そんなわけではないでしょ。こんな練習しないでお菓子ばかり食べてるような部活に。」

…ぴき

「ほ〜う…ならさぞかしお上手な演奏が出来るんでしょうね〜、湊さんは。」

「おい、律！湊相手にそれは…」

ここまで空気だった遊が敏感に反応して、馴れ馴れしいさんを止めに入る。

「え〜い！遊は黙ってる！やってやるっじゃんか！みんな！今すぐ準備しろ〜！」

しかし効果はない。

「まあ私は別にいいけど。」

「おい、律！そんないきなり…白木さんに失礼だろ！」

「いや…どう考えても湊が悪いから…すまん…」

…別に遊が頭下げることないと思うけど。

「まあまあまあ。とりあえずみんなで演奏してみましようよ。ねっ？澁ちゃん、唯ちゃん？」

「うん！やる〜やる〜！」

「…分かった。」

ようやく馴れ馴れしいさん以外のメンバーもお茶の席から立ち上がり、それぞれの所定の位置に移動する。

「湊。これ使えよ。」

1人その輪に入っていなかった遊は、手ぶらでいる私に自分のギタ―を渡す。

「…ありがとう。」

そうして遊が長椅子に座ること、ようやく全員が所定の位置に…

「何してるの？」

いや、長椅子に1人余計な人が座っている。

「えへへ、よく考えたら私まだ全然弾けなかった。」

「じゃあなんで誘ったのよ…。」

すべての元凶の発言に頭を抱えるしかない。

「はあ…もういいわ。…それで今から弾くのはこれでいいの？」

先程秋山さんから借りた楽譜をひらひらと田井中さんに見せる。

「ああ。初めて見る楽譜だろうけど…まあ演奏がお上手な湊さんなら余裕でしょうね！」

「まあたぶん大丈夫でしょ。」

「！…じゃあいくぞ！…1、2、3、4！」

力強くぶつかり合うドラムスティックの音が4回鳴り響き、それを合図に四重奏が始まる。

奏でられるのは『翼をください』…前に唯が軽音部に入るきつかけになった曲だ。

その唯は今とは前と変わらぬ位置で、遊と一緒にいるのだから、人生

何が起こるか分からない。

うん…今日は音のノリが良い。

ここ最近沈んだような音しか出せてなかったのではないか、とふと頭によぎる。

そんな事を思っていると、あつと言う間に曲は終盤を迎えていた。

客席の顔を見る限り、たぶんミス無く演奏できていただろう。

…いや、唯を指標にするのは間違ってるわよね。

彼女は平気で演奏してくれた人に対して『あんまり上手くないですね!』、とバツサリ切りかかれる人なんだから。

「…終了ね。」

ピックを弦に挟んで長椅子に座る遊に返す。

「カッコいい〜!前に聞いたときよりカッコいいよ!」

ギョ〜ベタベタ…

「ギターが下手で悪かったな!」

「まあ遊が下手なのは置いといて…秋山さん?」

何か叫んでいるモンキーをすぐさま視界から外し、未だ演奏位置から動かない秋山さんに視線を送る。

「えっ！…何かな？」

「あなた上手いわね。田井中さんを上手くカバーしようとしてる…あんなに走ってたのにちゃんと演奏出来たのはあなたの功績だわ。ありがとう。」

「えっ…ああ…。こちらこそ。」

顔を少しばかり朱くして頬を掻く。

「ま…まあ少しはやるみたいだな！ギターとしてなら軽音部のレギユラーに入れるな！」

まあ遊や唯に負けるようならギターはやらない。

…でも私がそれより気に障ったのは…。

「田井中さん。ちょっとスティック借りてもいい？」

「？ああ、いいけど…」

「湊、そんなくらいで「遊は黙ってて。」「…。」

「秋山さんと琴吹さん」「ムギ、で良いよ。」「…ムギ、もう一回演奏してくれない。あと遊も。田井中さんは唯の隣に行ってももらえる。」

「！…分かったよ…。」

大人しく長椅子に腰掛ける律。

その代わりに先程まで私が立っていた位置に遊、田井中さんが居た位置に私が居座った。

少し秋山さんと琴吹…ムギの表情が暗い気がするが、まあ演奏してみれば私の評価は変わるだろう。

私は田井中さんの『ギター以外はレギュラーになれない』という言葉に、私らしくないが苛ついたので。

その言葉を訂正させてやりたかった…

『ベース以外は任せられるな!』に。

「はい、終了。」

すつと立ち上がり、3人の横を通り過ぎて田井中さんの前に立つ。

「これ、ありがとうね。久々にドラム演奏して楽しかったわ。」

「…久…々？」

「ああ…私実は両親の組んでるバンドのサポートをこなしてるのだけど、担当は全部なの。」

「えっ…全部って…。」

「ギター、ベース、ドラム、キーボードの4つ全部。まあ全部が中途半端な器用貧乏なだけなんだけどね。」

「それなのにあんなに…」

秋山さんが目を大きく開き私を射抜く。

だからどれも凄く上手い訳ではないんだから大したことないって。

「みなちゃんドラムも出来るんだね！カッコよかったよ！」

「この程度誰でも練習すれば出来るわよ。」

「それでも…凄くリズムキープしやすかった…。勢いもちゃんとあったし…。」

「それがドラムだからね。」

「…」

机の脇に置かれた鞆を持ち上げて、田井中さんの座る長椅子の横に立つ。

「じゃあ私はこれで。」

田井中さんはビクツと身体を震わせるも、何も言わずただ俯いている。

…少しは見返せたのかな。

唯、秋山さん、ムギに軽く会釈し、ドアへと向かう。

もちろんギターをケースにしまっている遊には挨拶しない。

「おい、湊。」

とそれに気付いたのか、遊はこちらを呼び止めた。

「はいはい、ちゃんと挨拶くらいしろ、でしょ？じゃあまた家でね。」

「俺は最初の演奏の方が良かったな。」

…えっ？

「唯はどうだった？」

「ちょ…なによ、いきなり。」

いきなり遊が…

「えっ？…うーんとね…どっちもカッコ良かった!」

「それは俺も認めるな。なんてったって凄くカッコいい俺が演奏したからな。」

演奏がド下手で、音楽知識皆無で、ド変態の遊が…

「じゃあ…私も最初の方かな!」

私を…否定してきた。

「ちょっと待って…。遊は気に入らなかったの？私のドラム…下手だった?」

情けないがつい弱々しい声が出てしまった。

「うーん…ドラムの事は全然知らねーから上手いかどうかなんて…律、どうだったんだ?」

「えっ…ああ、かなり良い線いってた…。」

「だそうだから、問題ないんじゃない?」

私の方を見ないようにしていた田井中さんが、顔を上げて話す。

やはりこちらには視線を送らなかったが…。

「じゃあ…」

「でもな…このバンドは律が中心なんだ。律が立ち上げて、律がメンバー集めて、律が部にまで昇格させた。」

秋山さんもムギも、この場にいる全員が遊に視線を送っている。

「その律がない演奏なんて…さっきの演奏なんてな…美味しいドーナツなんだよ。」

…

…

「…えっ?」「…」

「俺はドーナツじゃなくて、餡がぎっちり入ったあんパンの方が好きなんだ。小さくても丹誠込めて作られたあんパンがな。」

…

「えっと…今のはどういう意味?そう…遊の意見は分かった…」話
続くの!??」

「でも…私にはそんな事出来ない…。」

私はこれまで根無し草みたいなメンバーとしてしか演奏したこと無いから…。

「じゃあ…湊も入らないか?」

「えっ…」

「湊みたいなマルチプレイヤーなら大歓迎だ。」

遊がそつと左手を差し出す。

昔から変わらない、私を導いてくれる大きくなった手…

その大きな手のひらによって、小さな手のひらが包まれた。

「えっと…どついう意味なんだ？」

「遊君があんパン好き、つて話じゃない？」

「じゃあ明日はあんパン持ってくるわね！」

「…絶対違つだろ…。」

軽音部に新たな仲間が加わつた。

第10話（後書き）

…えっ！？みたいな終わり方になっちゃってますね。すいません。

湊と遊は他の人にもない、お互いの理解があるってのを書こうとしたら…こうなっちゃいました。

…文才を誰か分けてください…

第11話(前書き)

みなちゃん回です

第11話

「はい、これが入部届。」

「ああ…。これからよろしくな、湊。」

「こちらこそよろしくね、部長。」

「じゃあ早速れん「お茶にしましょうか。」「いや、れんし「わい！ケーキだケーキだ！みなちゃんも一緒に食べよう！」「おい、唯まで「あつ、湊にはケーキだけでいいからな。」「…私も食べる〜！」

ガタガタン…カチャカチャ

「ほら、湊。このカップ使うか？なんかすげー高いカップみたいだぞ？」

「いらない。水筒のコップで大丈夫だから。」

「へえ〜、白木さんは水筒持参してるんだな。」

「私のことは湊、って呼んで。秋山さん。白木だと一応こっちにもいるから。」

「一応ってなんだ！俺の方が先に白木さんのお腹からおぎゃー！、って生まれたんだぞ！」

「ひるんこ。」

「一蹴!？」

軽音部の作る輪に笑いが生まれる。

俺から時計回りに律、唯、湊、ムギ、漣という並びで4つの机を取り囲んでいる。

因みに唯が無理矢理湊を、前までの俺の定位置に座らせたため、逆側に座らされる結果となった。

…バンド内でも同じ事起きない…よな？

「そういえば湊ちゃんは何を飲んでるんですか？」

「ココアだよ、ムギ。湊はココアさえあれば水分はいらない、ってくらいのココア党だから。」

「だからしら…じゃなくて…み、湊からはそんな甘い香りがするんだな。」

「そうでしょ、漣ちゃん。こうやってギョーってすると、凄く幸せになれるんだよ。」

「もう…あつあつのココアにでも抱きついてなさいよ。」

「私も〜！」

「ム、ムギまで!…はあ…唯が2人に増えたみたい…。」

唯、ムギにサンドイッチされ不機嫌そうにため息を吐く。

もちろん本心でないことは俺には分かった。

「ははっ、まるで唯とムギのお母さんみたいだな、湊は。」

「そうかそうか、そんなに羨ましいか、漣。よし！俺の胸を貸してやる！もちろん律もだ！」

バツと両腕を広げて、受け入れ体勢にはいる

「く！バカッ！そういう訳じゃない！律からも何か言ってやれよ！」

「…あっ…ああ。…遊なんか抱きつける訳ないだろ！」

「大丈夫だ！今からココアをがぶ飲みすれば、俺にも良い香りが漂うはずだ！」

「遊にあげるココアなんて世界中探しても無いわよ。」

「とりあえずその水筒の分だけでも下さい！」

「いや…あっても変わらないからな、遊。」

今日は湊が入部して初日の放課後。

ぶっきらぼうな湊だが、意外に人付き合いは上手く、軽音部とのメンバーともなかなか上手くやれているみたいだ。

ただ…

「そついえば湊の担当パートどこにしようか？」

ビクッ

「…とりあえずギターでいいんじゃないか？その方が演奏の幅広がるし…」

「難易度かなり上がるけど、2人大丈夫なの？」

「新人部員に心配された！？…しょうがない…ワシの本当の力を見せてやるっ…。」

「わ、私だって本気見せちゃうもんね！」

「湊には悪いけど、2人にきちんと教えてくれないか？」

「無視しないで、澪ちゃん！！！」

「ゆ、遊が澪ちゃんなんて呼ぶな！」

「…はあ…部活でもお守りしなきゃなんないのね…。」

「紅茶のおかわりどうぞ。」

普段と変わらず、いつものように談笑が続く放課後。

ただ…

律だけ…

「ツインベースとかじゃダメなの？」

「別にいいじゃんか！俺と唯と湊の友情パワー見せてやるっぜ！」

「お〜！」

「…はいはい、どうせ私が教えなきゃなんないからいいわ。」

「プツ…そうなるだろうな。」

「楽しみだわ〜。」

「…せめて同情してくれない？」

律だけが…

会話に参加できずにいた。

「それで今日は練習しなくていいの？部長さん？」

「…じゃあそろそろやるか。」

「でももう下校時間になるよ〜、りっちゃん。」

「…じゃあ今日は解散するか。」

「…」

いつもなら率先して帰ろうとする律が、練習すると言い出すことから、何か思うところがあるのだが、なにより今日の律は元気がない。

「…そうだな。明日からはちゃんと練習するからな。」

「はい。」

漣の発言に唯とムギが揃って手を上げる。

「じゃあ帰るか。」

「なんで遊は返事しないのよ。」

俺がさっさと鞆とケースを持ち上げ、湊が厳しくツッコむ。

「あつ、ごめん。職員室に呼ばれてたんだった。だから先に帰って良いぜ〜!」

そして律が…一人輪から離れようとしていた。

「…本当か?」

「何真面目な顔してんだよ、遊。呼ばれてるんだからしょうがないだろ。」

「…だそうだ、漣。今日は仕方ないから一人で帰ってくれ。もしくは俺が送るか?」

「うん…じゃあ一人で帰るか…。」

「サラッと拒絶しやがったよ…。」

「そうなの…。また明日ね、りつちゃん！」

「ああ、じゃあまた明日な、みんな！鍵はあとで掛けとくから！」

そう言うと律は1人鞆を置いてドアを抜けていった。

「…じゃあ帰るか。」

「そうしよっか。行く、ムギちゃん！」

「うん、唯ちゃん！」

「律…」

「とりあえず帰りましょ。私が言えた義理じゃないけど。」

俺達もぞろぞろと静かになつた部室を抜けていく。

なんだか少し気まずい雰囲気を残して…

「…もうみんな帰ったよな？おじやまします。」

ガチャン、と一つドアの閉まる音が、暗くなった部屋の中に響く。

「よいしょ…っと。よし、いっちょやりますか。」

席へと座り、目の前に並ぶ金属の塊や筒状の物体を見やる。

そしてスティックを高く掲げ

カッカッカッカッ

それを打ち鳴らした。

ドムドムジャーンドコドコドコタカタカタカ…

普段なら様々な楽器の音が交ざり合うのだが、今奏でられるのは普段の一角のみ。

「ふう…よし、もういっちょ！」

頭を傾げつつため息を一つ吐き、再びスティックを高く上げる。

カッカッカッカッ

ドムドムジャーンドコドコドコタカタカタカ…

「おっ、結構いい感じな気がする。これなら…」

「そう？私は少し走りすぎな気がするわ。」

「ひゃっ!？」

「そんな驚かなくてもいいじゃない…。私だって今日から軽音部員なんだから。」

「なあ、本当に大丈夫なのか？」

「何が？」

「律のことだよ。湊に任せてきちゃったけど…律のあんなの久しぶりに見るし…。」

「意外に分かってないんだな、漣は。」

「えっ？」

「律の問題は律しか解決できない…」

「…そうなのか？」

「でも手助け出来る奴は1人いるさ。」

「…それが湊、なの？」

俺はただ一度頷く。

「たぶん濡じゃダメ。唯とかムギでもダメだろうな。」

「じゃあ遊は？」

「ほら、俺はビビりな濡を家まで送り届けなきゃなんないし。」

「ん、そうか…。」

「…放置プレイは嫌いだな…。」

「湊…どうして…」

「ちょっと、ね。」

…

…

…

「もう練習しないの?」

「えっ!?!…ああ、今日はこのくらいにしようかな。」

「そう。」

…

…

…

「なあ、なんで部室に残ってたんだ?」

「…遊のバカに『早めに決着つけてくれ』って言われたから…かもね。」

「?」

「まあ気にしないでいいわよ。」

…

…

「帰らないの？」

「湊は？」

「そうね…部長が帰るときに帰るわ。」

「…なんで私に構うんだ？」

「じゃあなんでそんなに元気ないのか説明して？」

「…」

「まあ十中八九私の所為かな、なんて思ったから残ってるのよ。」

「…なんで…」

「しょうがないじゃない、仲間になったんだから。」

「なか…ま…。」

「仲間だから仲間の様子がおかしいのが分かるし、助けなきゃって思う。…ってこれは全部どっかのバカの請け売りだけどね。」

同じ日に、数分だけ早く生まれたバカに。

「ありがとう…もう大丈夫だぜ。」

「…私はね。」

「だから先に…えっ？」

田井中さんが私を追っ払おうとするのを遮って、ぽつりと話し始める。

「ベーストをよく見るようにしてる。やっぱり2人でリズムを作るものだし、なにより…」

それはちょっとしたテクニックではなく精神論。

そんなことを話そうとしていた。

「2人の音を一番キレイに、カッコよく、大迫力に聞こえるようにするには…って考えると、自然とリズムが合うの。」

けして訊ねられていないことを…

「この前もそう…秋山さんの背中を見ながら、…を見ながら演奏してた。だから上手くいった。」

でもたぶん一番聞きたいであろう事を、ただ淡々と綴る。

「うん…確かに凄く漣が楽に弾いてた。」

田井中さんはまた顔を伏せる。

技術的な部分でパートナーに迷惑をかけていた…またそれに何も言わずにいたパートナーに申し訳ないから…なのかな。

「…でも、みんなが選んだのはあなただった。」

「えっ？」

「ドラムの技術じゃ負けてない自信がある。…それでもみんなは走りすぎるあなたのドラムを選んだの。」

それは人生何回目かの敗北。

「負けたのが凄く悔しかった…。」

そして人生何回目かの挑戦の始まり。

「だから軽音部に入ったんだから…あなたは楽しそうに演奏してればいいの。私があなたに勝てる術を手に入れるまで、だけどね。」

「湊…。」

「じゃあ私は帰るわ。もう暗くなっただし。」

「あっ…。」

ドアの付近に置いた鞆を手にし、ドアノブを捻る。

「待てよ、湊。」

「何？」

「…ありがとな。あと片付け手伝ってくれ〜！」

「じゃあね、田井中さん。」

「いや、ちょっと待ってっ！」

厄介事を押し付けられる前に逃げようと、踵を返した私を必死に止める。

「それと律、だ！」

「？」

「律、って呼べって。いつまでもそんなんじゃない仲間っぽくないだろ？」

「ライバルだからいいんじゃない？」

「いや、仲間兼ライバルなんだから、絶対呼んでもらう！…だからこれで…仲直りってことで…」

「急にしなだれるんじゃないわよ。」

「しょうがないだろ！…まだ…本当に立ち直った訳じゃないんだから…」

ポツポツ話す田井中さん。

「私はバンドにいるのか凄く不安になった。私よりも上手い湊が入ったんだから、レギュラー落ちするんじゃないか…って。」

「運動部じゃないんだから、スタメンとかないんじゃない？」

「それは私の問題だからさ。湊には分かんないよ。…でも凄く助か

った。ありがとな。」

「……………めちゃくちゃね、律……………」

「よし！今日は練習するぞ〜！」

「お菓子食べ始めてから30分以上経ってやっとなの？律は見た目通りの不真面目な人間なのね。」

「私みたいな天才は、少しの練習時間で十分なの！」

「それに合わせてたら、明らかに凡人の遊が一生上手くならないから。」

「あゝ、それは確かに……………」

「俺に飛び火するな！」

「ふふっ……………なんだか随分楽しそうだわ〜。」

「だね〜！なんだか前から友達だったみたい！」

「…」

「どうしたの、澪ちゃん？」

「…私も混ぜて〜！」

「じゃあ俺の立場と代わってくれ〜！」

「こうして1日遅れたが…」

ようやく軽音部に

新たなメンバーが加わった。

「それでなんで私だけ名前呼びじゃないの？」

「…悪かったわね、秋山さん。」

第11話（後書き）

ようやく主人公が軽音部に…

無駄に長かったか？って反省してます…

では感想お待ちしております！

第12話 改(前書き)

テスト編：まあ完全にオリジナル回です

第12話 改

「これがAm7だよね！」

唯は満面の笑みを浮かべつつ、ギターを鳴らす。

「正解。それじゃあ次は……」

「唯もようやくコード覚えてきたみたいだな。」

「一つのコードを思い出すのに5秒はかかっているけどな。」

「でも最初は思い出せなかったんですから、大きな進歩じゃないですか！」

「ムギ、それフォロー出来てないぞ。」

現在、俺、律、漣、ムギの4人はまったりと紅茶を飲んで、珍しく『今日は練習する！』と紅茶を淹れている最中に言い出した唯と、それに付き合う湊を観察していた。

「じゃあ次は続けて『C、Am7、Bm7、G7』って弾いて。」

「えーっと……ほいほい。」

唯はやっぱり少し思案した後、しっかりとコード通り弦を押さえ、ストロークしていった。

「おお、ちゃんと弾けてんじゃない。」

「すごい、唯ちゃん！」

「いや、照れるな。」

唯は照れくさそうに、しかし満足げに頭を掻く。

「まあとりあえずは弾けるようになったわね。後は来週までちゃんと覚えてなさいよ。」

「そういえば明日からテスト期間で部活動禁止だったな。」

ピシッ…

「そういえばそうね。再来週の月曜日からですもんね。」

「まあわざわざテスト期間なんて作る必要なんてないわよね。普段の成果を見せるんでしょ？」

「まあ確かにな。」

「でもちゃんと復習できる時間があつた方が、身に付きますよ。」

普段と変わらず楽しげにティータイムを始める3人。

「ま、まあテストなんか余裕だろ！」

「そ、そうだよな！」

「ぜ、前日にやれば間に合うだろ！」

明らかに挙動不審になる3人、と二極の対照的な光景が部屋には形
成されていた。

「大丈夫なのか？この3人…。」

「あ、赤点取んなきゃいいんだろ！よゆうーよゆうー！」

「律には無理なんじゃないかな。」

無駄な先制攻撃。

「なにを〜！遊の方が頭悪いだろ！」

分かりきった反撃。

「んなわけあるか！バカでデコの律に負けるかよー！」

そしていつものように口論が始まる。

「「はあ…。」」

「2人とも大変ね。」

頭を抱える妹と幼なじみのカップに、ココアと紅茶が淹れられる。

「よ〜し、分かった！それなら勝負しようぜ！」

「よし、いいぜ！負けた方がアイスだからな！」

ギャーギャー叫んでた2人が比較的早く決着をつけたらしい。

「はいはい！私もアイス食べた〜い！」

「唯じゃ奢る羽目になるだけだから、諦めろって。」

「むう〜、そんなことないよ〜！私だってやれば出来るもん！」

賞品に釣られまた1人追加。

「それじゃあみんなでやろっよ！」

「えっ？」

「私達に勝てると思ってんのかしら？…考えてないか…。」

「は〜い！私も参加しま〜す！」

ぼわぼわと4人目参戦。

「まったく…みんな子供じゃないんだから…」

「ムギが参加するなら、全力でいけるわね…。」

「湊まで!?!？」

妹も追加。

「…私もやる〜!！」

最後に寂しがり屋も参戦し、ここに軽音部対抗学力対決が開催された…。

「でもさ〜、漣がいるんじゃないよな〜。」

「湊もだよ。湊のやつが90点以下取つたの見たことないし。」

「絶対遊には負けないから。」

「なんかめちやくちや対抗心燃やしてるし…。」

目から火が出てませんか、湊さん？

「う〜ん…それじゃあゲームとして面白くないからな〜…。」

律が何か新しい案を考える。

「…ちゃんと勉強すればいいんじゃないか？」

「…たぶん勝てないって本能で察してるんですよ。」

軽音部に野生動物は3匹いたみたいだ。

「閃いた！お〜い、それじゃあチーム対抗戦にしないか？」

「チーム…対抗戦？」

「ああ、私、遊、唯と漣、ムギ、湊の3人でくじ引きして、2人ずつのペアを作つて、それで2人合計の点数勝負しようぜ！」

「…それなら確かにいい勝負出来そうだな…。よし、そうするか！」

「よし、それじゃあ早速くじ作るぞ〜！」

「お〜！」

俺、律、唯の3人が仲良くくじを作り始める。

「…ちゃんと自分達の学力が分かってるようね。」

「勝てる方法見つけたみたいだな…。」

「楽しみね、くじ引き！」

それを見守るのが、湊、漣、ムギの3人だった。

「じゃあ頼むな、漣。」

「律もちゃんと勉強するんだぞ。」

幼なじみコンビ、律漣。

「絶対律には負けないからな！頑張るぞ〜！」

「お〜！」

どこか抜けてるコンビ、遊ムギ

「頑張ろうね、みなちゃん！」

「…まあ誰でもお守りみたいなものだしね…。」

そして2組コンビ、唯湊

というチームに分かれることになった。

そして今は部室に集まって、チーム毎に試験勉強の真っ最中…

「お〜い、唯〜！休憩しようぜ〜！」

「そうだね、りっちゃん！」

なんてことは殆ど出来ていなかった。

「おい、さつき休憩したばっかだろ！」

「はあ…今から個人戦に変えない？」

普段勉強しない奴は、いつやっても集中することなど出来るわけもなく、30分勉強しては1時間の休憩をバカ2人は取っていた。

「はあ…遊とムギはちゃんと勉強してるのに…。」

「…それはどうかしらね。」

「えっ?」

湊が指を指して、ムギ、遊のいる方向に顔を向けさせる。

「へえ、オーストリアのサッカーって世界一古い歴史があんだな。」

「ええ。私もお祖父様に連れて行ってもらったことあるんですよ。」

「うわ、うらやまし！俺もいつかイングランドとかスペインに行ってサッカーの試合見てみたいんだよね！」

「サッカーはそちらが本場なんですか?」

「この2つが世界3大リーグって言われるくらい、強豪ひしめくサッカーのリーグなんだよ！」

「それじゃあやっぱりすごいプレイとかいっぱい見れるんですか?」

「うん…試合によるけど…前に深夜で見てた試合なんだけどさ…」

「…めちゃくちゃ楽しんでるな…。何やってんだか…」

「本当よ。サッカーはセリエAに決まってるじゃない。」

「…いや、そんな話はしてないから…湊。」

「それはともかく、ムギ凄いわね。話しながらもちゃんと問題集進めてるわよ。」

「…ムギは何者なんだ…。」

「…このままじゃ負けるかもね…。唯、早く勉強に戻りなさい。」

「律もだ！早く座れ！」

こうして6人の学力差は二分されていく。

そしてテスト前日…

「…「助けてください！」」「」

それぞれがパートナーに頭を下げる結果となった。

「勉強しろ、ってあれほど言ったよな、律？」

「唯もね。」

「すいません、お代官様〜！」

ここで簡単に土下座するところからして、深刻な問題なんだろう。

少なくともこの2人にとっては…

「一緒に頑張りましょうね！」

「ありがと〜、ムギ〜！大好きだ〜！」

1人聖母を味方に付けていた遊はすぐさま許しをもらい、その勢いのままハグをする。

「えっ…遊…さん…。」

「遊、あんたもこっちきて正座しなさい。」

「そうだな。早く横に並ぶんだ。」

「お代官様！？何故に!？」

この後頭を床にこすりつけるほど、頭を下げなければ2人から許しはもらえなかった…。

「あれ？遊の部屋まだ明かり点いてる…。」

テスト前日の夜、学生（主に劣等生）が必死に知識を詰め込む深夜1時。

前日だというのに、そこまで勉強をしなかった放課後を終えて帰宅

したわけだが…。

普段なら海外のサッカー中継がなければ惰眠をむさぼっていり遊が、テレビのある居間にいるわけでもなく起きている。

「遊、入るわよ。」

きつちりノックを2回して、たつぷり5秒待つてから部屋へと入る。

何故だか分からないが、男の部屋に入るときは少し待つのがマナーらしい。

まああのお父さんが言ったことだから全く信用は出来ないが…。

「…遊？」

ガチャリとドアの開く音が響くも、部屋の主は気にすることもなく机で何かしていた。

「ん？湊か、どうした？」

部屋の空気が変わったことに気付いたのか、それとも何かあるのかは分からないが、少し時間が経つてから遊はこちらを振り向く。

音楽を聞いていたらしく、イヤホンを取りながら急の来客に対応した。

「こんな時間はこっちのセリフよ。早寝遅起きの遊が今の時間にサッカー以外で起きてるのに疑問を持っただけよ。」

しかも普段は全く使わない机に向かって…という言葉は上手く引っ込んでくれた。

「ああ…明日からテストだからな。一夜漬けだよ。」

「遊が一夜漬け？今まで一度も見たこと無いけど。」

中学まではテスト前日でも22時にはベッドに入っていたし…。

「俺1人ならそんなんでいいんだけど、今回はムギとチーム組んでるからな。足引つ張るわけじゃないだろ？」

「…はいはい。遊はムギの事がだ〜い好きなんだからね。」

私はつい苛立たしげに返す。

「…なんかトゲがあるな。まず俺はムギだけじゃなく、軽音部のみんなの事だ〜い好きだからな。もちろん湊もな。」

「…だからなによ？」

「だ〜い好きな奴から頑張れ、って言われたら頑張りたいし、良い点取って、って言われたら良い点取ってやる！って気になるだろ？だから別に普通のことだろ。」

遊はいつもの独自理論を振りかざす。

まあ案外常識的だから問題ないかな…。

「…いちいちだ〜い好きって伸ばさないで。気持ち悪いから。」

「論点ずらすな!…ってなんで湊もこんな時間まで起きてるんだよ?」

「…」

そうやって返答に困る質問をしないでほしい。

とつより毎年のように見ているのなら、感づいてもいいと思つ。

「ん?どうした?」

「…なんか寝つけないのよ…。」

「ああ…またか。」

遊は苦笑を殺せず、少し顔を綻ばせつつ引きつらすという高度な表情を見せた。

「でもテストだぞ?何も楽しいことないだろ。」

「別に明日の事は関係ないから。」

「でも…なあ?」

たまたま修学旅行とか運動会とかイベントの前日に寝れないことが多いだけで、理由にはなっていない…はず。

「そうかそうか。それで寂しくなってお兄ちゃんを起こしにきたんだな。はいはい、じゃあ子守歌でも「いらぬから。」…小学生の

頃はよくやってやったじゃん。」

「…あの頃はあの頃よ。」

「去年も壁ノックして無理やり起こしたじゃん。」

「私寝相が悪いからたまたまよ。」

「…18連打ノックは俺の中で伝説になってるよ。」

…そんなに叩いた？

「まあ勉強頑張りなさい。私はもう寝るから。」

「結局寝るんかい！良い夢見るよ、こんちくしょ〜！」

何を恨まれているのかは分からないのでとりあえず無視して、再び自分の飾り気の無い部屋へと戻り、ベッドに潜る。

ふわつとした掛け布団の軽い重みが私の身体を包む。

…睡魔がようやく来てくれたようだ。

急に感覚が遠のいていく。

そのまま意識を手放してしまえばいいのだが、私はあえて昔の私へと逆行する。

トントントン

…

コンコン

「おやすみ…」

数瞬して帰ってきた響き…自分の部屋と隣の部屋で奏でられた音を聞くと、私はようやく意識をゆっくりと手放していった。

「ようし！テスト終わったぞ〜！」

「疲れたよ〜。ムギちゃん、お菓子〜。」

「ちょっと待っててね、唯ちゃん。」

トットトットと軽やかなステップで本日のお菓子と、ついでに紅茶のカップ+1を用意する。

+1は私のコップだ。

ココアを飲むことがムギに知られた次の日には、このホット用のコップとちよつと高級なココアの粉が用意されていて、それからは私もムギの恩恵を受けていた。

「早速勝負の結果見ていこうぜ〜！」

「ちよつと待てよ、律。まだ私達のクラス、英語しか返ってきてないだろ？」

「あつ、私達のクラスも英語返ってきたよ〜！ね〜、みなちゃん！ね〜！つと唯が同意を求めてくるので、はいはい、と軽くあしらうように返事する。」

「私のクラスも〜！」

ムギも手を挙げてテストが返ってきた事をアピールした。

でもポット持ったままはしゃぐのは危ないんでやめて欲しい。

「じゃあそれでいいんじゃないか？どうせ律には負けてないしな。」

「その減らず口後悔させてやる、遊〜！」

「はいはい、じゃあその律から見せて。」

このままでは埒があかないと判断し、話題を振った律にとりあえず出すように言っ。

「私？いいぜ、…私のは…これだ！」

バンと前に突き出されたテストには多くの とほどほどの×が…

「75点…ね。」

「じゃあ！俺の勝ち〜！…ほらっ、77点！」

「なっ！…遊なんかに負けた…。」

がつくりとうなだれる律と、そのうなだれた頭をポンポンと叩く遊。

「はいはい、私73点だったよ〜！」

唯も続けて、なぜか得意気にテストを見せる。

「私、英語でこんなに良い点取れたの初めてなんだ。だから嬉しくて嬉しくて…。」

「おめでとう、唯ちゃん。」

ようやくティータイムの用意が出来たムギが、紅茶を一つ一つ置きながら賛辞する。

「じゃあムギは？」

「私？私は…はい。」

そっと鞆から出されたプリントには殆ど が書かれている。

「95点…流石ムギ…」

「20点も差が…」

「やるな、ムギ。私は94点だったよ。」

「じゃあ私の勝ちね。はい。」

次いで答案を出していく漣と私。

「ぐはっ！」

「…あははは…今回はちょっと調子悪かったからな。」

ただ結果を見せてるだけなのに、2人はなぜかブルーな表情になる。

「すごい！みなちゃん、満点だ〜！」

「凄いな、湊。」

「次は負けないわ、みなちゃん。」

唯、漣、ムギの3人がそれぞれがそれぞれのコメントを紡ぐ。

なんか少しくすぐったく、出されたココアを頂くことにした。

「それじゃあ結果は…。」

「唯、湊の勝ちだな。」

…

あれ？唯だつたら意味分らないくらい喜ぶと「やった〜！〜！や
ったよ〜！みなちやくん！」…だから抱き付かない。

「それじゃあ久しぶりに練習するか。」

「へ〜い…。」

遊と律がやる気ない声を出しつつも、自分の楽器を準備する。

商品を奢ることになったことが、そんなに嫌なのかな…。

「じゃあ唯も演奏出来るようになったし、とりあえず合わせてみよ
うか。」

「よっしゃ〜、こつなりやけだ！1、2、3、4！」

律の合図に合わせて、それぞれがそれぞれのパートを演奏していく
…っつて。

「ちょっと待って。…唯？」

とつと出番が来ているのに、固まったままギターを弾かない唯がいた。

確かに思い出すのに時間がかかるのが、デフォルトの唯だから引き出せないのは前からだったけど…

「…忘れた…。」

「えっ？」

今物凄く聞きたくないことが…

「コード忘れちゃった…。」

…

「「「えっ！…！」」」

「はぁ…。」

「えっと…。」

チャララ〜チャラ、チャラララララ〜

「チャルメラは弾けるんかい！」

「…唯の分のアイス無しでいいわよ。」

「そんなんっ!?!」

また1から教え直しなの…? ?

第12話 改(後書き)

仲がいい女子って何かと集まって勉強してたイメージがあるので、
こんな感じになると話を勝手に変えちゃいました。

間違えて未完成の上げていたの気付かなかったですorz

第13話(前書き)

夏休み前のまたオリジナル回です。

原作崩壊してますね(笑)

第13話

「じゃあ次が最後になります。…いや、そんなアンコール言われなくてもオジサンたち疲れちゃってね。…そんなこと言っていないって？ まあまあ、それは置いといて…、告知もしたんだけど、実は我らが『G4』のサポートメンバーとして今日も可愛らしくキーボードを奏でてる『みなちゃん』こと『みなみな』が今日でサポートメンバーを辞めちゃいます！…こっちにもちゃんと文句あるみたいだね。このバンドの紅一点として頑張ってくれたんだけど、高校生活が忙しくなっちゃったからできなくなっちゃったんだ。だから次の最後の曲、『Gトラベル』で華々しく送り出してあげたいと思う。まあこの曲の主人公であるオジサンがあのに世に旅立つちゃう話なんだけどね。それじゃあみなちゃん！最後に一言！」

たっぷりMCを繰り広げ舌好調だったマツさんが、予定には書かれていないマイクパフォーマンスを求めてきた。

普段なら絶対に断る所だが、最後、という事もあり素直にマイクを受け取る。

「今日はこんなオジサンだらけのバンドを聞きにきてくれてありがとうございます。今日は今日でいなくなりますけど、もしよかったらこの旅立つ寸前のバンドの演奏を何度も聞いてください。」

「あと30年は生きるわ！」

「それじゃあ『Gトラベル』です。」

マイクをマツさん(47)に返す。

そこでようやく私の最後の

サポートメンバーとしての

最後の曲が奏でられた。

「じゃあムギちゃん家の別荘で泊まって…夜はバーベキューがいいな。」

「花火もやろうぜ！花火！」

「私バーベキューやってみたかったんです！」

出された意見を順々に書いていく。

「海も近いんでしょう？」

「じゃあ昼は海水浴だな！」

カキカキ

「いや、海が近いなら朝から遊べるな。…じゃあ次の日は朝からだな！」

「え〜！でも夜はいつぱい寝たいから、お昼からがいい〜！午前中はみんなでゴロゴロしてたいな〜！」

「ゴロゴロしてみたい！」

カキカキ

すいか割り！

かき氷！

ビーチバレー！

プール！

カキカキカキカキ

ガチャ

「ごめん、遅くなった。それで話は順調に…」

「はい、これ。」

「…何これ？」

「この3人が決めた合宿のスケジュール。」

書記を務めていた私が、言われた通りにスケジュール立てた紙を、遅れてきた漣に渡す。

「12時着…13時～海水浴…18時～バーベキュー…」

「ああ、海水浴の時間は私がテキストに決めといたから。もしかしたらその間に練習が入るかもね。」

「…ふ…」

あっ、漣を怒らせすぎたみたい…。

私はいまだ騒ぐ3人を放っておいて、1人耳をふさぐ。

「ふざけるんじゃない!」

「ひっ!」「わっ!」「きゃっ!」

もしかしたら漣が来たことすら気付いてなかった3人は、三者三様の驚きを見せた。

「みんな!合宿なんだから、練習漬けの日程にしなきゃダメだろ!」

「でも…折角の海だぜ?」

「あっ!今度新しい水着見に行かない?」

「さんせ〜!」

「前日、水着準備…っと。」

「話を聞けっ！」

ゴツンゴツン！

「じゃあ真面目に決めるぞ。」

「…なんで私と唯だけ叩かれなきゃなんないんだよ…。」

「ぶうーぶうー！」

ギロツ

「さ…さあ、予定決めるか！」

「そうだね、りっちゃん！」

凄まじい殺気を感じたわ…。

「じゃあ12時着、昼食後18時まで練習な。」

カキカキ

「それから20時までで晩御飯と休憩。そして22時まで練習。初日はこんなもんだろ。」

カキカキ

「次の日は朝8時起床で、9時から練習。12時までやったら」も

う勘弁してくれ〜!」…なに、律。」

練習の枠でビッチリと埋まったスケジュールに待ったをかけるのは、我が軽音部部长…って普通逆じゃないの？

「ちょっとくらい遊ぼうぜ〜!せっかくみんなで遠出するんだからよ〜!」

「合宿なんだぞ!練習して当然だろ!」

「だからって練習はつかじゃ効率悪いだろ!なあ、遊だってそう思うだろ?」

「遊!遊だって練習しなきゃ、って思うよな!」

…

…

「遊君いないよ?」

「クラスの男子の友達とカラオケ行っただんでしょ?」

疑問文だが、男子4人だけでカラオケ屋に向かったのは確認済み。

「じゃあ湊!湊はどっちがいい?」

「どっちでもいいわよ…。」

「湊までそんなこと!合宿なんだから練習しなきゃダメじゃないか

「！」

「じゃあ漣ので。」

「でも気分転換も必要だろ!？」

「じゃあ律ので。」

…もつめんどくさい…。

「?みなちゃん、どうしたの?」

「…なんでもない。」

「何か嫌なことでもあったの?」

「…強いて言えばこの争いかしら。」

こんな不機嫌…いや不機嫌な訳じゃないのだけど…こんなに内面を
読まれやすいほど弱っていたのかと、内心愚痴と反省を零す。

「りっちゃん、漣ちゃん!ケンカはダメ〜!みなちゃんが哀しんで
るから!」

私が唯に見抜かれてる間もずっと言い争いを続けていた2人が、唯
の一言でぴたりと止まる。

「あつ…!ごめんな、湊。」

「ごめん。」

2人は真剣な表情で頭を下げる…というか私が哀しんでる、ということになってるらしい。

「…まあいいわ。」

私自身に呟いたはずの一言で、2人はしずしずと座り込んだ。

「じゃあとりあえずお茶にでも…」

コンコン

「失礼します。良かったらお茶でもどうですか？」

「あつ、ありがとう、憂々！」

「あつ、すいません、お構いなく。」

漣が会釈をして、社交辞令を述べるもそそくさとお茶と茶菓子をテーブルの上へ人数分置いていく。

「唯…こちらさんは？」

「あれ？知らないのか？」

「そういえば帰ってきた時、まだ憂は帰ってなかったもんね。よいしょつと…紹介するね！私の妹の憂だよ！」

わざわざ席を立ち、横に並んで私含め先に来た3人に紹介をする。

あとから来た漣は、部屋まで招かれる時にでも交流したのだろう。

「初めまして。妹の憂です。よろしく願いします。」

「へえ〜、こちらこそお邪魔しちゃってすみません。」

…律が敬語？

「こちらこそ何もおもてなしできなくてすみません。」

「いえ、勝手に押し掛けたのはこちらなので…。」

…漣まで？いや、漣なら普通かな。

「憂さんはおいくつなんですか？」

「私達とそんな離れてないと思うんですけど…」

「あつ、1つ違いです。」

「へえ〜、じゃあ高校は…」

…明らかにおかしい。

…

…まあいいか。

「高校？えっと…一応桜が丘高校を…」

「へえ、先輩なんですね！出来の悪い妹を持ってどうですか？」

「おい、失礼だろ、律！」

あつ、ムギも頭を傾げてる。

確かにそっちの方がしっくりくるものね。

「あの～…私が妹なんですけど～…」

…

「へっ？」

「憂は私の妹だよ。」

…

「え～～～っ!？」

「おっ、きからそう言ってるじゃない…!」

「あゝ、今日は楽しかった〜！またみんなで来ようぜ〜！」

…

「おゝ、そこまで乗り気だと嬉しいね〜！よっしゃ、次は明日だな
！」

…

…

「なんだ…山田も田中も用があんのか…。じゃあまた次の機会だな。」

「

…

「えっ、そんなことないない。だいいち軽音部でそんな練習しないから。」

…

…

「いやゝ、そこまで言われちゃうと遊君照れちゃいますよ〜。でも
やっぱ1人で歌うより、みんなでバカ騒ぎしながら歌う方が好きだ
から、たぶんやんないかな。」

…

「そつだよ。上田の美声と合わせるのが最高なんじゃん！」

…

…

…！

「ハハハッ！山田は別に…俺もいいかな。」

…！

「冗談だって、冗談！山田がいないと楽しくないから！そんな怒らないで、明日も行こうぜ。」

…！

…！

「ハハハッ！これも冗談だって！じゃあまた明日、学校でな！じゃくねい！」

…！

…！

…！

「ハハハッ！…うしっ！エネルギー全開！」

パシンッと両の頬を叩く音が、辺りに虚しく響き渡る。

「じゃあちよつと本屋に寄ってから…っつと。」

このまままっすぐ行けば歩いて15分程で家に着くのだが、あえて遠回りする。

今日はめいっばい気分転換する日だと決めたのだから、好きなことをめいっばいしない。

俺は道をそれ、本屋のある少し大きな通りを歩き出した。

「えつと…こつちであつてたっけ？」

見知った場所ではあるのだが、車で通過しただけだったり、実際通るのも半年ぶりくらいなので、いまいち店の位置関係を思い出せなかった。

「本屋ね〜し…。これならカラオケ屋の隣の本屋に、素直に行きや良かったな〜。」

左右を注意深く見ていくも、肝心の本屋は全く見当たらなかった。

「ちつくしよ〜…大人しく今日は帰るか…あつ…。」

踵を返す直前、最後とばかりに前方に並ぶ店を眺めると、そこには見慣れた場所があった。

俺は吸い寄せられるように、店の前まで歩く。

「…剥がし忘れかな。」

その店のガラスの内側にピッタリと貼られたポスターを指でなぞる。それはド派手なポスター…あまりにも年齢とかけ離れたセンスだから、何度も変えた方がいいんじゃないか、と口を出しても変わらなかったポスター！。

『みなみなラストライブ！G4の紅一点の最後を見逃すな！開催日7月……』

そうだった…だから今まで通らなかったんだ。

…だから車でよく通った道なんだ。

ここは俺が捨てた場所。

たった5回だけだが、俺が立った場所。

「っ…！」

ダッ！

ただひたすら来た道を走り抜ける。

夕方なので人の流れが多かったため、通行人に何度も肩をぶつけるが、謝罪の言葉をかける事もなく、ひたすら走り抜けた。

がむしゃらにただ走りつづけ、道が分かれたら本能に従って道を選ぶ。

夕暮れの大通りを駆け抜け、小道を駆け抜け、曲がり角を駆け抜け…
そして本能的に足が止まる。

そこは通い慣れ始めた桜が丘高校。

よくよく考えれば、今走ってきた道も今日クラスメイトと通った道
だった気がする。

グラウンドでは体育系の部活が片付けを始めている。

俺はそんな光景を一瞥して校舎の中へと足を進めた。

外履きを履き替え、向かうは普段お茶してただだべって…たまに楽
器の練習をする音楽準備室。

ドアノブを回してみると、ガチャリと戸が開く。

たぶんどこかの間抜けな部長が閉め忘れたのだろう。

今日ばかりはその間抜けさに感謝しつつ、そっと中へと入る。

そこには時間からして当然人影などなく、少しホッと安心し倉庫に
置かれたベースを取り出す。

湊が軽音部に入ってからずっと、隠すように置いていた。

俺はそのまま長椅子に座ると、チューニングもしないまま無我夢中
に音をかき鳴らす。

何で俺は忘れてたんだ…

メロディーとは言えない、雑音が力強く…か細い…を隠すように流れる。

かき鳴らす…

かき鳴らす…

本能的に…頭の中で作り上げられていくメロディーをかき鳴らす…

先程までに貯めたエネルギーを勢い良く、無駄に減らしていく。

なんでエネルギー補給したのか忘れてたのか…。

ガソリンが0になるまで、今日は何かを奏でたい…

歌いたい…

…ちたい…

結局警備員のオジサンが来るまで、準備室にはひたすら、聞くに耐えない雑音が流れた…。

第13話（後書き）

遊君、湊さんそれぞれが何かを考える回でした。

この伏線はいつ回収されるのか！？

はたまたされないのか！？

…いや、するよつに頑張ります…

第14話(前書き)

合宿編 その1です

第14話

チュンチュンと鳥のさえずりが私を緩やかに眠りから覚醒させた。

時刻は午前7時前。

普段なら少し遅いくらいの目覚めだが、高校は昨日から休みになっているため、そんなに気にすることもない。

あまり物音を立てないようにベッドから抜け出し、部屋のカーテンをそろそろと全開にした。

強烈な光が部屋の中に入ってくる。

天気は快晴…どこまでも青い空が広がっていた。

「んっ…」

腕を天井に向かって伸ばし、鈍った身体をほぐす。

そこで睡眠時間4時間の私はようやく完全に目を覚ました。

水色のシンプルなパジャマを脱ぎ、ピンクのTシャツ、黒のスカート、白の半袖パーカーと順に着ていく。

着替え終わると簡単にパジャマを畳み、階下にある居間へとそれを持って降りていく。

居間には新聞を真面目そうに…しかし絶対頭には入れていないお父

さんと、せわしなくキッチンの中を動く…しかし無駄な動きが多すぎるだけなお母さんが見えるだけだった。

「あゝ、良いところにきたわね、湊！早速だけど手伝って〜！」

居間を一瞥してから、洗面所へと向かい顔を洗ってから再び居間へ。

「ちょっと、湊〜。早く手伝って〜。」

私はもう一度階段を上り、遊の部屋の前へと辿り着いた。

「遊、もうすぐ朝ご飯出来る。早く起きなさい。」

コンコン…

「…入るわよ。」ガチャ

遊の事だしまだ寝てるん…

「おう、おはよー湊。」

遊はすでにパジャマ姿でもなく、上はVネック、下はGパン、シルバーのネックレスを身に着けていた。

「今日は早いわね。」

「そうか？いつもと変わらない気がするけど？」

確かにこの頃は7時までには休日でも起きるようになっていた。

でも…前は…

「私が起こしても起きなかった人が言うセリフじゃないわね。」

「人は常に進化していく生き物なんだよ…。つまり俺もパーフェクト遊に！」「じゃあ早く降りてきなさいね。」

朝からテンションの高い遊を放って置いて、家の中でもう一人朝からテンションの高い人の所へと向かう。

早く行かないと拗ねだして、いちいち面倒くさい。

今日からの軽音部の合宿で子供2人が家を空けることに、昨晚は断固反対…まあただ駄々をこねただけだが、そんなことがあったので、今朝くらいは優しく接しよう。

なんだかんだ言っても自分の母親なのだから、やっぱり大切な…

「も…やだ！湊が作らないなら私も作らない！湊のば…か！」

…今日は1人分朝ご飯を作らなくていいみたいだ。

私は階段を降りている最中に聞こえた声を、頭の中のメモにきっちり書き込む。

「そういえば…」

先程遊の首に何かか巻かれていたのを思い出した。

銀の鎖で何かを通してあるアクセサリのように見えた…。

「遊ってああいうの嫌いじゃなかったっけ…」

なんでわざわざ装飾しなきゃなんないんだよ！

とか…

いちいち着けんのがめんどい…

とか言ってたのだが…。

私はフライパンの上で熱されるベーコンエッグをぼんやりと眺めていた。

…

…あっ、…これはお母さんのにじみ汁。

「お待たせ〜！」

時刻9時20分…待ち合わせ時間から20分もオーバーしてようやく唯は待ち合わせ場所に現れた。

「挨拶はいいからっ！早くしないと電車間に合わないぞ！」

遊は引つたくるように唯の手荷物を奪い取ると、そのまま私たちが待つホームに向かって走る。

「唯早く来い！あれに乗らなきゃマズいんだよ！」

待ち合わせ時間になっても現れなかった唯に、まさかと思い電話を試してみると「おはようございます」の一言が帰ってきた。

「で、でも…もう、疲れ、たよ〜！」

「あと少しなんだから死ぬ気で走れ〜！」

あと少しで乗らなくてはいけない電車に間に合わない、という事態になってしまったため、遊を荷物係として配置し、時間通り来た私達4人はホームで待つことにした。

そして今現在に至る。

ドアが閉まります。駆け込み乗車は危ないので…

プシュー、ガタン

…

「…ギリギリセーフ…」

「はあ…はあ…もう…ダメ…」

「お疲れ、遊。」

「これお茶です。唯ちゃんもどうぞ。」

ドアが閉まるギリギリに滑り込んだ遊と唯に、ムギからペットボトルのお茶が手渡された。

「あり、がとう、ムギ、ちゃん…。」

「おい、電車の中、は、飲食厳禁だぞ…。」

「意外とマナーに厳しいんだな。」

そのマナーに厳しい遊は、席にドカッと座ると脚を真っ直ぐ伸ばし、空気を求め胸を大きく膨らましては吐いている。

上下する胸元には今朝していたネックレスが煌めいている。

「もうあとは乗ってれば1時間くらいで着くから、それまでゆっくりしていいよ。」

その後2度ほど乗り換えをし、ようやくゆっくり出来る時間が出来た。

「ういゝす。じゃあ俺は寝るから、駅に着いたら起こしてね。」

私の隣に座る遊は窓側に頭を傾けて、休息をはかろうとし、すると

すぐさま寝息を立て始める。

「もう寝てる…。まだ1分も経ってないじゃない…。」

この寝付きの良さは絶対に私から奪っていった才能の1つ、と昔から考えている。

「遊君の寝顔可愛いね〜。」

「私もそう思う〜。」

「まあ普段のうるさい遊とは違う雰囲気だな。」

「確かに。」

軽音部の面々がそれぞれ遊の寝顔に評価を下す。

「こっやって見ると遊って結構カッコいいよな。」

「あれ〜、漣ちゃん。もしかして遊に…」

「べ、別にそんなんじゃないぞ!」

「うん、漣ちゃん!遊君はカッコいいよ!」

「唯ちゃん、し〜。」

私達の席だけやたらと大きな小声が響く。

遊は少しうなされるも、起きることはなかった。

今では私の肩にもたれ掛かるように寝ている。

といっても身長差があるため上手く肩に頭が乗っていなかった。

「普段からこうならいいのにね。」

私は少し身体を傾けて、遊の頭の下に自分の頭を入れる。

そしてそのまま暖かな陽気に誘われたかのように目を閉じた。

やはり昨日寝れなかったのが、今になって偶然ガタが来たようだ。

私の頭を遊の右肩が支え…

遊の頭を私の頭で支える。

起きたときに何を言われるか分からないが、私は遊の重みを感じながら深く落ちていった。

「なんで俺が湊の荷物まで持たなきゃなんないんだよ…。」

「当然じゃない。」

肩に食い込む黒のケースが更に俺を歩きにくくさせていた。

電車、バスに揺られること1時間強、その後15分程歩いて、俺達はようやく今回の合宿地であるムギの家の別荘に着いたのだが…

「で、でかつ…」

それはもうやたら大きい家が1つ、そこには鎮座していた。

ついつい内心が漏れてしまう。

「ごめんなさい。本当はもっと広い所に泊まりたかったんだけど…一番小さい所しか空いてなかったの…。」

…

きつとムギ以外の全員がこう思ったろう。

『いや、十分すぎるだろ！』

「よ…よし、それじゃあとりあえず荷物置くか！」

「ムギ、部屋はどこだ？」

こうなりゃやけだ。

この1泊2日、豪遊生活を味わってやるうじゃねーか。

律も同じ考えなのか、勢い良く別荘の中へと入っていった。

「それじゃあ部屋割りだけど、遊は1階、女子は2階な。」

「へいよ〜。湊、これ忘れてるぞ。」

俺は今までずっと担いでいた湊のケースを軽く持ち上げる。

「それは遊のとこ置いといて。」

「…はっ?」

「それじゃあ。」

スタスタと階段を上がっていく湊。

呆然と階段の先を見上げる俺。

「あらあら〜、奥さんが逃げちゃったな〜。遊。」

「あ〜、結婚したから同じ苗字に…なわけねーよ!」

眞実は迷宮入りだが、電車の中で俺と湊が寄り添うように寝ていたらしい。

それはもう唯曰わく『恋人同士みたいだったよ〜!』くらいだったみたいだ。

たぶん俺を陥れようとして、嘘付いてるだけだと思っが…。

たとえ漣のデシカメに、桃色空間を形成するかのような俺と湊の写真を見ようとも、絶対に信じないと決めた。

俺が起きた時にはすでに起きていた(らしい)湊も、いつもの不機嫌面のまま何も言わない。

その後ケースを押し付けられたが…。

「え〜つと…ここか?…たぶんここでいいんだよな?…お邪魔します。」

俺の部屋の3倍はあるのではないか、という部屋にそろそろと入り、荷物を高級そうなベッドにとりあえず置く。

スポーツバック、俺のギター、湊のベース…

今回はオールラウンダーの湊に色々な楽器を試してもらったために、湊だけで一通りの機材を揃えている。

まあ演奏にも幅が出来て良いことだと思っ。

とりあえず少し汗がしみたTシャツを着替える。

この後は前日に漣が渡してくれた計画表通りなら着いたら直ぐに練習のはずだから、その準備もしておかないとな。

アンプはあるって言ってたし…チューナーとかその辺は必要だよな…あと…「遊!海行くぞ!」…海パン?

「遊君！海が私達を待つてるよ！早く行こっ！」

突然思考に介入してきたのは唯と律だった。

「今から練習だろ？それから海に「暑い時に海行かないでいつ行くんだよ！」…だからその後だろ。」

すでに水着姿になっている唯と律には日本語が通用しないらしい。

「早く来いよ〜！先行ってるからな〜」

「あ〜、待ってよ！りっちゃん！」

どたたたたっ…

律は無理やり話を終わらし、唯と共に嬉々と玄関の方へと駆けていく。

とりあえず機材を一通りベッドの上に用意して、階下へと向かう。

「お〜い、猿が2匹逃げたしたぞ〜。って!?!」

「あらっ？遊さんも早くっ！置いて行っちゃいますよ?」

二階の飼育員に状況を伝えていると、飼育員だと思われていたムギが水着姿になっていた。

一言添えるとまた1人、玄関の方へと去っていった。

…

「おい、MMコンビ〜！これはどういうことなんですか〜！俺も遊びに行っちゃって良いんですか〜！」

…

「返事が無いんなら行くからな〜！…じゃあ！海だ〜！」

最初くらいいいいな？

俺は急いで部屋に戻ると、海パンに10秒で着替え、計40秒で支度して玄関先まで駆けていった。

「ほらっ、遊も行くみたいよ。」

私は階下から、うるさいくらい大音量で叫ばれたメッセージの内容を、わざわざ通訳するかのようにもう一度告げた。

「遊も…湊は？」

「まあ行くことになるでしょうね。」

最後の希望、とばかりに私のことを涙目で見てくる溲だが、どうせこの動物園の残念ながら園長になっている猿が無理やり連れ出す事になるだろう。

私はすでに諦めて水着の用意をしていた。

「湊まで……」

ぺたんとベッドに腰を下ろす漣。

先程昔の軽音部の演奏を聞かせていた時の、やる気に満ちていて、また今から始まる合宿に胸打っていた表情はどこへ行ったのやら……。

「はあ……漣。早く準備しなさい。どうせ2人じゃ練習にならないんだから行くしかないでしょ。」

さっさと水着に着替え終えた私は埒があかないと判断し、漣を置いて部屋を出る。

どうせ漣の事だから……

「私も行く〜!」

……って言うと思ったわ。

急いで水着を準備する漣を部屋の外で待ちながら、1つため息を吐いていた。

第14話（後書き）

いや〜移動だけで1話とか：かなり無駄遣いですね。
しかも内容が滅茶苦茶薄い！

ひどいもの見せてすみません！

第15話(前書き)

合宿編 その2…だったよな？

第15話

「青い海っ!」

「白い砂浜っ!」

「全部俺達のもんだっ!」

ひゃっほっ、と海に向かって猛然と走っていく3人。

「日焼け止め塗る?」

「ああ、ありがとう、ムギ。」

「私も借りて良い?」

そして砂浜に刺さったパラソルの中で、しっかりと日焼け対策をする3人がいた。

私はムギに借りた日焼け止めを、袖を捲って両腕、両脚へと順に塗っていく。

日焼けなど全くしない体質なのだが、念には念を入れておく。

「でも凄いな…プライベートビーチなんて本当に存在したんだ…。」

「同感ね。」

ムギ曰わく、ここから見える所は全て琴吹家のビーチらしい。

「おーい、ビーチバレーやろう！」

波打ち際から唯がビーチボールを掲げながら、少し離れた所に設置されていたバレーのネットを指さしている。

「…ですって。行ってくれば？」

「うん！やろ、唯ちゃん！」

ムギはすぐさま立ち上がり、唯と一緒にコートへと走っていく。

「えっ、湊は？」

湊はムギの勢いに釣られたのか、立ち上がるも一歩目を踏み出さず、振り返って私の動向を確認する。

「ちよつと寝不足が祟って疲れてるから、休憩してる。」

別に疲れてなどいないのだが、寝不足は本当なのでここは無理に体力を消耗しないようにする。

「そうか…じゃあ私も…」

「気にしなくていいわよ。みんな楽しんできたら？」

「でも…」

面倒見の良い湊の事だ。

どうせ『1人にさせるのは可哀想だし…、でも遊びたい…』みたい
な考えで天秤をふらつかせているに違いない。

しかもきつとここにいる事を選ぶだろう。

「はあ…じゃあ私ちょっと寝たいから、あそこにあるビーチチェア
持ってきてくれない？」

「えっ…ああ、おやすいご用だ！」

サツサツサツと砂を踏む音が離れていく。

気を使っているなら、少し働かせてからなら簡単に離れていくもの
だ。

16年弱の経験から導き出した事の1つ。

案の定漕はすぐさまビーチチェアを取りに行き、1人ではなかなか
の重さだっただろうに走って持ってきてくれた。

「わざわざありがとう。それじゃあ私は少し横になるから、漕は楽
しんできてね。」

「ああ、ゆっくりしててくれ。」

…ちょっと良心が痛むものだが、まあこれでゆっくり「なんてさせ
ると思っただか〜！」ピチャッ

ビーチチェアに横たわり、目を閉じようとしたところで、急に顔め
がけて水が飛来した。

突如の出来事に私は何も対応できず、無様にも水を正面から顔に受けた。

「…まったく、嘘付いて輪から外れんじゃねえよ。」

「ゆ、遊っ！」

濡れた顔を持ってきていたタオルで拭くと、目の前には腰に手を当てた遊が少し不機嫌顔で立っていた。

「湊は調子が悪いんだ！ゆっくり休ませて…」

必死に私を庇う漣。

「湊の奴、海来るといつつもこうなんだよ。」

「寝不足で疲れてて…えっ？えっ？」

私と遊をキョロキョロ見やる漣。

私は出来るだけ目を合わせないようにそっぽ向く。

「湊は海が大好きでな。一年中海に来るんだ。でも絶対に海には入らない。なんでも波の音が好きなんだと。」

私の嘘がどんどん剥がされていく。

というかすでにメッキは全部剥がされていた。

「それこそ朝から夜まで…身体が冷えないように夏はパーカー、冬はコート着用してパラソルの下に居座る。…違つか、湊？」

遊はジト目で私を見てくる。

毎年のように一緒に海に来てれば流石に分かるか…

「何すんのよ。パーカーが濡れちゃったじゃない。」

「てかそれは俺のパーカーだろ！無くしたと思ってめちやくちや探してたんだぞ！」

「小さくなったな〜って言ってたじゃない。だから私が使ってただけよ。」

「確かに小さくはなったけどさ〜。結構気に入ってたんだよ。…まあいいや、それで嘘を認めるか？」

話を上手くそらせたと思っていたが、遊もそこまでバカでは無かったみたいだ。

自分の中の遊の株を少し上げとく。

「…はいはい、正解よ。名探偵さん。ごめんね、漣。」

パーカーのフードを深く被りつつ自白する。

きつと怒っているだろう漣にも一応謝罪しておく。

「でもこれが私の楽しみ方だから…みんなはそれぞれ楽しんでて。」

「だからさせねーつつつの！ほらっ、漣も行くぞー！」

「きゃっ！」

身体を倒そうとしたところで、重力に逆らったように身体を引っ張られる。

見ると私の腕を掴む遊の手…力任せに引っ張って私を起こしたみたいだ。

「遊っ！いきなり引っ張るなっ！」

どうやらもう片方の手では漣の腕を引っ張っているらしい。

「ちょっと、引っ張らないでっ。ちゃんと付いていくから。」

「はははっ！いいからダッシュダッシュ！」

遊の引っ張る力が増す。

自然と私と漣の足が駆け足になった。

どンドンバレーコートへと近付いていく。

唯達3人が練習なのか、ただビーチボールを打ち上げて楽しんでいるのかは分からないが、その楽しそうな輪の中に私達は加わっていつ…

「うわっ！？」

「きゃっ!」「」

ズサッ

：

私達を引つ張っていた遊が砂に足を取られて前へと倒れ込んだ。

後ろを向きながら走っていたので、尚更バランスが取れていなかったのだらう。

腕を引つ張られてる私達も、引かれるままに砂辺へと身体を倒していった。

「いたたっ…大丈夫か、2人共。」

「う、うん。」

漣は遊の胸の上に乗っかるように倒れたようだ。

跳ねた砂が少し頭や肌が付いているだけで、特に怪我は無さそうだ。

「そっか…湊は…って!？」

一度ホッと一息入れた遊の目がこちらに向く。

別に私も怪我をしたわけでもなく、少し砂が付いただけ。

漣同様遊を下敷きにするように、倒れていた。

ただ違うのは下敷きにした場所。

漣は遊の胸…私は遊の右手…

私の胸を支えるように、遊の右手が私の左胸をパーカー越しに鷺掴みしていた。

「ダァ〜！」

意味も分からない雄叫びを上げるのは遊。

そんな遊の奇声に動じることなく、私は立ち上がる。

自分が立ち上がるのと同じで、いまだ遊の胸の上に倒れている漣に手を貸し立たせた。

「湊っ！これはけしてワザではなくてですね！本当にすみませんでした〜！」

私達が立ち上がるとすぐに土下座の体勢に移り、言い訳兼謝罪を述べる。

そんな事知らん顔で、私は服や身体中に付いた砂を払っていく。

一通り落としたのを確認した後、私はしゃがんだ。

「遊。」

ギュッと右手で砂をつかむ。

「なんでしょ…うわっぷ!？」

それをかけ声で頭を上げた遊に向かって、勢い良く投げつけた。

「…馬鹿っ…」

私は澁の手を引き、律達の所へと向かう。

一部始終見ていたのかは分からないが、3人は苦笑いを浮かべていた。

ビーチボールは所在なさげに少し離れた所に転がっていた。

…決めた。遊に罰ゲームを与えよう。

私は遠くで口の中に入った砂に悪戦苦闘している遊を見やり、頭の中で内容を考えていた。

「つつかれたっ…」

ボタンとソファーに倒れ込む。

しっとりと濡れる髪の毛がウザったいが、タオルを出すのもめんど

くさくて自然乾燥に期待することにしたのが、つい5分前。

海からムギの別荘まで帰ってきたのがだいたい15分前だから…10分位ずっと同じ体勢だ。

と言っても、あまりにも疲れていたから都合良くパラソルの下に置かれていたビーチチェアで、体内時計で20分くらい横になってたので、先に帰った女子群よりも遥かに遅い帰還だった。

もう…寝てもいいよね…？

「練習するって、遊。早く準備しなさいよ。」

声から察するに、湊がトロトロしている俺を呼びに来たようだ。

俺の体力を根こそぎ奪った犯人…兼被害者。

また1対5の変則ビーチバレーの発案者でもあった。

「…俺は一身上の都合により、練習出来なくなっただって伝えといてくれ…。」

『勝つまで許さないから。』と一言ありがたいお言葉を頂いた俺は、計18回1人での試合を強要された。

運動音痴の唯一人を狙い続けなきゃ、更に倍は続いていただろう。

「いいから早く。」

パサッと柔らかい生地が顔に乗った。

投げつけられなかった所をみると、機嫌は少しは良くなったらしい。俺はしょうがなく身体を起こして、頭をガシガシと投げつけられたタオルで拭く。

「へいへい。」

ついでに軽く身体を伸ばし、気だるさを解きほぐしていく。

たつぷり1分程時間をかけた後、ベッドに放り出されたままの機材を両手に持ちケースの中へとしまっただけだった。

「それで…スタジオってどこなんだ？」

「こっち。もうみんな向かってるから」

ギターケースを肩に掛け、先導する湊に付いていく。

やけに重く感じるギターケースにちよつとばかり嫌気がさしているが、一応軽音部の合宿で来たのだからしょうがない。

辿り着いた部屋のゴツいドアを開ける。

そこにはキーボードの前に立つムギ…

ベースを自分の横の壁に立て掛けている遷…

…そして床で転がっている唯と律がいた。

「…これはどついでのこと？」

あつ、湊がちょっとキレてる…せつかく機嫌直ってきてたのに…

ここは俺がなんとかしないとな。

「唯と律が疲れたって…」

「はあ…」

「俺に任せとけ！」却下。「…」

いやいや、少しは信頼というものを持ってくれても良いんじゃないかい？

「ねえ、漣。部活って確か4人いればいいのよね。じゃあ2人いるくても良いわよね。」

おいおい…湊さんや、何言う気ですか？

そんな異分子を排除するかの暴挙、俺が許さん！

「と言うわけで律と遊は退部って事で。」

「すみませんでした〜！律はどうなってもいいんで、命だけは〜！」

「勝手に話進めるなっ！あと私をちゃんと労り崇めろ！」ピシッ

律がガバッと立ち上がり、俺の脳天にチヨップを振り落とした。

「そつだよ、みなちゃん！りっちゃんを退部させちゃダメだよ！」

「俺はいいんか！？つうか今更だがなんで俺っ！？」

唯もいつの間にか湊の近くに寄っていて、握り拳を作りながら説得中。

「じゃあちゃんと練習するわよ。はい、ギターとスティック持って

」

「はい。」

渋々といった感じだが、2人はちゃんといつもの定位置に着く。

「湊ちゃん、なんだか2人のお母さんみたいね。」

「ぶっ…確かに。」

「ねえ、湊姉ちゃん、ムギ姉ちゃん。湊お母さんがイジめるよ〜！」

「その3人も早く。」

「は、はいっ！」「」

陣頭指揮を執る湊。

前は唯とムギのお母さんっぽいと言ったが訂正…

どうやら我が妹は軽音部のお母さんになったみたいだ。

「それじゃあ最初は『翼を下さい』から。」

「はいは〜い！私達それ以外練習してたっけ〜？」

「…してないわね。」

「してないな。」

持ち曲が1曲のバンド…部活してるなんて言っちゃ失礼だろうな。

「それは大丈夫。今回はムギが…」

「実は曲作ってきたの〜。」

ムギは少し顔を朱くしながら、楽譜で顔を隠しつつ新曲を取り出した。

「おおっ！早速見せてくれ！」

「私も〜！」

俺と唯はムギに駆け寄り、1人1枚ずつ刷られた楽譜を譲り受ける。

曲名、歌詞もまだ入っていないそれには、ただ音符とテンポが書いてある言わば未完成品だった。

…

「な、なかなか良い曲だな！」

「が、がっちゃん〜ん！って感じが良いよね！」

「無理すんな。後で湊がちゃんと教えてくれっから。」

「それじゃあ練習するぞ〜！まずは指ならしに『翼を下さい』！」

「はあ…苦労するのは私ばかりね。」

「後でマッサージしてあげる、湊ちゃん。」

すでに聞きなじんでいる、律のスティックをぶつける音が部屋に響く。

唯のギターが、

漣のベースが、

律のドラムが、

ムギのキーボードが、

湊のギターが、

俺のギターと重なっていく。

第15話（後書き）

別に兄妹なんでなんの問題もございません。

この件に関しての苦情は受けますので、どうぞ感想ついでに1罵倒
お願いします。

第16話 (前書き)

合宿編 その3で合ってるかと。

第16話

「ふうっ…大浴場まであるなんて、凄い別荘だな。」

「そうだな。すっげ〜リフレッシュされる〜。」

ちやぼんとお湯の耳心地のよい音がまた気持ちがいい。

「背中流しっこ気持ち良かったね、唯ちゃん。」

「ね〜、ムギちゃん。」

露天という事もあり、湯気を飛ばす爽やかな夜の風がまた心地よい。

「本当にムギに感謝ね。」

「そうだな。」

5人が同時に入っても余裕がありすぎる露天風呂。

高級アンプや防音の整ったスタジオ付き別荘。

更にはプライベートビーチ付き…高校生だけの合宿では絶対に行けない条件だ。

「こんだけ快適なら、遊の奴もきつとりフレッシュ出来るな〜。」

もちろん唯一の男子である遊は1人男湯に入っている。

その時も男女でお風呂が分かれている事に驚いたっけ…。

「でも遊さん凄く疲れてたわ。」

「まあ…あれだけ動けば…な。」

何故かみんながこちらを見てくる。

別に何も喋ってないわよ？

「まあ遊が悪いよな！こうやって胸に…はっ！」

「…いきなり人の胸触らないですよ。」

律の両手が私の胸を掴み、そしてそのまま硬直する。

「どうしたの、りっちゃん？…はっ！？まさか…」

唯も何かに気づいたようで、驚愕の表情を浮かべた。

ムニムニ

「…テキダ…」

「はい？」

「お前等みんな敵だっつ！」

急にお湯を爆発させる律…と言ってもただ両手を水面に打ち付けただけだ。

「わっ!?!」

バシャンと跳ねたお湯が発信源の律だけでなく、私、漣の顔にまでかかる。

「…何?」

せつかくの気持ちのいいお風呂が台無しだ。

少し語気を強くして理由を聞く。

「うるせ〜!お前等には無いものの気持ちなんて分かんないんだよ!」

ああ…そういうことか。

「まあ律ももう少ししたら、勝手に大きくなるんじゃない?」

「その勝者の言葉ヤメロ〜!」

「グサツとくるからヤメテ〜!」

2人して胸を押さえる。

そんなことばかりしてるから、成長も抑えられてるんじゃない?

「だって…ねえ?」

「ああ…勝手に大きくなっちゃったんだし…。」

「2人とも大きいもんね。」

「それを言えるムギも十分あるわ!」

1人避難していたムギにもお湯がかけられる。

「湊だつて湊に負けてんだからな!ざま〜みる!」

「律の胸くらいしか差が無さそうだから、いずれ抜くわ。」

「チクシヨ〜!バカにすんじゃないやい!」

…結構気にしてるのね。

これからはこのネタを切り札にしようかな。

「ねえ、湊ちゃん。湊ちゃんは普段どんなの食べてるの?」

「えっ?別に普通の食事だと思っけど…。強いて言うなら野菜を多めに…」

遺伝だから諦めなさい、とでも言ったらどんな反応してくれるんだろう。

私は少し好奇心が湧いたが、自重して黙っていた。

「じゃあみなちゃんは?」

「ココア。」

「!?!よし、風呂上がったらコンビニまで走るぞ、唯!」

「了解!りっちゃん隊員!」

…信じちゃった…。

あとまた後でお風呂入ることになるから止めときなさい。

「でも良いよな〜。」

「遺伝だから諦めなさい。」

「胸の話じゃない!…ムギは美人だし、お金持ちだし…」

ボソツと胸が大きいし、というセリフも入れる。

「それで勉強出来て、作曲も出来るんだぞ!ズルくないか!??」

「途中の1個は努力でなんとかなるわよ。」

「澪も美人だし、昔作文の賞貰えたくらい文才あるし、頭良いし。」

「あ、ありがとう…。」

「湊だって楽器色んなの弾けるし、頭良いし、料理も上手かったし。」

「私のは全部努力でなんとかなるわね。」

「あとなんか可愛いしな。」

「初めて言われたわよ。」

というか凄く後付けに聞こえる。

「うん！みなちゃんは可愛いよ！」

「唯は黙っててね。」

話の腰をバツキリ折りに来た唯を、とりあえずお湯の中に沈めておく。

もちろんすぐに手を離したので、5秒も経たず水面から顔を出す。

「いやさ、最初は綺麗とか怖いとかしか印象なかったんだけどさ。付き合っていくうちにお互いの事が分かってきたら…なんとなくな。」

「…なんで律が照れてんのよ。」

「恥ずかしいんだろ、律？」

「はあ……」

ニヤニヤと澁が律をからかう。

あと何故かムギが恍惚な表情を浮かべていた。

「ダア〜っ！柄にもないこと言わせんな！」

バシャバシャ！

「あゝ、りつちゃん恥ずかしいんだ〜！」

「もう…こつちが恥ずかしいわよ…。」

なんか顔が朱くなってる気がする。

湯船に浸かっている所為だとしよう。

「そういえば作詞作曲で思い出したけど、文化祭でやる曲は1曲でいいの？」

「確かに少ない気がするな。」

「でもまだ私の曲も完成してないし…。」

今日ムギが持ってきた曲：今日はその微調整だったりでたっぷり時間をかけたものの、いまだ完成に至ってはいない。

「ムギは無理だから…漣、何か作ってくれ〜！」

「私も作曲はな…。それに作詞だってしないと…。」

これはさつき決めたこと。

作曲ばかりに目がいった他のメンバーに作詞について聞いたところ、全く考えていなかったらしく、結局漣に収まった。

「はいは〜い！じゃあ私が作曲するよ〜！」

「じゃあ来年の文化祭はよろしくね。期待してるわ。」

「うん！」

「…さらっと今年は間に合わないって言ってるな…。」

「しかも唯の奴気付いてないぞ…。」

だつて唯よ？

「じゃあ湊ちゃんは？」

ムギが残りは…と確認してから私に振ってくる。

どうやら律よりは適任みたいだ。

「部長に任せるわ。」

「じゃあ湊が作れ！」

部長命令だ〜！と肩書きだけの部長が命令してくる。

「部長にお手本を見せてもらいたいのよ。」

「私がチェックしてやるから、とりあえず作ってみてよ〜！もう他バンドもやってないんだろ〜？」

「それは…そうだけど…」

マズい、少し押された…。

「はい、じゃあ湊が〜「じゃあバンドやってなかった律は、そういう経験ばかりしてきたんでしょ?」「…ムッ、往生際が悪いな〜。」

それは律にだけは言われたくない。

私は作曲なんてやったこともないのに、安請け合いしたくないだけだから。

仕方ないけど、今回は1曲でいいんじゃないかしら。

「まあ、湊には少し難しいかもな〜。」

…そういう手できたか…。

「やっぱムギにしか出来ないこと湊に頼むわけにはいかないよな〜。」

「

そんな小学生レベルの挑発に乗るわけ無いでしょ。

「それだから遊もムギのこと大好きなんだろうな〜。」

「やってやるうじやない。そこまで言われてやらなかったら女が廢るわ。」

…あえて挑発に乗った…

… 本当にあえて…

空には満天の星空が広がっている。

手を伸ばせば届きそうな程、普段暮らしている所より一つ一つの星が大きく光り輝いて見える。

特にあの真ん丸い月はクレーターも見えるのではないか、というほどいつもより綺麗に輝いている。

視線を下げるとそこには真っ暗な海。

自分が居座る岩礁にザサーンと波打つ音が聞こえる。

耳には海風による切り裂くような風の音が聞こえ、

またその風によって辺りの木々の葉の擦れる音が追隨して流れた。

首を少し横に向ける。

そこには昼に死闘？私闘？が繰り広げられたバレーのネットが今尚設置されている。

夜中11時にもなれば流石に誰一人として利用する人がいない…と
いつかプライベートビーチなのだから、使うとしても軽音部の面子
だけなのだが…。

昼間にはビーチボールを弾く音、砂に飛び込んだ音、ネットに掛か
った音：色々な音が生まれていたのだが、今は精々ネットがはため
いて軋む音がするだけだ。

そこにザツザツザツと砂の上を歩く音が聞こえてきた。

「まだ寝ないの？」

「湊か…ちょっとのぼせたから身体冷やしてるだけだ。すぐに寝る。」

なんだかひどくぶっきらぼうに湊に返事してしまった。

しかしそんなこと気にせず、湊は岩を登ってきて俺の隣に腰を下ろす。

「湊もやっぱり寝れないのか？」

風呂上がってから女子群とはすぐに別行動を採っていたから、状況は全く把握していない。

「違う。ちょっと厄介なこと頼まれちゃって…それ考えてる最中。」

「ああ…作曲か。」

確かに難しい事だけど、完璧超人の湊なら多分問題ない…ん？

「どうしたんだよ。そんな汚らわしいものを見るような目して？」

「なんで女湯で話してた内容知ってるのよ？」

…

し、しまったっっ！！

「い、いや、風に乗って聞こえてきただけだからな！けして覗いたりしてないからな！」

「…変態。」

「だから違っつてのー！」

全く信じてもらえてない…。

「つーかガード堅すぎて覗ける場所なんか無かったし！」

「やっぱり覗こうとはしたのね…。」

「はっ！？」

し、しまったっっ！！

「…まあ覗いてはないみたいだからいいわ。」

「あ、当たり前ですよ！紳士白木遊、レディーの嫌がることは一切致しませんっ！」

「何言われても、私の中の遊の評価はストップ安だから。」

「今買つとけば後々ボロ儲け出来ますよ。」

「それならまだ唯に投資するわ。」

…俺ってそんなお先真っ暗な企業なんですか？

「それで覗きに夢中になつてのぼせた遊は何してたの？何も考ええなかった訳じゃないでしょ？」

「…言いたいこともあるが、ここは大人な俺が我慢しよう。」

何事も冷静さが大事だ…風呂場で隣から聞こえてくる声で、なんとなく湯船から上がれなくなった時の事を思い出せ！

5分で戻しただろっ！

「ちよつと今日の余韻に浸ってただけだつて。ここでみんなでビーチバレーしたんだな、とか夕日を1人ビーチチェアに寝そべって眺めたな、つてな。」

だから色んな音に耳を澄ましていた。

昼と夜とでの違いも含めて俺は音を楽しんでいた。

「…変態。」

「何故に!？」

今の会話に地雷か何かが含まれていたのか!?

「…すっげえ楽しかったからな。」

「今日の事が？」

「ああ。軽音部のメンバーの色んな面が見れた、って感じでさ。唯は予想通り運動音痴で、漣は料理上手だし、反対に律は言うほど料理上手なくて湊に教わってたり、ムギはスポーツ意外に出来たり…な。」

目を閉じれば浮かんでくる程、鮮明な記憶として残っている。

唯の顔面にボールが直撃したこと

湊、漣が鮮やかな手付きで野菜や肉を切る中、少しモタモタしながら切る律がいたこと

とても2ヶ月前に寝不足で倒れたお嬢様とは思えないくらいの強烈なスパイクをムギがしたこと

どれもがまだ色鮮やかに輝いていた。

「こんな生活がもっと続けばいいな、ってすげー思った。だから男の俺が合宿に参加できるように話を進めてくれた湊にもめっちゃくち

や感謝してる。ありがとな。」

俺は右隣に座る湊の頭にポンポンと右手を乗せる。

普段だったら絶対こっぱずかしくて言えないことが言えるのは、今日が特別な日だからかな…。

ちゃんとドライヤーをかけただろう湊の髪は、さらさらとしていてなんだか凄く触り心地がいい。

こんな些細なことに俺はまた少し心が癒される。

「…ずっと…らな…り得な…よ。」

「ん?」

そんな幸せな気分の俺とは対照的に…

「ずっと変わらないなんてあり得ないわよ。」

湊は冷たく、厳しい声を発した。

「ムギはその倒れた、って日から毎朝ジョギングしたり、筋トレ始めたりしたらしい。お風呂で言ってた。」

俯いたまま…

「律も『今年中に絶対料理覚えてやる!』って言ってた。まあこれはどうなるか分からないけど。」

頭に乗る俺の右手を気にすることもなく…

「澪は遊のお陰で、少しは男性に免疫が出来た。もはや夫婦漫才の域よね。」

こちらに表情を見せようとはせず…

「唯は…まあ初めて部活始めた…とかかな。」

どこか投げ捨てるかのような声で話し続けた。

「それは…良いことなのでは？」

聞いた限りみんなが前に進んでいる。

一歩一歩自分をブラッシュアップしている。

「今のは良いところだけを摘んだから。」

「美味しい所取りって俺の得意分野なんだけどな。」

湊相手にそんなこと出来っこないけどな。

「遊と私だって…サポートメンバー辞めて、新しくバンド組み始めた。」

「…」

「私達みんな変わってる…。それなのにこの関係がずっと変わらな

いなんてあり得ないでしょ？…きつといつか終わっちゃう。」

「…」

「でもそれは仕方がない事だし…それに私は変わらない物なんて無いって信じていたいから。」

すつと顔を上げて、遠く海の向こうを眺める湊。

そこには覚悟の眼差し…

湊はおよそ2年後に訪れるメンバーとの別れに備えてるのかもしれない。

こんな表情をされちゃ、いくら否定した所でそれはただの気持ちの押し付けになっちゃう。

「んなことないと俺は思うけどな。」

けど俺は自分の考えを正面からぶつけ返した。

「だって俺と湊の関係はずっと変わらない。どんなに遠く離れたって…家族って強い結び目があるからな。」

湊はこちらを真剣な表情で…けどどこか寂しげに見る。

もしかしたら俺と離れ離れになることを考えて、少し感傷的になってくれたのかもな。

そうならちょっと兄として嬉しいものがある。

「だったら俺達軽音部の中でも強く強く…けしてほどけない仲間っていう結び目を作っちまえばいいと思わないか？」

そんな様子に気付いていながらもそのまま話を続ける。

湊の返事が無くても気にせず、独り言のように話し続ける。

「確かに昔は湊と同じくらいだった身長も、今やこんだけ離れちまつたし、湊だつてガキっぽかったのに今じゃすっかり女の子になつてる。それは今日再認識した。」

「…変態。何いきなり言つてんのよ…。」

「まあまあ、どうせ俺の評価はストップ安なんだから、気にしないでどんどん言つてごう、ってな。」

今なら何言つてもいい、って湊が暗に言ってくれたんだと信じて話す。

…まあ絶対違うんだろっけどね。

「…昔はマツさんとも良く話してたのに、今じゃ顔も合わせない。それはまあ小学、中学の頃のダチにも当てはまるけどな。」

「…私もそう、ね。」

「でも会えば絶対話するし、めちゃくちや盛り上がると思う。昔話つて面白いもんだしな。…そうやって一度作った結び目は緩むことはあっても無くななんないから…だからやたらめつたら結んどけばい

「いんだよ。」

…

「結局変わらない、って事に対しての話じゃ無くなってるけど…。」

「…ああ！ゴールはそっちだったな！間違えちったな、ははっ！」

なんか最近思ってた事をつらつら喋っただけになっちまった。

その分俺の心は癒されたからオールオツケーだな。

「…じゃあ私も頑張って作曲する。」

「へっ？」

「私が作った曲がみんなとの結び目になってくれるように…真剣に作ってみる。」

「…そっか。」

海からの塩っぽい風が俺達の間を流れた。

「それじゃあそろそろ戻ろっぜ。湯冷めして風邪引いたなんてバカ
のする事だな。」

「でも遊ば馬鹿だから風邪引かないんじゃない？風邪引いたの見た
こと無いし。」

「それは俺の身体が最強だからだよ。まあもやしっこの湊には分か

らないかな？」

「…胸は結構あるわよ。また触ってみる？」

「…すみませんでした…私が悪かったんでほじくり返さないで下さい…。」

俺達以外誰もいない砂浜に…

砂浜を歩く2つの音と…

1つに繋がる影が作り上げられていた。

第16話 (後書き)

こんな事書いてますが、りっちゃんが一番好きです！

第17話 (前書き)

合宿編ラストです

第17話

日の出と共に目が覚めてしまった…

二度寝してしまっても良いのだが、折角合宿に来ているのだから早朝練習をするのも悪くないだろう。

そつと起き上がり、着替えとタオルを持って露天風呂へと向かう。

まだ寝ぼけ眼な目をしゃっきりと開かせるには朝風呂が一番だろう。

少し寄り道してからでも悪くはないだろう。

タオルで乱暴に拭いた後、ドライヤーで髪を整えつつしっかりと乾かす。

起きてから30分程してようやく辿り着いた、防音完備のスタジオに入る。

昨日からずっと置きっぱなしにしていたベースを取り出し、アンプには繋げず昨日初めて披露されたばかりのムギの曲を演奏していく。

やはりアンプに繋がないとすると、どこか儂げな音にしかならない。

そんな音を1人寂しく弾いていると、いつの間にか時刻は6時30分になっていた。

楽器をケースにしまい、部屋へと持って行く。

部屋に置かれたスタンドに楽器を置き、向かうはキッチン。

早く起きたのだから朝ご飯でも作っておくか…と考えたためだ。

冷蔵庫の中を探る…卵やベーコン、レタスと言った朝食に合う食材が揃っている。

頭の中で人数分を計算しつつ、手際良く材料をまな板の上に置いていく。

これだけあれば、十分な朝食が出来るだろう。

早速料理を開始しよう。

トントントン

ジャツジャツ

ジュージュー

「朝からご苦労様。」

「おっ、起きたか湊。もうすぐ出来るから待ってるよ。」

すでにフライパンには完成間近で金色に輝く料理が…

「…じゃあみんな起こしてくるから、パン焼いといてね。」

「ん？へいよ。」

「おはよう、遊。」

「おはようございます、遊さん。」

「おはようさん、漣、ムギ。とりあえず座って待っていてくれ。すぐに持ってくるから。」

「おう、悪い悪い、遊。朝飯作ってくれたんだって？なかなかいい心掛けだね。」

「いえいえ、これも日頃お世話になっている田井中様への恩返しですので、お気になさらず。どうぞお座りになってお待ちください。」
うむうむ、と満足そうに頷きながら席へと座る律が漣に威張るな！と叩かれるまであと5秒、といったところだ。

律も漣もムギも昨夜はぐっすり寝れたみたいで、全く疲れの色を見せない普段通りの3人がそこにはいた。

あと1人は…

「ううう…おはよ…」

「シャキッと歩きなさい。」

髪の毛を爆発させ両腕を垂らしながらのそのそと椅子へとたどり着いていた。

横には寄り添うように、軽音部のお母さんが付いている。

「遊、パン焼けた？」

お母さんこと湊は唯をキッチリ座らせた後、手伝いはいらなと言ったにも関わらずキッチンに入ってきた。

「ああ。…でも、いるか？」

「さあね。」

カチャカチャと俺の横で焼きたてのトーストとジャムやマーガリン、ついでにサラダまで用意する湊。

「なんか凄く良い匂いするな。」

「確かに。これは期待して良いんじゃないか？」

律、湊がダイニングから嬉しいことを言ってくれる。

これはちよつとサービスしとくか…

「ほい、出来たぞ。」

皿にスプーンも一緒に乗せ、料理を1人1人の前に置いていく。

期待してる表情がとても嬉しいことだ。

俺が皿を置いていく度に、みんなが吸い寄せられるように目の前に置かれた料理に注目し、

「…何これ？」

「…炒飯？」

「おう！俺特製BLT炒飯だ！」

そして1人1人目を点にしていった。

「ま、遠慮は要らないから。思う存分食ってくれ。」

「朝からこんなもん食えるか〜！」

バシッ！

「イタッ！…何すんだよ〜。このBLT炒飯に何の不満があるんだし？」

この金色に輝いている米をちゃんと見ろって。

「朝から炒飯なんて重いもの食わす遊の頭に文句があるわ〜っ！」

「…BLT炒飯って重いのか？」

確かに6人分作ったから、フライパン振るのは大変だったけど…。

「見ろっ！漣とムギを！引きつつても言えないだろうが〜！」

正面に座る漣とムギは確かに苦笑いしている。

炒飯嫌いだったのかな…。

「でも唯は普通に食ってんじゃん。」

ほれっ、と律の横に座る唯の方を指差す。

こちらを向いていた律も振り返り、唯が満足そうに食べているのを確認した。

「りっちゃん、これすっごく美味しい！早く食べないと冷めちゃうよ！」

すでに半分は食べ尽くした唯が満点の笑顔を見せながら、一口、また一口と炒飯を口の中へと運んでいく。

料理した人にとってこれ以上の賛辞はないだろう。

「なっ…本当かよ…。」

「いいから一口食ってみろって。百点満点の俺の評価が限界突破するくらいの自信はあるから。」

いや〜、モテる男はつらいね〜！

「…あ〜っ！分かったよ！食べばいいんだろ！食べば！」

勢い良くスプーンを掴むと、皿を持ち上げ一気にBLT炒飯を口の中へと流し込んだ。

黙々と咀嚼する律の反応を、俺は少しの不安も無く待つ

「…美味しい…」

律はボソツと…なんだか悔しそうに感想を吐き捨てた。

「よっしゃっ！見たか！」

「なんだよこれっ！？めちゃくちや美味しいじゃねーかよー！」

そこからは律も唯に負けじと、かつこむように炒飯を平らげていく。

「俺の完全勝利！ 参ったか！…って溲？ムギ？」

ふと正面に目を向けると、いまだBLT炒飯に手をつけないお嬢さんお二方がいる。

「私は…ちょっと…」

「うん…私も…」

「なんでだよー！絶対美味いって！一口とりあえず食べてみてくれよー！」

「でも…朝か…んな脂っこ…食べた…い重が…」

「えっ？何？」

溲がなんかボソボソ喋っているのだが、ボリュームを極端に下げたため所々しか聞きとれない。

聞こえないならもう一度聞くしかない、とパードン?と返す。

「2人とも朝はパン党なんだって。はい、これ。」

ようやくキッチンから帰ってきた湊が代わりに質問に答えつつ、湊とムギの前に先程まで準備していたトーストセットを置いていく。

「ごめんね。色々作ってたら遅くなったわ。」

いや…先程見た時より更にグレードアップしていた。

トースト、サラダは先程までもあったが、今ではベーコンエッグ、紅茶まで付いている。

「あ…ありがとうございます！」

「みなちゃん！本当にありがとうございます！」

「…分かったから早く食べなさいって。」

…なんか湊とムギ、心から喜んでないか？

それはそれで凄く悲しいものがあるんだけどな。

「あれ〜！湊ってパン党だったっけな〜？」

「さ、最近パンばかりなんだよ！じゃあ頂きます！」

律の無駄にでかい声に更にでかい声で返した湊は、カリカリに焼かれたトーストにジャムを少量乗せていく。

ムギは何も付けないでトーストを食べていた。

「はあ…じゃあ私も、頂きます。」

「えっ！？湊も炒飯食べるのか!？」

「BLT炒飯な。」

すかさず言い直す。

「私は慣れてるから。」

一口一口をゆっくり、小さな口で少しずつ頬張っていく湊に、
ムギは啞然としている。

なんかおかしいなことがあったか？

「なあ、遊？」

「ん？」

「この炒飯なんだけどさ。」

「このBLT炒飯がどうかしたか？」

すかさず言い直す。

「…どこにトマトが入ってるんだ？」

「…はっ？」

律は俺の黄金BLT炒飯を持ち上げて、じつくりと眺めている。

「全く赤くないし…」

「トマト入れてないからな。」

俺トマト嫌いだし。

「じゃあなんてBLTなんだよ！」

「ベーコン、レタス、卵でBLTだよ。」

「卵はEだろ…」

トーストをカリッと食べながら、漣が頭を抱えている。

「まあまあそんなん気にするほどの事でもないし。じゃあ漣とムギの分は俺が食うからな。」

そっいつて計3人分のBLT炒飯をほんの15分程で平らげた。

食い終わるまで、漣とムギには信じらんない！みたいな目つきで見られていた。

…男子なら普通じゃないかな。

「よし、それじゃあこの辺で切り上げるか。」

朝食を綺麗に平らげた私達は、食休みを少し取ってから練習へと入った。

みんな意外と集中して演奏出来ていたので、なかなかの練習効率だったのではないかと思う。

「やっと終わった〜…」

「疲れたよ〜…暑いよ〜…」

…溼の掛け声を聞くなりいなや床に倒れ込む2人の姿を見て、少しさっきの自分の考えに訂正を入れたくなる。

「お昼食べたらずぐ練習して…4時にここを出ればいいな。」

「え〜！午後は遊ぼうぜ〜！」

「だから合宿だって何度も言ってるだろ！」

何度も行われた優等生VS非優等生。

練習前に毎回行われる、もはや儀式みたいなものになっていた。

まあ折角立てた予定がそこで狂うのは、ちょっと頂けないと思う。

「澪ちゃん！私も遊びたい！」

「私も〜！」

おっと…今回はムギまでそちらに付いたのか。

これじゃあ今朝みたいに多数決では勝てないみたい。

「ムギまで…湊はどうなんだ？」

「私は練習がいいわ。結局そこまで練習した、って感じじゃないから。」

私は常に澪側に付いていたので、澪も当然確定票として考えているだろう。

そして今回もそちらに付く。

ヒートアップしていく口論。

それを止めるのも大抵最後に投票する遊だ。

「はいはい。それじゃあ今から4時までは自由時間にしようぜ。遊びたきゃ遊べばいいし、練習したきゃ練習すればいいじゃん。」

そして毎回票の行方が分からない遊が、今回は代替案を出す。

そしてなんだかんだいつて最後は遊が出した案に決まる、といった形に結果的になっている。

自由時間になった途端に3人が急いで水着に着替え海へと向かい、それを1人が追いかけた。

私は今回は海へは行かず、スタジオへと1人向かう。

部屋に置いてあるギターを持ち、スタジオに入るとそこにはもちろん誰も存在せず、無音の空間が広がっていた。

早速私はギターを取り出し、想うがままに奏で始める。

今回は練習を目的とした演奏ではない。

昨晚部長に押し付けられた課題を片付けてしまおう、と考えての行動だ。

とはいえ作曲などしたことのない私は、始めにどうアプローチしていくかすら見当も付かない。

そのためただかき鳴らし、耳に残ったメロディーだけをピックアップしてプしていくことにした。

…これならムギにコツを聞いておけばよかったかな。

それからというものの、私は本当に頭に浮かんだ通りの音階にそって演奏した。

…

……

…

「それっぽくはなつたかな？」

小一時間程弾いては書き、弾いては書きを繰り返しようやくおおまかな形が出来てきた気がする。

けど…

「本当に音を並べただけ、って感じよね…。」

正直曲に魅力を感じない。

もっと聞いていたい、という感情が湧かない。

どうしたらいいんだろう…

「おゝす。今帰った〜…って湊だけか。」

「遊？今までどこ行ってたのよ。」

自由時間発案者の遊は可決されるやいなや姿を眩ましていた。

てつきり海に行ったのでは、と一旦見に行ってみたものの、4人の影しか見えなかったためすぐに別荘へと戻ったのだ。

「いやさ、せつかくだから土産でも買って帰りたいな〜、って思っ

たからちよつと近くのデパート行ってきたんだよ。ほらっ！美味そうなプリン買ってきたんだぜ！」

ぷらぷらと白の袋をぶら下げながら、私に戦利品をアピールする。

プリンだけでなく、色々な物を買ってきたみたいで、両手一杯になるほど袋が重なっていた。

「他の4人は遊びに行つたん？」

「そうね。なんだかんだ言っても澁も遊びたかつたんでしょ。」

今回はやけに早く水着に着替えていたしね。

「それで湊は？自主練？」

「私はちよつと曲を考えてるだけ。ほんのお遊び感覚に近い。」

正直出来に納得してないから。

「へえ、早速やってんだな。流石俺の妹！兄同様優秀だな！」

「…本当そうね。」

駄作しか作れない駄目っぷりとかね。

「なあなあ、せっかくだからそれ聞かせてくれよ。」

遊は私の正面に置かれた音符が連なる楽譜を指差す。

…まあ話の流れとして絶対そういつことになるとは思ったので、別段驚くことはない。

「まだ未完成だけど…」

「出来てる所までで良いからさ。つーかこんな短時間で完成してたら、逆に心配するし。」

…何の逆が心配になるのか…。

相変わらずよくわからない事を言う遊に、しょうがないので作りかけのオリジナル曲を聞かせよう。

…

「…何か言つてよ。」

とりあえず出来ている所までギターソロで演奏した。

しかし遊は弾き終えたのに何も言ってくれない。

「どうせまだ試作なんだから、どんな評価でも受けるわよ。」

「ん〜…さっぱりわかんねえ！」

…

ようやく喋った遊が話したのは…全く参考にならない一言だった。

「…ありがとう、助かったわ。じゃあね。」

「めちゃくちゃ感情籠もった礼してくれてどうも。…じゃなくてこれって湊がとりあえず頭に浮かんだ通りに弾きまくって出来た曲なんだろう？」

「そうだけど…」

「だったら湊の機嫌、気分が曲に組み込まれてるんじゃないかな、って思ってた聞いてただけど、いまいちハッキリしなかったんだよな。」

「気分？」

「だってイライラしてる時に楽しい曲考えるか？ハッピーな時に不幸な曲考えるか？」

「…まあ一理ありそうね。」

不覚にも遊の理論に納得してしまう。

「でも湊の作った曲ってどんな事を考えて作ったのかわかんねえから、わかんねえって感想が出たんだよ。…よしっ、俺悪くないな！」

…確かに私は気の向くままに弾いていた。

でもこの小一時間ずっと同じ考え方で、同じ気分で作曲していかなかった気がする。

そうなっていたから自然と曲自体が不安定なものになっていったの

かもしれない。

「だからさ、なんか一つのテーマに絞って曲作ればいいんじゃない？例えばお兄ちゃんとか、カッコいい年上の兄弟、とかさ。」

遊にしては凄くまともな事を言っている。

もちろん最後のは除いて…だが。

「…じゃあちよつと考えてみる。」

「おっ、今日は素直だな。ようやくお兄ちゃんの偉大さが「ヘタレの事思ってもヘタレた曲しか出来ないわよ。」…まあそれでこそ湊だよな。」

当たり前でしょ。

そんなに遊に弱みばかり見せるわけにはいかない。

「じゃあ俺は寝るから頑張れよ。」

ヒラヒラと手を振って就寝宣言をする湊を、一瞥して見送る。

時刻はまだ2時…4時にここを出ればいいなら、あと1時間半は充てられるだろう。

私はギターを一度スタンドに掛けて、自分の気持ちを整理していく。

「…よしっ。」

私は一つのテーマを頭に思い浮かべると、すぐさまギターをセツトして奏で始める。

さっきまでの楽譜は全て捨て去り、頭に浮かんだメロディーをひたすら弾いていった。

第17話（後書き）

漸く合宿終わった…

無駄なこと書きすぎた結果がこれだよ！！

今月バイトが木曜日と日曜日になったんで、今月はその辺りで新作
up出来ると思います。

感想宜しく願いますm() () m

第18話 (前書き)

オリジナル話です

第18話

「はっ、はっ、はっ…」

時計をチラリと見る。

後3分…ちょっとギリギリだな…

俺はギアをトップに上げることにした。

距離にしてあと200メートル程だが、夏休み最終日ということもあるからか、昼時の街並みには人が溢れんばかりいて、俺の進路を妨害していく。

「はっ、はっ、はっ…」

ようやくゴールが見えた…俺はトップに上げたギアを4速、3速と下げていく。

既に待ち人は来ているのは見えていなくても分かる。

だってそういう奴だから。

「おっ…、ごめ〜ん。待った〜?」

残り1分…俺はようやく待ち合わせ場所に到着する。

待ち人はやっぱり既に来ていて、不機嫌そうにベンチで1人座っていた。

「5分の遅刻ね。いつもいつもなんでそんなギリギリまで粘るのよ。」

「今は白木遊子だからセーフだな。正確には4分38秒の遅刻だし。」

『女の子はむしろ遅れてくる』…親父も良いこと言ってくれる。

「私もお父さんの教えを聞いているから、20分前には着いているの知ってるでしょ？」

「湊君そんな早く来てたんだ。ごめんね、そんなに待たせちゃって。」

くねくねと身体をよじりながら、少し声高に湊を誉める。

めちゃくちゃ不機嫌顔したのですぐさま止めたが…。

「それじゃあとりあえず飯食つか。遅れたお詫びに奢るぞ。さあ、湊ちゃんは何が食べたいんでちゅか？」

「どうせ遅れなくなつて奢るんでしょ。遊の好きなものでいいから…でも炒飯以外ね。」

『女の子と出掛けたら、男が奢らなきゃならない』…親父も面倒な事言ってくれる。

「じゃあ金欠だからサイゼ行くか。なに頼んでもいいからな。」

「…頼みにくい言い方するわね。」

俺達は2人並んでイタリアンレストラン…もちろん大衆用のに向かう。

今日8月31日…俺達の住む地方では夏休み最終日なのだが、俺と湊にとってはもう1つ違う意味を持つ特別な日だ。

ちょうど16年前、俺と湊が母さんから出てきた日…簡単に言うと誕生日なのだ。

「うわっ、結構混んでるし…」

「まあ夏休みだし、お昼時だしね。でも…ほら、あそこ空いてるみたい。」

「お、一席だけ！これは俺達ツいてるかもな！もしかして今日の会計は女の子しか払っちゃいけない日！とかかもしんないな！」

「その時は自称女の子です、って遊が言えればいいだけじゃない。女の子のルール守るくらいなんだから。」

「いやいや、湊さんや。男にはどうしても女の子にならなきゃいけない時があるんですよ。」

「遊以外に見たこと無いけど…」

そりゃそうだ。

そんなにオカマばっかりの世界なら、俺は絶望してすでに自害して

るから。

「それじゃあ俺はカルボナーラとピザ。湊は？好きなものでいいからな。」

念押しで俺の財布の中身を説明する。

「じゃあドリアで。」

湊はそれを読み取ってくれたかのように、税込み300円のドリアを頼んでくれた。

それくらいならギリ大丈夫だ！

「んじゃさ、この後どこ行こっか？湊は何か欲しいもんあるか？」

「特に。遊は？」

本当に困る答えを返してくれる。

まるで晩御飯で『食べたいものある？』って聞かれて『何でも良い』って答えられた気分になる。

「ん…俺も全く…ないかな？」

こうなるとどうしようものもない。

まあこれも毎年の事なんでそろそろ…

「じゃあ食べ終わったなら適当に歩いてみましようか。」
って言うと思ったわ。

でもこうなると途方もなく歩くから、昔より出歩く時間長くなるんだよね。

俺達は運ばれた料理を話半分に消化していき、結局俺が野口さんを一枚出し、会計を済ませ店を出た。

外に出ればまた溶けてしまいそんな日光にやる気やら何やらを奪われるが、だからといって今日はグダグダしている訳にはいかないだろう。

そんな事したら白木家の裏番こと湊さんに、肉体的にも精神的にもぼこられる事間違いない。

「あち〜…とりあえずここ入んねえ？」

「雑貨屋…まあいいけど。」

と言っても暑いものは暑い。

俺はテキトーに冷房が効いてそうな店を指差す。

今回は運が良く雑貨屋で、湊からのオツケーも頂けた。

前にパチンコ屋を指差した時はめちゃくちゃ不機嫌な顔しながら入ろうとしてたよな。

もちろん当時中学生の俺達は店員に止められたが…。

「へっ、こんなとこ出来たんだ。」

本能の赴くままに選んだ店は偶然かクーラーがガンガンに点いていて、不快指数を急速に下げていく。

ついでにアンティーク感漂うお店の雰囲気もなかなかいい感じである。

「今年4月にオープンしたばかりみたいね。お店も綺麗だし…意外と良いもの置いてあるかも…。」

「でも…激高だぞ?」

手元にあった猫の形をあしらった置き時計の値札に、正直すぐさま暑くて死にそうな外へと戻りたくなった。

「でもほら。こういう小物なら…」

湊は棚に並ぶ小さな木彫り猫をこちらに見せてくる。

確かにそれならドリア二人前くらいでお釣りがくる値段で、俺でも買うことが出来る。

「んっ…じゃあ少し探してみるか。」

木彫りの猫が置いてある棚を中心に店内をくまなく回っていく。

デザインを見ては値札を見て元に戻し、また1つ1つ見て回る。

財布の中身と相談してなので、良いものを見つけるのは困難を極める。

30分程経った所で俺からの提案で店を後にすることにした。

湊はもう少し見ていたそうだったが、色々回ろう、と言ったのは湊だ。

無理やり引っ張ってでも店を出ていく。

「次は…定番の服でいいんじゃないねえ？」

「別にいいけど…お金あるの？」

「女の子って見るだけで満足！なんて言うらしいぞ。」

「じゃあ私は男なんでしょうね。」

「いやいやそんな事ないですよ。」

立派な物お持ちじゃないですか！…なんて絶対言わない。

こうして俺と湊が2人で出掛けるのは珍しくない。

サポートメンバーをしていた頃など、しょっちゅう色々買い出しに行かされてたし。

でも毎年同じ日、同じ時間に同じ場所で待ち合わせしているのが8月31日だ。

俺達2人の誕生日：その日にお互いの誕生日を祝うために、お互いの誕生日プレゼントを買うことを決めている。

別に一緒に買いに行くこともないと思うが、その方がお互い欲しいものを貰えるし、何より面倒でないので俺としては願ったりかなったりだ。

「それじゃあ2時間ほどカラオケして、それから「却下。」…じゃあ今から30分で決めてカラオケに「私優柔不断だからあと3時間はかかるわね。」…じゃあ2時間後にまた…いや、すみません。」

そんな睨むなよ、ちょっと昨日の疲れを吹っ飛ばしたかっただけなんだからさ。

「ほらっ、早く行くわよ。」

「うわっ！？いきなり腕引っ張るな！」

「もたもたしてる遊が悪い。」

「3時間掛かる宣言してる湊に言われたくないからっ！」

ずんずんと進む湊、に無理やり連れて行かれている俺。

そんな尻敷かれカップルみたいな俺達が入った店は、複数の店が各階に散らばるように入っているデパートだった。

毎年何を買つか困った時に来る場所だ。

だって何でも揃ってるし、湊がポイントカード持ってるからな。

ひとまず俺達は装飾品が揃う店を回る。

『もう服で良くね?』という投げやりな発言が気に入らなかったのか、服売り場から3階も離れたここに連れられた。

…でもここも高くて毎年手が出せない所だったじゃんか、と文句の一つもとりあえずは言っておかないとな。

そんな発言を全く気にせず…いや耳に入れず商品を真剣に悩む湊がいたので、しょうがなく辺りをぼんやりと見ていく。

…

…やっぱり高い…

先月だかにここで買ったこれも高かったもんな。

今も首にぶら下がるように着けられているシルバーのネックレス。

ある人から貰ったこれもここで買われたものだ。

『…待ってるから。』

ぶんぶん!

ふと浮かんだ先月の記憶を振り払うかのように、頭を左右に振った。

「どっしたの、遊?」

「ああ…頭振つたら音がなるかな、って確認してただけだよ。」

「さぞかし軽快な音が聞こえたでしょうね。」

「そりゃもうハーブみたいな荘厳な音が聞こえたぞ！」

「…いずれ聞かせてね。」

スタスタスタ…

「ふうっ…」

今は考える事じゃない。

どうなるかも分からないんだから。

俺は雑念を振り払って商品を眺めていく。

無心に…無心に…

…

…

あっ…これいいな…

高っ!?!?

「遊？決まった？」

「おう！これなんかどうだ？」

「いまだ装飾品並ぶ店内ですと一つの商品の前で悩む湊を見つけた俺は、手のひらに乗る大きさの袋を湊に差し出す。

「もう買ったちゃってるじゃない。相変わらず私の意見は無視なのね。」

「どうせいつつもなんだかんだ一番目にしたのにしてるじゃん。」
「今回もたぶんそうなるだろう。」

「中学の時、嫌がらせのつもりで買おうとした妙にリアルな髑髏のプリントが入ったパジャマを何事もなく受け取っていたからな。」

「ガサガサと袋の中に手を入れ、中身を取り出した。」

「…猫？」

「そつ。ゼンマイが付いてるから猫型ロボットだな。」

手の上に出された商品は背中に銀のゼンマイが付いた黒猫の置物・
装飾品店の隣にあった、さつき涼みに入ったお店のチェーン店があ
ったのでそこで購入した。

…もちろん青ダヌキには微塵も似てないから安心だ。

「まあとりあえず回してみなつて！」

「はいはい…」ギチチ…ギチチ…

）　、　）　）　…

放送で流れるメロディーとは別のメロディーが、今は首を縦に揺ら
す猫型ロボットから流れ始める。

「オルゴール…？」

その音はどこか儂げな色をしていて、ピンと1つ1つの音を弾いて
いた。

「猫が欲しくて、今作曲中の湊にぴつたりだったからな。」

やたら1件目で猫が並ぶ棚を見ていたからな。

作曲の方は全く関係ないが、なんでも付属させときゃ豪華に見える
だろう、とB級出版社みたいな事を考えて付け足しただけだ。

「…」

ゆっくりとゼンマイが回り、猫が頷きを繰り返し、音が紡がれていく。

1分程過ぎ、同じメロディーを繰り返し演奏した1匹の猫の頷きが止まる。

今流れるのはデパートの放送だけだ。

「なんかしつとり？した感じが良くねえ？」

「…遊にしてはまあまあなもの選ぶじゃない。」

演奏者をそつと鞆の中にしまいながら、湊は最大級の賛辞をくれる。

喜んでくれたんなら、買った甲斐があったってもんだ。

「でも…これ高かったんじゃない？」

「タイムセールで1つ1000円だった。」

正確には×3ぐらいしたけど。

「そつ…ありがとね、遊。」

「おう！誕生日おめでとさん、湊！」

）
）
）
）
…

机の上では黒猫がメロディーを口ずさんでいる。

しつとりと儚げに…という遊のセリフにピツタシの音質で、黒猫はメロディーを歌い上げていた。

私はそれを机に突っ伏しながら何度も聞いていた。

「…」

考えるのは合宿中に命じられた作曲の事。

一応の完成にまであと一步届かない…といった進行状況。

なんだか1小節1小節それぞれが『何か足りない！』と私に言ってくる気がするのだ。

…といつてもなにが足りないのか、どこに入れればいいのか、なんて事が分かっている訳ではないのでどうしようもない。

思いついた音を思ったままに入れても、むしろメロディーが崩れた気がしてまた元に戻す…といった繰り返しが続くが結局夏休み最終日まで続いてしまった。

『本当…空気読めよ…』

なんて言っていたから、たぶん殆ど差はないんだろうと当たりはつけている。

…気に入ってくれたかは分からないけど、なんだかんだ優しい遊はきつと身に付けてくれるだろう。

「しょうがない…か…。」

机の上にはらまかれていた楽譜を1つに纏め、ファイルに挟んで鞆の中にしまう。

結局未完成のまま御披露目する事になってしまっが、ムギにでもアドバイスを頼めばきつと完成するだろうし…:…:なにより時間が無いのだからしょうがない。

部屋の電気を落とし、ベッドの中へと潜り込む。

クーラーでほどほどに冷やされた部屋で、私はゆっくりと意識を落としていく。

明日は始業式なのだ。

今更頑張っても良い曲は作れないと冷静に考えて思った。

夏休み中ずっと考えていたものが、朝までのたった7時間程で答えが見つかることなんてないだろう。

私がつった曲…いや作りかけの曲。

私だけの力で完成させたかったが…仕方ない。

明日とりあえずみんなに聞かせてみよう。

そうすれば…きっと完成するから。

……………寝れない。

第18話 (後書き)

誕生日おめでとう！って話でした。

別に入れなくてもいい話でしたが、思いついたんで突発的に書いた話です！

感想お待ちしてます！

第19話(前書き)

顧問編 その1です

第19話

「結構時間掛かっちゃったわね。」

教室に設置されている時計を見ると、どうやら私達のクラスは30分も掃除をしていたらしい。

ギターを肩に掛けて、鞆を右手に持ち部室へと向かう。

どうせ唯や律や遊がいるんだから、紅茶なんかを飲んでゆっくりしているだろう。

私は階段を一段一段と上がっていく。

…？何か後ろからドタバタした音が…

「みなちゃん！久しぶり〜！」ムギューベタベタ…

「…4日前に部室であつたでしょ…2学期になって少しは落ち着いたりしないの？」

肩に頭を乗せて後ろから抱きついてくる唯に、すでに諦めつつも一応一言とげを刺す。

唯は2学期が始まってもいつも通り全く変わらず、むしろ更にベタベタとくっついてきて『あま〜い！』なんて1人和んでいる。

まあ踊り場まで我慢したことは評価しておこう。

「歩きづらいから止めなさいって。」

あと廊下で、しかも階段付近で後ろから急に抱きつくのも止めなさい。

少し語気を強くしたところで、渋々といった感じで頭をどかし私の横に並ぶ。

ギターやら鞆やら唯やらを支えていた肩の荷が文字通り降りる。

「なんで唯がここにいるの？先に部屋行ってたんでしょ？」

掃除当番で遅くなる、と伝言を頼んでいたはずだ。

「いや〜練習してたら指切れちゃって〜。てへへ〜お恥ずかしいまねを〜。」

絆創膏の貼られた指を見せながら、なぜか恥ずかしそうにしている唯。

それって練習をあまりしないで、指先が硬くなってないからなったんじゃない？

…それなら恥ずかしい事だったわね。

「みなちや〜ん！」ギューッ

と話している所に、また後ろから思いつきり抱きつかれる。

「…今度はムギ？」

「あゝ！ムギちゃんずるいゝ！私もゝ！」ギューッ

前から後ろから思いつきり抱きつかれ、人間ハンバーガーが出来上がる。

もう歩いてなどいられないので、立ち止まったままゆっくりとパンを一枚ずつ剥がしていく。

「…それでムギはどうしてここに？」

教室を出て10分…いまだ部室の前にすらたどり着かず、踊り場で立ち往生している私はこの際とばかりにゆっくりと歩きながらムギに事情を聞く。

「あのね、文化祭の講堂の使用許可を申請しに職員室に行ってたんだけど…」

何故か恐縮しながら話してくる。

というかそうというのは部長なり副部長がやるものじゃないの？

「それでちゃんと許可取れたの？」

「それが…軽音部は部として認められてないから駄目なんだって。」

…はい？

「軽音部！ってちゃんと名前あるのにヒドいよねゝ！…知名度が足

りないのかな？」

「…それって…」

唯の発言はスルーするとして、部活として認められてない、ということとは軽音部が正式な部活になっていないということ。

でも人数も今や6人と余裕を持つてるくらいだし、また一学期中は毎日のように音楽準備室を占拠して練習（少量）をしていたが何も苦情がこなかったので、てっきり使用許可が出ていると思っていた。

…色々私物も置きっぱなしだし…。

「そういうことらしいけどどういうこと？部長に副部长さん？」

その話を聞き、ゆっくりしていた脚を速め、ものの1分で部室に辿り着く。

また部室に入ってから5秒後には説明に入っていた。

漣に手のひらを見せつけて遊んでいた律も流石に真面目に話を聞いていた。

聞いていなかったのは何故か耳を塞いでいた漣と…

「…zzz」

長椅子で完全に熟睡している遊だけだ。

「部として認められてないって!？」

遊を叩き起こそうと長椅子に近付こうとしたが、律のあまりにも真剣な雰囲気踏みにどまる。

正直軽音部の部長、副部長に事務的仕事を期待することなんて、普段を見ていれば出来るわけがない。

そうであろうと思っていた律がこんなに真剣に考えようとしているのだから、駄目男なんて放っておいて今は真面目な話をしたほうがいいだろう。

「うん…軽音部は正式な部活じゃないからって…」

「でも人数はちゃんと4人以上いるのに。」

「とりあえず事情を聞かないと！」

「うん！事情を聞きに行こう！」

…

…

「…どこに行けばいいんだっけ？」

「そんなお決まりのパターンいららないわよ。」

「職員室とかじゃない？」

「待って。とりあえず1つ心当たりがあるからそっち先に行ってみ

ましよう。」

そろそろ貯まってきた貸しも返してもらわないと。

「心当たり？」

「あなたの友人の所よ。ほらっ、行くわよ。あと淺、なんだか知らないけど置いてくわよ？」

「っ！1人にしないで〜！」

4人を引き連れて歩くこと数分。

先行する私はある教室の前で足を止めた。

「ここって…生徒会室？」

桜ヶ丘高校生徒会…つまり生徒のために雑務を行う優等生が集まる場所だ。

「ええ。ここなら「ようし！行くぞ〜！」「お〜！」「…はいはい。」

たのも〜！、部長は私！と意味分からない掛け声を発しながら、唯と律が一足先に生徒会室に転がり込んだ。

「…失礼します。」「失礼しま〜す。」「失礼します。」

不本意ながらその後に残り3人も入っていく。

「唯？湊？」

生徒会室に入ると聞こえたのはお目当ての人物の声。

上手い具合に生徒会室に今は1人しか人はいなかった。

「あれ？和ちゃん？どうしてここに？」

「なんでって…私生徒会に入ってるから。」

「そうなの！？凄いな、和ちゃん！」

「あなた達本当に幼なじみなの…？」

私だって知っているのに…

「唯〜！そちらの人と知り合いなのか〜？」

「あつ、うん！こちら私の親友の和ちゃん！」

「唯と幼なじみの真鍋和です。唯がいつもお世話になってます。」

ぺこりと頭を下げ自己紹介をする和。

その言い方だとまるで唯のお母さんみたいだから止めなさいって。

和の自己紹介を聞いて律、ムギ、漣の順に自己紹介を返す。

…ってあれ？

「そついえば遊は？」

「眠いから寝てるって。」

「…無理やりでも起こしてきなさいよ、ムギ。」

「起こしたんだけど、すぐにまた寝ちゃって…。」

「ああ、あと1人湊のお兄さんがいるのね。…それで軽音部がどうかしたの？」

「それなんだけど…文化祭で講堂の使用許可が下りないのよ。」

「…ちよつと待って。今リストを見てみるから。」

私の一言を聞くと柵からファイルを取り出して、何かを探してくれる。

「なんか唯よりも湊の方が幼なじみっぽいな。」

「え〜！そんなことないよ〜！」

「和は唯のお母さんだからね。」

「それなら湊は唯のお姉さん、って所かしら。」

ペラペラとファイルに挟まった紙を捲りながら反撃してくる。

「…だから厄介事を押しつけられてたのね。」

「いや…納得するのもおかしい気がするぞ。」

そうじゃなきゃこんな唯（和曰わく私の妹）の世話をする理由もないだろうし。

「…やっぱり無いわね。」

雑談をしている間に探し続けていた和が、徒労の報告をした。

「そんな〜…」

メンバーがそれぞれ溜め息混じりに何かを呟く。

このままでは文化祭のステージに立つことが出来ないのだから、それは至極全うな態度だろう。

まあ私としては今まではただの確認作業。

本番はここからだ。

「それじゃあ和、ねじ込んでおいてくれない？」

「…湊。」

怪訝そうな表情を浮かべる和。

「今までの貸しの分全部使って良いから。…やらないとは言わせないわよ。」

「お〜い、湊〜。黒いぞ〜。」

今はそんなこと言ってる場合じゃないでしょ。

「どうせ和の事だから当たりは付けてるんでしょ？」

「…はいはい。いつも湊には唯の事任せっきりだったから、今日くらいは私が動くわよ。」

「それでよろしい。」

「なんだか分からないけどありがとう！和ちゃん！」

「…あの2人の中じゃ、唯は小学生か何かなのか？」

「…幼稚園児じゃねえ？」

「…あははは。」

後ろで何か話しているが今は気にしない。

「それで軽音部の事だけ…部活申請用紙が出てないから認められてないんじゃない？」

「部活申請用紙？」

「ええ。それを出さないと正式に部として認められないの。」

「そんな話聞いてないぞ！」

その通りだ。そんな用紙があること自体知らな…「聞いてるだろ！」
…何故か漣がめちやくちや怒ってるけど…。

というかどす黒いオーラが…

その後漣による鉄拳制裁を律が受け、それから消えた部活申請用紙
についての話を…まあ律が書き忘れただけの話だが…漣の口から聞
いた。

「そう。私がまだ入る前の事だったのね。」

話によるとまだ4月の頃の事…遊が入った辺りの事みたいなので私
にはどうしようもない事が分かり、少しホッとする。

「…じゃあ今から私が書いてあげるから。ちょっと待って。」

「本当！？ありがとう、真鍋さん。」

「和、でいいわよ。私も漣、って呼ぶから。ねっ？」

漣、律、ムギと和の普段の行いを知らない3人の中で、和の評価は
今鰻登りだろう。

「えっと…軽音部…っと。部員は6人よね？…あと顧問は？」

「「「顧問?」「」」

…

…

「ごめん、和。どうやらそれすら決まっていなかったみたい…。」

「いや、湊も気付きなさいよ。」

「ここぞとばかり攻めないでよ。」

確かに気にしたこともなかったけど…

「じゃあ今から顧問になってくれる先生を探さないと!」

「でもやってくれる先生いらっしやるかしら?」

「無理やりでも引つ張つちまえばいいんだよ!」ここに判子押すだけだから!』とか言ってるさ!」

「判子だけじゃダメじゃない?名前とかなきゃ。」

「唯は着眼点がおかしいから黙っててね。ついでに律も。」

「え〜!何で私まで!」

「邪魔だから。」

「うわ…バツサリ…。」

律と唯がいたらいつまで経っても話が進まないじゃない。

「まあとりあえず決まったらこれを書いてもらいなさい。名前と判子だけでいいから。」

和はファイルから一枚の用紙を取り出すと、それを私に手渡す。

「じゃあちよつと待ってて。たぶん今日中に持ってくるから。」

「ステージの申請が今日までなのよ……」

「それをなんとかするのが和でしょ？頼りにしてるから。」

折角の機会なのだからとことん甘えてやろう。

「……じゃあ山中先生とかは？たしか吹奏楽部の顧問もしてるけど、音楽を担当してるの先生だけだから、ギターとかの知識もあるだろうし。」

「山中先生か。」

「あの綺麗な先生だよな？」

「私さつき絆創膏貼ってもらったんだよ！」

「山中先生……」

漣、律、唯、ムギとこれまたそれぞれの反応を見せたが、特に不満は無さそうだ。

というかボーっとしてるムギは何を考えているのか全然分からない。

「よしっ！じゃあ今から山中先生の所に突撃だ〜！」

「「お〜っ〜！」

「…軽音部って唯にピッタシの部活ね。」

「私には気苦労絶えない部活だけどね。」

「あらっ、湊も軽音部にお似合いだと思うけど。…主にお母さん役として。」

「じゃあ山中先生に相談しに行くから。決まったら電話する。」

「はいはい。それじゃあ私は今日中に決まることを願ってるわね。」

クルッと振り返り生徒会室を出て行く。

是非ともお母さん役は湊に譲りたいと切に願いながら。

第19話（後書き）

更新遅くてすみません…

今完全に詰まってしまい、ストックを放出するしかないアンリです。

もう少しで学園祭までは書き終えるのに…このままじゃストックが切れるどころか、来月までの完結が出来ない可能性も…

今から徹夜で頑張ってみたいと思います…

よろしかったら励ましの感想をお願いします…

第20話(前書き)

顧問編 その2

第20話

「でも山中先生どこにいるのかな？」

「職員室か…もしくは吹奏楽部の部室にいるんじゃないか？」

私達は今軽音部の顧問になってもらうべく、この学校で唯一の音楽の教師である山中先生を探している。

「それじゃあ職員室に行ってみない？さっき職員室で見たから。」

「そうだね。それじゃあ職員室に！」

「いや…その必要は無いみたい。ほらっ、あそこにいる。」

「あっ、本当だ。生徒から何か質問されてるのかな？」

「見た感じただ話してるだけじゃない？」

「何にせよチャンスだ！突撃するぞ！」

そういうと何故か手に持っていた2冊の教科書をクルクルと丸め、双眼鏡のように両目に押し当てながら山中先生へと近付いていく。

「おいっ！まだ話ししてる最中だぞ！ちょっと待ってっ！」

「あっ、でもちようど話し終わったみたい。」

「狙いど〜り！」

「はあ…じゃあ行きましようか。」

やはり手作り双眼鏡を持ちながら近付いていく律に追隨するように、私達も山中先生へと近付いていく。

…別に隠れながら近付かなくていいのよ？ムギ、唯…

「さて…部長はどんな風に話を進めていくのかしら？」

「律の事だし、結局直球勝負になると思うぞ？」

透が言うのならそうなのだろう。

まあ私も同意見だしね。

「山中さわ子。」

我が校の音楽教師である。

その綺麗な顔立ちと柔らかな物腰で、生徒だけでなく教師からも人気が高い。

さらに楽器の腕前や歌声も素晴らしく、ファンクラブが存在する程の人気がある。」

…

…なんかナレーション風に煽ってる…一応変化球なのかな。

「あの…さつきから何してるの？」

明らかにおかしい光景に、流石の先生も無視することは出来なかった。

…いや、心配して声をかけてきただけかもしれないが…。

「……先生っ！！」「……」

反応してくれたのを切欠に、律の後ろに隠れていた唯、ムギ…ついでに澪がそれぞれ脇から大声で山中先生を呼んだ。

私は後ろで1人ぼかんとしている。

打ち合わせもしてないのに、アドリブであそこまで上手く揃えることなんか少なくとも私には出来ない。

「はいっ！」

釣られて先生まで大声で返事している。

たぶん…この人ノリがいい人なんだろう。

「軽音部の顧問になってください！」

「まだ顧問いなかったんだ…」

本当にダメな部ですいません、と謝りたくなってくる。

「先生しか頼める人がいないんです！」

先生しかまだ頼んでないですけどね。

「お願いします！」

「…ごめんなさい。なってあげたいのはやまやまだけど、私吹奏楽部の顧問もやってるから、掛け持ちはちょっと…」

それはそうでしょうね。

いちいち可哀想だからとかだけで生徒のために動いていたら身体が持たないし、吹奏楽部の人達にも悪いだろう。

それでも是非やってもらいたいから、こうやって頼みに来てるのだが…

まあいざとなったらウチのバカ担任を騙してでも顧問にすればいい、と思っているので正直私は真剣に頼んではない…というか後ろで見守っている。

「…今まで声をかけてきた男は数知れず…」

「だ、だから煽ってもダメです！」

「時間なら取らせませんから！」

「練習も自分たちでやりますから！」

「ここに名前と判子押すだけ！ねっ、簡単でしょ〜？」

なんかの悪徳商業なんじゃないかって思うほどのごり押しに、山中

先生もたじたじといったところ。

でも状況は好転していない。

ここで何か別の手を打たないと言い負かされるわね。

「先生、」

そんな局面で次の一手を打ったのは、

「この卒業生ですよね。」

「え、ええ。」

今まで下から先生を見上げているだけだった唯だった。

「さつき昔の軽音部のアルバムを見てたんですけど…」

「えっ！？」

そこで綺麗な顔立ちと柔らかな物腰で人気の先生にはあるまじき、
潰された蛙のような声が…

「そのアルバムはどこにあるの？」

「へっ？部室ですけど…」

「そう…」

明らかに様子がおかしい。

先程までの余裕が無くなっている。

「山中先生、どうかしたんです…か？」ダッ

話しかけようとしたその瞬間、先生は短距離走並みの全速力で私達から離れていった。

「…行っちゃったな。」

「しかも凄く豪快な走り方で…。」

「先生どうしたんだろう？」

「何か急用でも思い出したのかしら？」

いや…それだけじゃあの変わりっぷりは説明できないだろう。

「アルバム…って何？」

「知らないのか、湊。アルバムってのは青春の1ページを写真にして「そんな事聞いてないわよ。」…まあ、そうだよな。」

「さっき昔の軽音部の人達が取った写真が入ったアルバムを見つけて、みんなで見ってたんだ！」

「…それでなんで山中先生に？」

「うん。これなんだけど…」

そついつて唯は制服のポケットから一枚の写真を取り出す。

「これは…山中先生？」

「うん。なんだか凄く似てるな、って思ったから聞こうとしたんだけど…」

聞く前に逃亡してしまった、ということか。

唯が持っていた写真には先生と同じ髪色で、でもパンク系のような派手な格好の生徒？が写っている。

「…なるほど。先生はこの本性を隠したいから、アルバムを消去しよう」と部室に向かったのね。つまり…律。」

「ああ…これでいただきだな。」

とにかくここにいても仕方ない。

今は山中先生が向かったであろう部室へと向かおう。

「ふあゝ…みんなおっせゝな…。」

長椅子で横になること30分強、いつの間にか他の部員が姿を消していた。

「鞆はあるから帰ってないだろうし…まさかみんなでコンビニに買い食いしにいったとか…そんなわきゃないか。」

俺は長椅子から立ち上がると、普段みんなでお茶をする机の方へと向かった。

きつとたぶん勘だが、そろそろ帰ってくるだろう部員にお茶の準備くらいしていないとなに言われるか分かったもんじゃない。

『練習もしないでなにやってたんだ!』みたいな熱血キャラになってもいいが、寝てる姿を見られている以上失笑が良いところだろう。

それならば執事キャラで迎えるくらいしてやるうか!…と思つての行動だった。

棚の中からそれぞれのカップを取り出し、ポットに入つたお湯を淹れて温めておく。

その間にお菓子用に皿とフォークを計6人分用意しておく。

「…ん?」

ふと目を机の方に向けると、開きっぱなしのアルバム…さっきまで俺と唯、律で見ていた物があつた。

たださっきまでと違うのが…

「写真1枚無くなってるし。唯か律が持ってたのか？まあ別に無くなって困る人なんて」ガチャ

扉の開く音…どうやらみんな帰ってきたみたいだ。

途端姿勢をピンと正し、お嬢様方を迎え入れるために、想像する執事像を意識したポーズを取った。

「お帰りなさいませ、お嬢様。今紅茶の準備をしていますので少々…えっ？」

そこにいたのは予想に反して1人の女性…いや1匹のメドウーサ。

長い髪をバサバサにし、荒々しい息遣いをしている化け物。

逆光になってよく見えないが、目が紅く光っているようにさえ見えた。

「えっと…どちら様でしょうか？」

あまりの不気味さに執事キャラはすぐさま崩壊し、素の自分が出てきてしまう。

正直窓から外に逃げ出したいくらいだ…死ぬなら自分で、という意味で。

とはいえ化け物が現実にいるわけもないので、あれは9割方の確率で人なんだろう。

とりあえずはコミュニケーションを取ってみよう。

はうどうーゆーどうー…だっけか？

間違いなく引き裂かれるな。

「ここは軽音部の部室でして…何かご用でしょうか？」

「…ハア…ハア…それを…」

女性（仮）が指差すのは机の上に開かれっぱなしで置かれているアルバム…もしくは丁度直線上にいた俺だった。

「あつ、はい！こちらですね！もちろん差し上げますので…」

「それ…頂戴っつ！」

「ひいっつ！食べられる!？」

16歳になったばかりなのに…こんなDEAD ENDありかよ…。

ごめん…みんな、先立つ俺を許してくれ…。

「そこまでです、先生。」

のろのろと俺に近付いてくる女性（仮）の足が止まる。

俺と女性（仮）の直線上のドア付近…そこからまた1つ声が発せられた。

女性（仮）も入り口の方に振り返る。

「ほらっ、やっぱり。」

「あなただったんですね、山中先生。」

えっ…何この状況？ミステリー？

てかこの人山中先生っ！？

「…そうよ。私ここに在学中の頃、軽音部に入ってたの…。」

「じゃあこの声も…」ポチッ

『お前等が来るのを待っていた……!!』

「止めて〜!」

どっから取り出したか分からないラジカセを律が押すと、けたたましい絶叫が部屋の中に響いた。

先生は耳をふさいでその普段の先生とは印象の違う声を拒絶する。

その横で澁も耳を塞いでいたのは、今回限り俺も納得できた。

…だってマジこえ〜し。

「じゃあギター弾けるんだよね！弾いてみて弾いてみて〜!」

「ちょっと。私は…」

唯は自分のギターを山中先生に押し付けるように渡す。

「はっ!?!?……」

唯のあまりにも強い押しに負け、ギターを掴んだ所で山中先生の身体がピクリと痙攣した。

…しかもなんか凄く恍惚とした表情を浮かべてるし。

…もしかして山中先生ってヤバい人?

ジャラーン

一回ストロークし、今度は長い髪が垂れ下がるように俯く。

そしてそのまま…

「早弾きっ!?!?」

「タツピング!?!?」

「歯ギター!?!?」

「私のギター!?!?」

俺達に驚愕を与えるような演奏を、長い髪を振り回し身体を上下に振りながらかき鳴らしていく。

目つきまでめちゃくちゃ鋭くなっている。

「お前等、音楽室を好きに使いすぎなんだよっ!」

「「「「「う…うめんなさいっ！！！！」「」」」」

演奏終了とともに俺達への溜まりに溜まっていた不満をぶちまける。

俺らは素直に素早く土下座をして誠意を見せた…何の誠意だ？

きつと生命への執着心みたいなものだろう。

「大体なあ…はっ！？」

このまま1時間くらい頭を下げ続けなければいけないのでは…と危惧していたのだが、これまた急に先生の説教が止まる。

…何かあったのだろ…はっ！？

「っ！湊！早くお前も土下座しろって！」

辺りの様子を伺つと、そこには立ったまま腕を組んでいる湊がいた。

きつと先生はこれにまた激怒したんだろう。

早いとこ土下座させないと…「たっぷりと先生の行動見させてもらいました。」…反撃すんな！

「でも安心してください。別に私達先生の事をバラそうだなんて思っ
つてないですから。」

少し涙目になっている先生ににじり寄っていく湊。

この状況であの微妙な作り笑顔を作れるのは大したものだと思う。

「でもぶっちゃけますと、先生が顧問になってくれなきゃバラします。」

…悪魔だ！、悪魔がここにいるぞ！

というかなんで顧問がどう、って話になってんの！？

浦島太郎状態なんだけど！？

もしかして丸一日寝てて、計24時間30分寝てたんじゃないのか？…いや48時間も…

「それじゃあこれに名前と判子お願いしますね。」

律が持っていた用紙を見た目奪い取り、先生の前に突き出した。

「うう…分かったわよ。やればいいんですよ。やれば。」

「物分かりが良くて嬉しいです。」

してやったりみたいな表情しない！

「…湊だけは敵にしたいくないな。」

「…私も思った。」

「全く状況把握出来ないけどなんかごめん…」

今どこかに電話している妹を見ながら怯えるみんなに謝罪する。

何に怯えているかは言わずもなだろつ。

こうして新しく山中先生が顧問として軽音部に加わった。

…でなんで顧問いるんだよ!?

第21話 (前書き)

顧問編 その2です

第21話

「とりあえずこんな感じのオリジナルをやろうとしてるんですけど…。」

演奏を終え澁が山中先生にアドバイスを乞う。

顧問になつてもらつた先生からのリクエストで早速合わせたのだが、久しぶりに合わせた割にはまともに出てきたらう。

あくまで『割には』…であつて、例えば…

「そうね…ドラムが走り気味だったり、トリプルギターが上手く決まっていなかったり問題点はいくつかあるけど…」

そう、今言われたことも気になる点だ。

夏休み中に合わせたときはなかなか上手く出来ていたのに、4日も合わせなければこんな風にズレた音楽になつてしまふ。

安定感の欠片もないバンドなのだ。

一度聞いただけでちゃんと問題点を言える山中先生を顧問に出来たのはかなりプラスになるだらう。

「ボーカルはいないの？」

「ボーカルはまだ…」

漣は少し気まずそうにぼつりと機嫌を伺いながら話す。

先生の本性を知ってからやはり恐怖心が芽生えたみたいだ。

「…歌詞もまだとか？」

先生が少しずつイライラしている。

「えーっと…どうなんだ、漣？」

「うん…一応書いてきたけど…」

「歌詞は出来てます！」

「見る前から決定するな！」ボカッ

「えっと…一応漣…じゃなくて秋山さんが歌詞は考えてくれてたんです。」

コントやっているような2人をムギがフォローする。

「…なるほどね。それじゃあ他に何か弾こうとしてる曲はあるの？
流石に1曲だけで出ようとしたわけじゃないでしょ？」

…

…

「あなた達…なんで目線を合わせないのかしら？…もしかして他にはないの？」

山中先生、正解です。

「あなた達…それでよく学園祭のステージに出ようとしたわね…」

あつ…噴火しそう…。

みんなも不穏な雰囲気を感じ取り、少し身構えている。

「音楽室占領して何やってたの！ここはお茶を飲む場所じゃないのよ！」

「す、すいません！」

「…あつ、あともう1曲今作ってる最中で！なあ、湊！」

遊の奴…私に責任押しつけてきたわね。

「…まあ確かに今日披露する約束だったけど…」

私の中では未完成な曲。

「…じゃあそれも弾いてみて。」

当然の事ながら、それも演奏するように催促された。

「先生、この曲はまだみんなに聞かせてない曲なんで、とりあえず私だけで弾きます。」

淺、ムギなら楽譜を見ただけですぐに弾けてしまいそうだが、あいにく…

「良かった。楽譜読めないのがバレちゃうところだったよ。」

「唯！声に出しちゃってるから！黙っとけ！」

ギター陣が私1人になるのが予想できたので却下………ちなみに律もなんか不安なので保留しておく。

「…そんなペースで間に合うの？」

「まあたぶんなんとかなるかと…それじゃあ…いきます。」

私は1人キーボードの前に立ち、譜面台に自作の楽譜を一枚置く。

「あれっ？白木さんはギター以外も出来るのね。」

「そうなの！スゴいでしょ！」

なんで唯が威張るのよ

「いや、照れるな！」

「遊じゃないからな。」

「ああ…今から私のキーボードが湊ちゃんに…」

「お、い、ムギ。トリップしてるぞ。」

「…はあ…。」

周りの小芝居に1つため息を吐き、私は指を滑らした。

）
）
）
…

「はい、終了。」

キーボードのスイッチを切り、楽譜を譜面台から取り上げる。

「綺麗な曲だね〜！」

「うん…何だか私感動しちゃった…。」クシユ

「そう？ありがとうございます。」

唯とムギにはどうやら大絶賛の曲になったようだ。

まあ曲が完成だとしても、まだ問題点はある。

「…それでこっちの曲の歌詞は？」

そう。それについて何も考えていないのだ。

「」「あっ…」「」

澁と律が同時に固まる。

やっぱり誰も考えていなかったみたいだ。

「そ、それは曲が出来たらみんなで考えるつもりだったんで！だから来週までには絶対に出来ます！」

遊が根拠の無い予定を口にする。

「はい！それなんで月末の学園祭には間に合います！」

次いで律までが調子の良いことを口にする。

いつもティータイムばかりで練習しない2人がなにを言う。

「それじゃあ来週完成したのを聞かせてね。」

「「……………はい？」」

「来週までに物にするんでしょ。そうね…ついでにその前に聞いたのもボーカル有りで聞かせてもらおうかしら。」

「ござとばかりに攻めて来てるわね。」

さっきの仕返し、くらいに考えているのかしら。

「ちよっ、さわちゃん。それは言葉の文だし…それに2曲も…」

「あらっ？出来るのよね？…あとさわちゃんって呼ばない。さわ子先生と呼びなさい。」

「そんな威厳無いくせに…」

「つーか俺は最初化け物と勘違いしたくらいだから…」

「と・に・か・く！来週までだからね！じゃあ私は職員室に戻るから。頑張りなさいね。」ガチャン

トン、トン、トン…

…

…

「………とりあえずさわ子先生をいつ闇討ちするか決めようか。」

「そんな物騒なことするな！」

「自業自得よ。」

大言壮語だつてすぐに分かるような言い様だつたし。

「それで…歌詞どうする？」

「1曲目のは漣が書いてきたやつに…ってまだ見てなかったな。とりあえず見せてくれよ。」

「えっ！？今見せるのか！？」

「見なきゃ判断も出来ないだろ？」

律が急かすも、漣は歌詞の書かれているであろうノートを手離す気配はない。

「漣…俺は漣のが…見たい…。」

「何ふざけてんのよ。とりあえず、でいいから見せてくれない、漣？」

「う、うん…。」

顔を真っ赤にしながらおずおずと私にノートを渡す。

みんな気になるようで、私の周りに集まって首を一生懸命伸ばしてノートの中身を見ようとす。

ある程度みんながポジションについた所で私はノートの中身に視線を落とした。

『君を見ると、いつもハートDOKI！ DOKI！
揺れる思いはマシユマロみたいにふわふわ…』

…

…

「私としてはいい感じに書けたと思うんだけど…」

うん…これはなんと云えば良いのだろう…

もう生理的に受け付けられないレベルの桃色空間が形成された歌詞だっ

た。

『くまちゃん』とか『ドリームタイム』とか人生で一度も使うことなく終わりたい言葉がふんだんに使われているのだ。

とても普段真面目な溇が書いたとは思えないメルヘンな内容となっている。

遊や律が背中を掻くような動作をするのも納得できる。

まあ決めるのは部長だから私は傍観しよう。

「やっぱりダメかなあ…？」

あまり芳しい反応が無いため、溇が涙目になっている。

「いや…ダメってどうか…なあ？」

「ちょっとイメージと違ったってどうか…」

やはり律も遊も反対派だ。

私も心の中では反対なので、若干ほっとする。

「じゃあこれは無しで、他のに…」

「凄く良い…私は凄く好きだよ、この歌詞！」

「ほ、本当？」

「うん！」

…いや、まだ賛成2票、反対3票なのだから、分からない…あとは
ムギ…だったわね…はあ…

「ム、ムギはどう？…って超うつとりしてるし！」

「まさか…ムギも気に入ったとか？」

「うん…」

「…マジで？」

「YES…」

「本当に？」

「どんといいです…」

…

「じゃあこれでいきましょうか。」

「湊までっ！？」「風邪でも引いたのか！？」

…なんかすごく失礼なこと言われている気がする。

「もうこれ以上時間を伸ばしたら来週までに間に合わなくなるし、
それに…」

「「それに？」」

「私にあんな泣きそうな目で、こっちを見てくる澪を説得するなんて出来ないから。」

遊と律の後ろを指差しながら理由を説明した。

「えっ…うおっ！」

そこには先程同様涙目の澪が…

「…遊と律は…私の詞…嫌なの？」

「いや…その…」

「いや、俺は良いと思うぞ！うん、やっぱり澪は凄いな！」

「なっ！？…ああ！分かったよ！これで決定でいいよ！」

「〜！良かったね、澪ちゃん！」

「おめでとう、澪ちゃん！」

「あ、ありがとう、唯、ムギ！」

「」「はあ…」「」

まあとにかく1曲目は澪が書いてきた『ふわふわ時間』で決まった。

「じゃあ澪がボーカルって事で…次は「へっ！？」…何驚いてるのよ。あと1週間しか無いんだから、歌詞を覚えてる澪がやるのが一

「番でしょ？」

「第一私は絶対にこんな恥ずかしい歌詞歌いたくない。」

「その点作詞者なら抵抗無く、自分の思った通りに歌えるだろうし。」

「でも…でも…」

「でも？」

「こんな恥ずかしい歌詞歌えないよ〜！」

「「おいつ、作者っ！！」「」

「…こんなで来週までに完成するのだろうか…」

「それじゃあ次は湊が作ってきた曲だな。」

『ふわふわ時間』の話はなんとか終わり、ようやく湊が作ってきた曲の話になる。

このペースだと今日はもう練習しないで、話し合いだけで終わりそうだな…。

「はいは〜い！こっちも私がボーカルやるよ〜！」

「まだ歌詞も決まってないっつ〜の！」

『ふわふわ時間』のボーカル問題は結局希望者による決定がなされ、希望者1名により決戦投票も無いままあっさりと決まった。

その後試しに唯にやらせてみた所、歌を忘れたりギター演奏忘れたり…更には全く違う曲を歌い出したりしたのを見て、冷や汗だらだらになったのはみんなもだろう。

「…それで誰が書いてくるのよ。みんなで…なんて悠長な事言っつられないわよ？」

「そっだよな…漣は書けそっか？」

「うーん…頑張つては見るけど…」

「出来るだけ早く、つていうと厳しいんじゃないか？そんな急かさなれて作るようなもんじゃないだろうし。」

「じゃあ作詞も私がやるよ！しんが〜そんぐらいた〜」

「いや…唯じゃ無理だろ…」

「じゃあみんな1つずつ考えてみない？唯ちゃんもりっちゃんも！」

「1人1個？」

「お〜！それおもしろそうじゃん！やってみようぜ！」

「どこが面白そうなんだよ…」

「まあ時間が無いし、人数を増やすのは悪くない選択肢だと思うわ。」

確かにその方が早く出来る確率高いしな。

「んじゃやってみるか。」

「」「お〜！」「」

「また明かり点いてる…」

丑三つ時…とはいかないが、もう高校生なら寝とくべき時間になっている。

すっかり早寝遅起きの生活環がなくなった遊だが、それでも12時

には毎日寝ていた。

今日はきつと作詞活動をしているのだろう。

かくいう私もそれで起きていたのだ。

作詞…作曲に時間のかかった私は作詞にも同じ様に時間がかかるらしく、3時間ほど考えても浮かぶのは陳腐な詞ばかりだった。

お風呂に入って頭をすっきりさせて、もう一踏ん張り、と考えていたのだが、明かりの洩れている遊の部屋の前で立ち止まってしまった。

コンコン……………ガチャ

「遊、調子はどう？」

…カリカリカリ…

部屋に入ると携帯にイヤホンを繋げ、たぶん私の曲を聞きながら歌詞を書いていた。

私は少し強めにドアを再びノックする。

「ん？ああ…湊か。」

「夜遅くまでご苦労様。良い詞浮かんだ？」

「いや、自分の才能に惚れ惚れしちまうな。なんで俺は作詞家にならなかつたんだらうな？」

いや〜参っちゃうな〜、と頭を掻きながらニヤニヤと笑う遊…どうやら順調みたいだ。

「まだ高校生だからでしょ。…ちょっと見るわね。」

私は机の脇に置かれたルーズリーフを勝手に取る。

「それは最初に書いた奴だな。今んとこ保留にしてるやつだ。」

書かれていた詞…」

…

「これはボツなの？」

「ん〜…たぶんな。今書いてるやつすげーいい感じなんだよ！」

「ふーん。」

「反応薄っ!?!…じゃあ湊は？」

「まあ…そこそこ。」

私の部屋に、一行だけ歌詞が書かれたノートが机の上に乗っている。

「それじゃあ明日は勝負だからな！俺は今完成したからもう寝るわ。」

「

『作詞白木遊』と律儀にルーズリーフの右上に記載し、ファイルに

挟んで鞆の中へとしまふ。

「そう。それじゃあおやすみ。」

私は素早くベッドの中に滑り込み、すでに寝息を立てている遊に聞こえていないだろうが声をかけて部屋へと戻った。

…私ももう少し頑張らなきゃ…

「ふっふっふっ…」

「じゃあ早速歌詞書いてきたの見せようぜ!」

「ふっふっふっ…」

「どうしたの、遊君?」

唯が心配そうに俺の顔色を確認している。

気にしないでいいぞ、唯。

これはただ…

「睡眠時間が足りなくて更に気持ち悪くなってるだけだから気にしないで。」

「少ししかなくてないっつーの！」

「自覚はしてるのか…」

「はいはい！私を無視すんな〜！それじゃあ唯から見せてくれよ。」

パンパンと注目を引くように手をたたいた律が、歌詞を見せるよう催促する。

「……………あつ！…忘れてた…」

「はい次〜！元々唯にはそんな期待してなかったし！じゃあムギ〜！」

ピシッとムギを指差す。

「うん！」

凄く真剣な表情でノートを眺め、ムギは1つ咳払いをしてから歌詞を発表していった。

『小麦粉溶かしてひたすら混ぜる
卵を1つ、2つ…ネギも忘れずに…』

…

「…それなんの歌だ？」

まだまだ歌詞は続いていたが、部長権限により強制ストップ。

「お料理の歌！今までに無かったような歌詞が書きたくって！」

「はい、却下！」

「そうだよな…案外料理作る曲ってあるしな。」

「そうなの！？」

そうそう、コロッケとか冷やし中華とかな。

「問題はそこじゃないっつーの！それより次は遊！」

「俺？…しょうがないな…白木遊、渾身の傑作を聞かせてやるっ…」

俺は鞆の中から水色のファイルを取り出し、そこに挟まれたルーズリーフを持った。

…それじゃあいくぞ…

『真っ赤に燃えている物なの？

それとも冷たく凍ってる物なの？

形も色も分からないのに

僕らは繋がって、一つになってる

さあテストをしよう、僕だけの物
簡単な問いかけで調べられる
でもそれだけじゃ全ては把握できない
不透明な宝物
僕は持っている』

…

「どうよ、どうよ？」

みんなが真剣に俺が渡したルーズリーフを見る。
今までとは違い『即却下〜！』を貰うことなく、全体に目を通して
いるみたいだ。

…これはなかなか期待できるんじゃないか？

「遊…。」

「なんだ律？もしかしてこれで決定とか？はははっ…参っちゃうな。」

「よく意味分かんないから保留で。」

……………へっ？

「うん、私もちょっと…」

「期末テストのお話なんじゃないのかな？」

「えっ？これもお料理の詞なんじゃ…」

「いやいやいや！めちゃくちゃ分かりやすい詞だろ！？むしろ安直すぎて言われるか心配だったんだけど！？」

つい大声になってしまふ。

それ程までに今の評価に納得していなかった。

「『一夜漬けに次ぐ一夜漬けで乗り切った』とか『納豆とパンを手に入れる』とか意味分かんねーよ！」

「最初はまともだっただけに…」

「だから、テストの話でしょ？」

みんなが思い思いの感想を述べ、その全てが心に突き刺さる。

「もういい…やめてくれ…」

「じゃあ次は湊な。」

「はいはい。私はこれ。」

机の上で悲しみの涙を流す俺を無視して、みんな湊の書いてきた詞をみているようだ。

…俺は机に突っ伏したまま見る気にもなれなかった。

「…うん。これいいんじゃないか？」

頭の上から漣の贅辞の音が聞こえた。

「…この意味もよく分かんない。」

「これは見たままの意味でいいんじゃないかな？」

どうやら湊の詞も少し難解なものみたいだ。

でもムギはある程度理解しているらしく、唯に自分の考えではあるが詞の説明している。

「みんな気に入ったみたいだし、じゃあこれで決定な！」

おゝい、律さ〜ん。ここに確認も投票もしてない人いますよ〜。

「みなちゃん凄いや！作詞作曲みなちゃん！って書かないと！しんが〜そんぐらいた〜だよ！」

「…それ言いたいだけでしょ。それに右上をよく見なさいよ。」

気配から察するに唯がいつものごとく湊に抱きついていてるみたいだ。そういえば前に『湊の代わりに俺にやっつけてくれないぞ。』って言ったらみんなに引かれたっけ…いや、ムギだけなんか恍惚としてたけど。

「…遊君？」

「…なんでしょか？」

「これも遊が書いたのか？」

「はいはい…。俺が書きましたよ〜っと。『心理テスト』だろ？」
もう何でもいいや…

俺は突っ伏したままテキストに返事する。

「いや…この『わをん』ってやつ。」

「ああ…それも書いたけど、ボツだったから…ってはい？」ガバツ
頭を上げると溲が持っていたルーズリーフをこちらに突きつけるよ
うに見せる。

「…湊さん？どうしてこちらがここに？」

「私の書いてきた詞。」

あらまあ、あっさりと仰りますね。

「…めちゃくちゃ見覚えがあるんですが？」

「遊のボツを少し変えただけだからね。」

本当だ…微妙に変わっているし、右上には『作詞白木遊、湊』って
書いてある。

「ああ…なるほどね。でもな…1つだけどうしても言わなきゃいけ

ないことがある…」

「なによ？みんなも気に入ったみたいだからいいじゃない。」

だからそれにも俺の意見を入れてくれ…いや、今は別のことだ。

「最後の部分…どうして『燃えるよバーニング！』が変わってんだよ！」

机をダンッと叩いて、不満をぶちまけた。

「そこが一番盛り上がる所だろ！？そこを何で変えちまうんだよ！」

「普通の人には意味分からないからね。付き合いが長い私くらいしか分からない歌詞なんて意味ないでしょ？」

「そんなことないだろっ！？なあ、みんな？」

俺はいまだ『わをん』の歌詞を見ている4人に声を少し荒げつつ訊ねる。

「…この歌詞のどこにいれるの？」

「変える場所ない…よね？」

「どこに入れても意味わかんね。」

「というか湊は意味が分かったってというのが信じられないな…」

…またですか。

「もういいや…好きにしてくれ…」

「じゃあこれで決定！早速これで練習してみようぜ！」

「で、なんで漣と律は詞を見せないわけ？」

「いや、私は浮かばなかったからだけど…2曲ともメルヘンな曲にしたくないだろ？」

「…ありがと、律。」

第21話 (後書き)

最近忙しすぎて、逆に風邪引いて休む理由が欲しいです…

第22話 (前書き)

顧問編 その3

第22話

「うん、なかなか良いじゃない。まだドラムのリズムキープが不安定だったり、ギターが決まってない所があるけど、合格点はあげられるかな。」

さわちゃんはウインクをしながら片手でOKサインを出す。

「やった〜！やったね、ムギちゃん、みなちゃん！」

今日はさわちゃんと約束した日：まあ学園祭で演奏する曲のチェックをする日だった。

そしてそれも今OKを頂いたことで終わった。

「やったね、唯ちゃん！」

「律、このフレーズだけでももう少し弱く叩けない？ちょっと曲と合わないから。」

「確かに。強く叩けばいいってもんじゃないんだぞ、律。」

「べ、別にOK貰えたんだからいいだろ！ドラムは勢いだ！」

一週間休まず音楽室に通って練習した甲斐があったみたいだ。

俺達の演奏は完璧とはいえないまでも、軽音部の先輩から認められるくらいには達した。

「じゃあ俺達もお茶にするか。」

「あつ、私がやるから遊君は座つてて。」

「いいっていいって。たまにはムギ以外がしてもいいだろ？なあ、律？」

「わ、私だつてたまにやるだろ！」

「一度も見たことないけど？」

俺は御盆の上にカップを並べていく。

茶葉を入れた高級そうなケトルにお湯を入れて、茶葉が開くのを待つ間に湊用にホットココアを用意しておく。

湊曰わく『アイスココアはココアじゃない』らしく、一度ムギが気を使って出したときは少し不満ながらも言い出せない…といったことがあった。

俺から言わなかったら今もアイスココアだったかもしれないな…それはそれで面白いけど。

「おっ！今日はケーキなんだ。みんな何食いたい？」

「私チヨコケーキね。」

「あゝ、ずるゝい！じゃあ私モンブラン！」

「なにを〜！私チーズケーキ！」

女3人集まれば姦しいというが、3人以上集まるこの部室はいつも通り…いやいつも以上に騒がしく、たかだかおやつを選択だけでもこんなに盛り上がる。

「はいはい。溲はショートケーキだろ？ムギはこのタルトでいいか？」

「ああ、ありがとう遊。」

「うん。じゃあケーキは私が持っていくね。」

「だからいいってのに…じゃあ紅茶頼む。」

「はい」

嬉しそうに紅茶とココアの入ったカップを御盆に乗せて持っていく。

勿論砂糖、ミルクといったものの準備も済んでいる。

「はい、紅茶です。みなちゃんはホットココアね。」

「ありがとう…」

「おーし。ケーキもお待ち！え〜っと…唯がモンブランで…律がチーズケーキ…」

今日も軽音部恒例ティータイム。

他の部活の人達が見たら呆れる程、俺達は今まで緑茶や紅茶やココ

アを飲んできた。

まあ今日に限っては更に呆れられる要因が1つ増えている。

「それでさわちゃんがチョコな。」

「ありがとうね、白木君」

そう、今日は顧問山中先生…さわちゃんまでティータイムに参加しているのだ。

「…ってなんであなたは何の違和感もなく紅茶飲んでんだよ!？」

「今はケーキ食べてます。」

「我先にと生徒より早く選んだチョコケーキをな!」

あんた歳いくつだよ!?!…けして言わないのは本能的に危険だと感じてとっているから。

「確かに普通は叱る立場だからな。」

「さわちゃんが分かる先生で良かったね。」

「第一遊だつてこの時間がなくなるの嫌だろ?」

「…」

「そういうこと。だから寛大な私は顧問として行き過ぎたことをしないように、且つ主体性を持たせるためにこうやって仕方なく参加

してるの。あつ、ムギちゃん！お代わりお願い！

「はい！」

「めっちゃくちゃ楽しんでんじゃねーか！」

「いいから遊も座りなさい。いつものことでしょうが。」

「湊まで…あれっ？俺が間違ってるのか？偶には真面目な事発言して、白木株を上げようとした俺は間違いを犯していたのか？」

「というか遊が率先して準備始めたじゃないか…」

「明日にはそんなこと言わなくなってるしね。」

湊、湊…MMコンビは相変わらず冷たい反応を返してくる。

…まあ律みたいに見えつつかするよりはいいけどな。

「それで山中先生、一応聞きますけど、顧問として指示はないんですか？」

「うーん…そうね…ある程度は完成してるみたいだから…後は唯ちゃん次第で伸びると思うわ。」

「ふえっ？私？」

黄色いクリームを口の周りにつけながら唯はさわちゃんの方を向く。

「唯ちゃん、クリーム付いてるよ。」

「あつ、ありがとうムギちゃん！」

机の向かいからハンカチを持った手を伸ばすムギ。

そして前傾姿勢になり口周りを拭いてもらう唯…本当に子供みたいだな。

「そうね。唯ちゃんがボーカルに専念するあまり、トリプルギターが上手く合っていないもの。あつ、白木君も技術不足では同レベルよ。」

「そんな落ち込むような事、さらっと言わないでくれ！」

正直7月辺りからちょっと危ないかな、と兆候は感じていたが第三者から言われると鋭く突き刺さるものがある。

というか抜かれたりはしてないよな…

「それじゃあ特訓するか！」

「お〜！……………というわけでみなちゃん！ギター教えて！」

レスポールを湊に差し出しながら教えを請う。

「それじゃあ普段と変わらないだろ。」

「そうだな。…でも他にやること無いしな。」

漣や律の言うことはどっちも尤もだ。

こんな時に頼れるギター&ボーカルをしている知り合いなんて……
……ん？

「しょうがないわね……じゃあわた「あつ！ウチの母さんに聞けばいいんじゃない？バンドじゃギター&ボーカルやってるし、湊にギター教えたのも母さんだしな！」………」

ん？誰かなんか言ってたか？

「ああ……そういえばそうだったわね。」

「へえ、みなちゃんと遊君のお母さんか。」

「遊君とみなちゃんの………」

「確かに経験者の人に聞くのは有効な手段だな。」

よし、それじゃあ早速電話して……

「おら……っ！お前ら……！！私を無視すんじゃないわえ……！！」

「「ひい……！！?」」

「……どうしたんですか、山中先生。」

い、いきなり叫ぶんじゃないよ！

漣（と俺）がビビるじゃねえか！

「私が唯ちゃんを特訓してあげる！って言ってるの！」

「…そんな事言ってたか？」

「…私は聞いてないわね。」

「…たぶん遊君が話してたときだと思う。」

「何コソコソ話してるのかしら。りっちゃん、みなちゃん、ムギちゃん？」

そりゃこんな怪物にメンバーを預けて良いか、の相談だろうさ。

「…つーかさわちゃん出来るのかよ。」

「ふっふっふっ…何を隠そう私は元軽音部のギター&ボーカルだったのよ！」

「ああ、これでしょ？」ポチッ

『お前等が来るのを待っていた……!!』

「……っ！？それを再生するのは止めるっ！」

どっから取り出したか分からないラジカセのスイッチを律が押すと、聞こえるのは魔王の雄叫び…もといさわちゃんの叫び声。

「あれ…？遊君はもしかしてこれが怖いのかな？」

「めちやくちやくこえ〜よ！なんでそんな化け物ボイス聞かなきゃならないんだよ!？」

「ごめんなさいね〜、化け物ボイスで。」

なんかさわちゃんが不機嫌そうな顔をしているが、それよりも自分の身を…って余計に危うくなってないか？

「任せなさいって。私が唯ちゃんを完璧に育ててみせるから。」

「なるほど…太らしてから食べる気だな…」

美味しくなった所をガブツと…

「白木君？あとで話があるんだけどいいかしら？」

「全力で遠慮させてもらいます。」

「まあまあ、遊。とりあえず先生に任せてみよう。」

「そうだぜ！なんだかんだ言っても顧問なんだから、ちゃんと教えてくれるって!」

そうだよな…さわちゃんだって一応人間なんだし、顧問なんだから…

「もう…それじゃあまずは歯ギターから…」

「いえ、それは無しで。」

「…本当に大丈夫なのか？」

「…たぶん。」

「もう文化祭3日前だけど…唯の奴どうなんだ？」

唯が部室に顔を出さなくなってから1週間…俺達は普段と変わらず練習前のティータイムを楽しんでいた。

「この前メールした時は元気そうだったけど…」

「やっぱりさわちゃんに食われたとか…」

「遊はさわちゃんの事なんだと思ってんだよ…」

「そりゃもう恐怖の対象としか…」

「でも『さわちゃん』って呼んでいるから、仲間として認識はしているみたいよ。」

ボソッと…だがハッキリと口にする。

「そんな事どうでもいいだろ！…それより唯はどんな感じなんだ、湊？クラス一緒なんだから話くらいするだろ？」

「この頃教室でも話さないから分からないわね。唯ったら休み時間まで練習してるから。」

授業が終わるとすぐさま音楽室に向かい、山中先生とマンツーマンの特訓をしているみたいだ。

その所為で授業に遅れることもしばしば…廊下に立たされる回数も増えていた。

「唯のやつ、頑張ってるんだな…」

「私達も頑張らないとな！」

「よっしゃ！俺達も練習するか！」

「うん！それじゃあ早速合わせてみませんか？」

ガタガタと椅子から立ち上がる音が響き、みんなが楽器へと近付いていく。

ガチャツ！バンツ！

その時勢い良く部室のドアが開けられた。

激しい音に驚き、一斉にそちらを見るとそこには…

「待たせたわね…完璧よ…」

自信満々の表情を見せる山中先生と…

「さあ、唯ちゃん…見せてあげなさい！」

目を輝かせながらギターを握る唯がいた。

準備をしていた全員の手が止まる。

そして山中先生の合図を受け、ギターをかき鳴らす。

）
）
…

「」「」「おっ！」「」「」

「すげえ！」

「上達してる…」

「自信に満ち溢れた表情！」

「そしてこつちには自信を砕かれた表情。」

「唯に抜かれた……」

今弾いているのは『ふわふわ時間』…確実に唯は上達していた。

これなら更に良い演奏に…

「ぎみ〴〵をみ〴〵でる〴〵ど、いづもはーどどむれどど…」

「「「ええっ!?!」」」

「ああ…悪魔に魂を売ったばかりに…」

「ただ喉が枯れてるだけでしょ。」

凄く聞き取りづらい歌声が部室に響いている。

「テヘツ 練習させすぎちゃった!」

「こえゝ かれゝ ちゃっだ!」

「可愛い子振ってもダメだ!」

ペロツと舌を出し、某ぺ ちゃんみみたいな顔をするバカ2人。

そのバカsに勢い良く律がツツコミをいれた。

「それじゃあ学園祭はどうする?」

「流石にこの声じゃボーカルは…」

「…しょうがないじゃないから、漫遊、任せたわよ。」

「「えっ!?!」」

突然の指名に2人とも驚嘆の声を上げる。

「しょうがないじゃない。時間がないし、歌詞書いた2人なら覚え

る必要ないでしょ？」

尤もなことを言っているつもりなのだが、たぶん漣の事だから…

「わ、私には無理だっ！」

って言うと思ったわよ。

「ボーカルなら律とかムギとか…湊だつて大丈夫だろ!？」

「2人は知らないけど、私は無理ね。ただでさえギター2人のお守りしながら演奏しなきゃなんないのに、ボーカルまで出来ないわよ。」

…というのは建て前で、実際はあの歌詞（漣作）を歌いたくないから。

女の私でも恥ずかしくて歌えないのだから、男の遊には更につらいものがあるだろう。

だからわざわざボーカルを曲によって変えているのだ。

漣も1曲なら最後にはOKする…いやさせる自信もあるしね。

「それなら他の人に…遊！」

「遊は無いだろ、漣…」

明らかにテンパっている漣。

もう自分が歌わなければ何でも良さそうね。

「…んね、みおちゃん…」

「えっ…」

「唯…」

ボソボソと濁声が聞こえ見やると、涙をボロボロと流す唯の姿があった。

「やりだぐないの…わたしのせい…ごまらせ
ちゃっで」「ぐずっ

「唯ちゃん…」

自分の所為でこんな騒ぎに…

自分の所為で涙が困って…

自分の所為で…

今の唯はきつとドツボにはまったように、ネガティブな思考をしているのだろう。

なんでもかんでも自分の所為にして、全てを背負い込もうかと…

「…なんでこう唯は何でも集中させすぎちゃうのかしら。」

期末テストの時はギターの練習に…

山中先生が顧問になってからはギター&ボーカルの練習に…

そして今はこの場の責任を…

集中しすぎてしまつから期末テストの時は追試…

ギター&ボーカルの練習では喉を潰し…

そして今回は…自責の念で精神を追い込んでいる。

「……」

部室には顧問を含め7人の人間がいるのに、聞こえるのは1人の泣き声のみ。

今この場を治められるのは1人しかいないだろうし、その人が動くのを待つしかない。

…そして私はここで唯の勝ちを確信した。

「唯。」

泣きじゃくって目を真っ赤にし、瞼を腫らした唯に溲が近付いていく。

「ほらっ、酷いことになってるぞ。これで顔拭いて。」

そっと取り出されたのはハンカチ。

それでも泣きじゃくり続けハンカチを受け取らない唯に、漣は強引に唯の顔を持つているハンカチでグイグイと拭いていく。

「みおちゃん…」

「ボーカルなら私がやるから…唯の所為じゃないから…」

止めどなく溢れてくる涙を出来るだけ拭いた漣は、そのまま唯に抱きつき頭をゆつくりと撫で始めた。

そこでようやく唯の涙が一時停止する。

「これはみんなの…軽音部全体の問題なんだ。唯1人が背負うものじゃないぞ。…だから私と遊がこの件はなんとかする。」

「俺は決定なのね…」

「いいから黙ってるって!」「シー」

「唯は今までさわ子先生と練習してきたギターを完璧に演奏してくればいい。…出来るか?」

「うん…うんっ!」

ただ抱きつかれていた唯が漣の腰に手を回して、2人して抱き合う形になった。

どうやらボーカルの件は解決したみたいだ。

「それじゃあ早速練習しようか、唯。本番まで時間がないぞ。」

「うん！」

「よっしゃ〜！私達もやるぞ〜！」

「お〜！」

そこで途中だった楽器の準備が再開される。

今は一回でも多く練習した方がいいし、それにこの流れを無駄にしない。
たくない。

漣がやる気を見せているうちに、より完成型に近付けないと。

こうしてボーカルを漣、遊に変えた私達の運命の初ライブは1日1日と近付いていった。

「でも俺歌詞覚えてないんだけど。それボツ作品だったし。」

「じゃあ今から15分で覚えなさい。」

第22話（後書き）

というわけでボーカルは2人に決定しました。

『わをん』を書き終わってから気付いたんですが、歌詞に『僕』って一人称を使いまくっていたので、しょうがなく遊君に頑張ってもらうことに…

まあ別に大差ない展開なんで気にしないでいこうと思います。

それではまたっ！

第23話(前書き)

文化祭 その1

第23話

カチャリ…

部室にカップと皿がぶつかる音が響いた。

いつもは騒がしくて殆ど聞こえないような音が今日は隅々まで聞こえる。

チュンチュン…

窓の外では雀らしき小鳥が餌を求め、こちらに向けて鳴き声をさえずっている。

普段の甘い香りに釣られた小鳥にムギがエサを上げ始めた日から、こうして集まってきてはエサを請うようになったのだ。

俺はムギが買ってきた小鳥用のエサを、紙皿の上に出して窓際に置く。

ガチャン…

窓を開けると小鳥達は嬉しそうに中に入ってきて、真っ先に紙皿へと向かっていく。

ドクツドクツ…

これは心音…といっても自分自身の感覚としては、そこまで緊張しているとは思えない。

手のひらを見てみても、異常に震えていることもないし…

ああこれはたぶん…

「それでそろそろ落ち着いたか、溼？」

小一時間机に突っ伏している目の前の女の子から聞こえているもの
なんだろう。

「うっ…イヤだよ…」

2人きりの状況で泣かないでもらいたい…まるで俺がいじめている
みたいだから。

今日は学園祭当日…そんな時、俺と溼は2人きりで部室で紅茶を飲
んでいる。

他のみんなは全員クラスでの出し物があるため、部室にはまだ来て
いない。

本来なら俺達2人にもクラスでの役割があつたのだが、律の『こい
つら当日ボーカルするから勘弁して！』という気の利いたことを言
ってくれたお陰で、こうして部室でサボっ…いや、練習が出来るの
だ。

ちなみに今やっているのは精神統一です。

「なんで遊はそんなに落ち着けるんだよ…」

「いやいや、見た目以上に緊張してるぞ？」

「…ぜんぜん見えない。」

「まあライブ自体は初めてじゃないしな。」

「っ！？ズルいぞ、遊！」

「何が!？」

「私はこんなに緊張してるのに…ああ…立ちたくないよ…」

澪は再びぺたんと机に突っ伏す。

「ほらほら、そんな事言わないで笑って笑って！スマイル！にかっ

「…遊が歌ってくれるなら笑う。」

「よし、練習するか。アンプ繋げても迷惑になんないかな？」

「白状もの！！」

いや…あの歌詞は無理だつて。

「ああ…あと3時間18分27秒で始まっちゃう…もうすぐだ…」

「カップめん50杯くらい食えるんじゃないか？」

そう考えたらめちやくちや時間あるな。

「…正確には66杯。」

「最後の1杯は27秒で食うのかよ!？」

作るのは3分でも食べる時間はそこに無いからな!

「…ぷっ…くすくす…」

…なんかツッコんだら溇が急に笑い出した。

緊張のあまり頭のネジぶっ飛んだんじゃねーのか?

でも泣いて愚図ってたさっきよりはいいのかな。

「ちょっとはマシになったみたいだな…」

「くくくっ…えっ?何か言った、遊?」

「べ〜つに。溇と最初に話した時はマジで苦労したな〜、って思い出してただけ。」

「あ…あの時は、し、しょうがないだろ!遊がどんな男の人か分からなかったんだから…」

「そんな俺だって溇の事分かんなかったんだから変わんねーよ。」

それだから溇がビクビクする度に、俺のガラスのハートは輝入っていったんだぞ。

「それは…そうだろうけど…」

「まあ今ではこんなにも俺のこと信頼してくれて…もう結婚するしかないな。」

「ひゃっ！？な…なにを…」

「よし、それじゃあ婚前旅行に行くぞ！ほらほら、立った立った
〜！」

「…／／／」

漣の手を引つ張り、2人仲良く部室から出て行く。

漣は時折見える耳まで真っ赤にして、俯いたまま黙ってついて来る。

…いつ『まあ冗談はこのくらいにして…』って言い出そうかな。

「はいはい！スリル満点驚天動地のお化け屋敷！一度入ったら腰を抜かして入って来れないくらいの恐怖を味わってみませんか。」

「こゝが伝説の魔境なのか…」

「おゝ、勇者シラキ！それに遊び人アキヤマもいるじゃないか！」

「なんで私は遊び人なんだ！」

「大丈夫。いずれ賢者に転職させてやるから。」

「…いつたい何の話なんだ？」

「それで2人何してんの？デート？」

「…っ！…！」

「あゝ…今その話題はタブーの方向で。」

「そっぴやなんでこっちの頬赤いんだ？」

「ちょっとタブーに触れたからかな。それは置いといて、俺達は律達の様子を見にきただけだよ。一応俺達もこのクラスのメンバーだし。」

ついでにクラスの男子共にちよっかい出しておきたいしな。

「結構繁盛してるんだぜ！評判も良いみたいだしさ！」

「へゝ。ムギはクラスに馴染んでるか？」

今ムギはお化け役でこの教室内にいる。

『軽音部で出来た穴は軽音部で埋める』という事で、比較的暇のあるムギが俺達の代わりに手伝ってくれている。

「もう最初から同じクラスの奴、みたいに楽しそうにしてるよ。まあ偏に私のお陰かな。」

「まあムギならそういう点は問題ないだろうな。漣ならともかく…」

「いちいち私を引き合いに出すな！…私だって人付き合い上手くないんだ…」

人差し指に髪をくるくると巻きながら、少し落ち込んだように話す漣。

他人を前にして身動きが取れなくなる自分に嫌気がさしているのかもしれないな。

「まあまあ。その辺は律がカバーしてくれっから、少しずつ慣れていきゃいいんじゃない？」

「そうそう。漣にはこの遊が付いてるだろ？お金に困ったら、いつでも頼っていいんだぞ？」

「俺は闇金かよ！？」

「…とりあえず私を押しつけ合うな！」ポカッ！ポカッ！

「ははっ！悪い悪い！」

「全く…2人はもつとちゃんとした方がいいぞ。」

「あらあら、ワタクシ達がちゃんとしてないと言ってますわよ、田井中さん？」

「本当ねえ、白木さん。こんなにワタクシ達はお上品なのに…ねえ？」

身体をくねくねさせながら、自分の考える上品さをアピールしていく。

お化け屋敷に並ぶ行列が少しばかり短くなった気がするが気にしない。

「はあ…仕方ないな。しょうがないから私が2人の分までちゃんとしておくよ。」

「『だから離れるなよ…』ってか？」

「おゝ、澪ちゃんカツコいいこと言うね〜！」

「~~~~っ!!!／／／」ボカツ！ボカツ！

「「ぎゃっ!」!」

「バカな事言っでないで、早くムギの様子も見に行くぞ、遊!」

「あつ、待て、澪…: すいません、ちょっと先入らせてもらいますね。おゝい、みお〜!」

行列の一番前に並んでいた人に礼をしつつ、俺は澪を追うようにお

化け屋敷に入ってしまった。

「はい、2名様ごあんなうい！」

バタツ「きゃっ！」

ギィ「ひいー！」

ドンドンドン「いやー！」

…

「はあっ…はあっ…はあっ…」

「大丈夫か、漣？」

「もう…無理…」ガクガクブルブル…

ムギに会うために勢い良く入るまでは良かったのだが、やはり怖いものは怖いらしい。

1つ1つのドッキリポイントに律儀に驚き、涙を浮かべながらゆっ

くりと歩いていく（正確には引きずられていく）。

今では俺の手をガツチリ掴んで離してくれない。

男としてはかなり嬉しいイベントなのだが、それを帳消しするかのよに俺の左手に爪が食い込んでるので、手を離れた後ギターを持てるかどうか、でドキドキしている。

「つゝかムギいねーな。」

「…」

「もう半分は進んだけど…最後の方なんかな？」

「…」

「おっ、この辺ってたしか壁から手が出てくるんじゃないか？ 透、気をつけるよ。」

「っーうん…」ギョッ

「バンッ！」「ひいゝ！！」

「いや…出るって教えてだろ…」

「…ぐすっ。」

今になっては雑談は完全に無視。

前日の手伝いの時に見たドッキリポイントを教えた時だけ返事をす

る。

そしてそれも意味なく驚き、また涙ぐむ。

さつきからこれの繰り返しだ。

まあ今は左手じゃなく左腕に抱きついているので、痛さといい役得といいさつきより全然マシだから会話を無視されるくらい許容しよう。

「たしかここで最後だったよな。そのロッカーから白装束きたクラスメート、が出てくるぞ。」

無駄だとは思うが、クラスメートを強調しておく。

「う…うん…」ギョッ！

俺達は1歩1歩光が射す出口へと向かう。

しかしそこにいくにはロッカーの横を通らなければいけない。

「ほらっ、俺が付いてるから…それなら大丈夫だろ？」

溲に出来る限りの笑顔を見せながら頭をポンポンと叩く。

こんなんでも少しは落ち着いてくれればいいな。

湊なんかは結構落ち着いてくれるからな。

溲は叩かれていた頭を上げ、俺の顔を見る。

腕に抱きついているので予想以上に顔と顔の距離が近い。

「……………漣？」

滲ませた瞳で俺の両目を射抜く。

気付けば2人の脚も止まっていた。

漣の校内でも上位だと噂される美貌が近くに…

溜まっていた唾をゴクリと胃へ落とす。

これってもしや『つりばし効果』ってやつなのか！

「大丈夫だって。俺が…」

「今…何か言った？」

…

…

聞いてなかっただけかよ！？

…まあ横でガクガク震えるあの漣がいきなりそんな事言うはずないよな。

「急に黙らないで…」

「ああ、わりいわりい。もうすぐゴールだけど、あのロッカーから出てくるから気をつけるよ、って言ったんだよ。」

「うん…分かった…」ギョッ

ゴールという言葉で少し目に輝きが戻り、足取りも少しだが軽くなつたみたいだ。

俺達は再び1歩1歩歩き出し…

「バアッ！」

「キヤ~~~~~!!!」

それを止めるように、俺達の背後から白装束が脅かしてきた。

「…ムギ？」

「あれ？遊君は驚かないんだ…残念。」

「顧問やキレた湊に比べれば不意打ちなんてどうってこと無いからな。」

「……」

「湊ちゃん？ごめんね、驚かしちゃって。」

「無駄無駄。もう気絶してるから。」

左腕には固まった湊…それでも腕を抱く力は全く変わらないのが凄

いところだな。

「あらあら…2人とも仲良いのね…」ぽく

「そんなに代わって欲しかったら、漣連れてもう一回入れればいいぞ。」

「私は見るの専門なんで。」

「専門ってなんだ!？」

袖で口元を隠しながらくすくすと笑うムギ。

せつかくバツチリ決めたメイクも台無しになるほどの愛嬌を感じた。

「あれ?遊さんの顔、ほんのりと赤くなってませんか？」

「強烈な右フックだったからな。」

「?」

「それより、やっぱり俺達が来たから急遽後ろからにしたのか？」

「うん!りっちゃんに『精一杯驚かしてやれよ!』って言われたから頑張っちゃった!」

「いや〜頑張った結果、漣は大満足で帰れるな。」

「ふふっ…そうみたい。」

「それじゃあ俺達は湊達に会いに行くわ。ほらっ行くぞ、湊。」ズ
リズリ

「いってらっしや〜い〜」

やはり幽霊？に似つかわしくない声と笑顔で俺達を見送ってくれた。

第23話（後書き）

一週間ぶりの投稿…

でも次はもっと間隔が開きそうな気がします…

しばしお待ちを！

第24話(前書き)

ひさしぶりの更新です！

お待たせしてすみませんでした！！

第24話

「おっつす！お待たせ〜！」 「お待たせしました〜！」 「お、まだせ〜！」 「……………」 ガチャ

「おっつす。お疲れさん。」

「ちゃんと練習してたか〜？」

「『ふわふわ時間』の方は何度もやったから、まあ大丈夫なんじゃねえかな？」

手に持っていたギターを横に置く遊。

練習していたのは本当みたいで、部屋に来るまでギターの音や歌声が聞こえていた。

「みお、ちゃんもな、んだがおぢづいでるね〜！」

「そうね〜！はい、紅茶よ、漣ちゃん！」

「ありがとう、ムギ。…まあ私も子供じゃないんだから、流石に覚悟を決めたさ。」

漣は両手でしっかりとカップを受け取る。

「…漣無理してない？」

「…やっぱ分かるか？」

あんなに余裕そくな表情しながら…

カチャカチャカチャカチャ……

とカップとソーサーを何度もぶつけていれば、誰にだって分かるだろう。

「まあそれでも逃げ出す気は無いみたいだぜ。やっぱり唯の事を気にしてるみたいだからな。」

「そつ…」

だから余裕ぶってるのね。

ここで『嫌だ!』なんて言い出したら、また唯が自分を追い込んでしまう事が分かりきっているから。

「よっしゃ!それじゃあ早速合わせて見ようぜ〜!」

「お〜!」

流石に本番当日ということもあり、ティータイムもそこに練習に繰り出す。

といつてもただ確認の為に、2、3度合わせるだけ。

それ以上根詰めても今更上達はしないし、何よりライブで使う体力が無くなってしまふ。

『ふわふわ時間』、『わをん』と本番のつもりで演奏し、後は待つばかりだ。

「お〜、漣、ちゃんと歌えてんじゃん！」

「あ、当たり前だ！ちゃんと練習してたんだからな。」

「何度も『これで大丈夫か！？』って俺に聞かせたんだ。それくらいやってもらわなきゃ、ひっかき傷が出来るくらい痒くなった背中も報われねえよ。」

「だから『ふわふわ時間』しか練習してなかったのね…」

話によると最初は緊張のあまり、ボソボソ歌ったり歌詞を忘れてたりとひどかったらしい。

私達が見ていない所で、漣も遊も頑張っていたようだ。

「遊さんも上手だったわよ！」

「ありがとう〜ムギ〜！お礼に抱きついてやるうー！」

「止めなさい、発情期の犬。」ゲシッ！

発情した犬には容赦なく蹴りを入れる。

犬はキヤイン！と泣きながら部屋の角へと逃げていった。

「みな、ちゃんがあれで…」

「湊も緊張してるのか」

ニヤニヤと笑う部長はひたすら無視する。

「でもなんとか形になったな。あとは精一杯頑張れば…」

「まだ出来上がってないわよ！」ボタン！

「…さわちゃん。本番前は関係者以外立ち入り禁止だから、帰った帰った。」シツシツ

「私は顧問です！それより……じゃ～ん！衣装作って来ました～！」

なんの前触れもなく、いきなり手に持っていた袋から取り出したのは、白、黒の丈が短いドレス。

「いや、誰も頼んでないし。」

「なによ～、顧問としてステージ衣装を用意してあげただけでしょ？」

「学生服でいいんじゃない？」

「そんなの可愛くないからダメに決まってるでしょ！」

「…さいですか。」

この人の相手はさぞかし疲れそうだ。

遊に任せて私は引っ込んでいよう。

「嫌つすよ、そんなん着て歌うのなんて。第一それ女物じゃないっすか。」

「勿論白木君用も用意してるから！じゃ〜ん！」

今度取り出されたのはタキシード風の衣装。

∴ 5人の執事ってことなのかしら。

「帰れ。」

「もちろんワックスとかも持ってきたから、髪型も「帰れっ！！！」

「あゝ、遊の奴めちやくちやイライラしてんな。」

「まああの服を着なくて済みそうだな。」

やっぱり澁は嫌だったらしい。

ホッと胸をなで下ろしている。

「もう制服でいいじゃない。こんなにみんな嫌がつて…」

「わゝあゝ！これ可愛い〜！〜！」

「本当！唯ちゃん凄く可愛いわ！」

……………あの2人は見なかった事にしよう。

「とにかく俺は絶対着ないからな！」

「いいえ！一人男性がいないと絵が引き立たないでしょ！」

「結局引き立て役かよ、ちくしょー！！！」

「遊君！絶対似合うから着てみてよ！」

「わだしがらもおねがい！」

「四面楚歌！？しまった…敵は味方になりすまして…」

はあ…もうアホらしい。

「先生！止めてください！遊が嫌がつてるじゃないですか！」

そこでようやく澁が立ち上がる。

「それにそんなの遊じゃなくても恥ずかしいです！」

澁が言うと物凄く説得力あるわね。

きつと物凄く嫌だから、うるさいくらい大声を出してるんでしょ
し。

「澁…良かった…俺にも味方が…」

「じゃあ私のお古だけど、学生時代に使ってたやつを…」

「やっぱりそつちが着なくなっちゃった！」

「謀反!？」

最悪の出来事だけは避ける、と選ぶ湊。

別にコスプレは決まっていんだから、強気で断ればいいのに。

「…おい、湊。コスプレが決まっちゃうぞ?」

「軽音部について考えるのが面倒くさいから、決まった結果に従うわ。」

「……………その他人行儀なところは湊の欠点だよな。」

「そうね、田井中さん。」

「みんな、そろそろ時間だから講堂にむかつとするかっ!」

取りつけられた時計の長針がてっぺんを刺したのと同時に律がガタつと勢いよく席から立ち上がる。

「っっ!?!?!?!」

「よっしゃ、俺のワンマンライブが始まるんだな！」

「遊、一人で演奏したかったらその辺の公園にでも行って子供たちに聞かせてあげればいいじゃない。」

「ふっ…まだ子供たちには俺の高等な歌詞の意味が理解できないだろうからな…駅前にしとくわ…」

その掛け声を聞き、俺は戯言を吐きながらギターケースを肩に背負いアンプを片手で一つずつ持った。

「ふん…！…おもいよー！」

「唯ちゃんは無理しないで一つずつ持って行ったほうがいいみたい。」

もうすぐ俺たちの出番がやってくるということで、講堂までギターやらアンプやらを運ばなくてはいけない。

なんでも演劇などの小道具などで講堂裏もなかなかの混雑が見受けられるらしく、前日にアンプだけでも置いておく…なんてことは生徒会からのお許しが出なかった。

「遊、ついでにドラムセット何個か持って行ってくんない？」

「両手ふさがってんのが見えないのか！」

「首に引っ掛けてやるからさー！」

「今度は殺す気か！」

そしてドラムセットなどどうしても一回では運べないものもあるの
で、何回か音楽室と講堂を往復しなければならぬ…はあ…

「もつと楽な方法ないのかよ…」

「それじゃあさ、窓から落とすから遊がそれを下でキャッチすると
かは？」

「だから殺す気か！」

しかも俺以外の部員が全員女の子なのだ。

そのためこうして漣の分のアンプを持ったりしているのだ（あとは
落としたりしないか心配なので…）。

（せめてもの救いはムギが鍛えていてくれてたおかげで少しは往復
する量が減ったことかな…）

一度講堂まで運んだ後、女の子部員は着替えがあるためそのまま更
衣室へと移動することが多数決で決まった。

その間に男の子部員が余った物を運んでくる手筈となっている…よ
うは俺が全部持つてくるっていうことなんだけどな。

俺にも一応（嫌々ではあるが）着替えが用意されているので、それ
に着替えるためにも音楽室へと戻らなければいけないのでちょうど
いいって言えばちょうどいいのだが…

（絶対湊のやつそこまで考えて提案したよな…）

一回着替えの話をしてから物搬の手筈について話し始めたのだから間違いないだろう。

しょうがないので一人で…でも時間の関係もあるため比較的急いで着替えを済ませ機材を運んでいく。

すべてを運び終えたころには首筋にうつすらと汗をかき、少し息が上がっていた。

そんなことは我関せず…といった具合で楽しそうにひとつ前の演目である演劇に見入っていた女の子部員にはこの苦労は分からないだろう。

「おい…運び終えたぞ…」

「あつ、おつかれ〜。」

…とりあえず一発殴っていいよな？男女平等だよな？

すべてを無事終えた俺に対するご褒美は何もないんかい！

湊を除く全員が黒か白を基調とした服を着たまま、舞台袖からステージを眺めている。

実際3分前から到着していた俺に気付いていたのは湊だけで、後の4人は俺が話しかけるまで誰一人俺のほうを向くことはなかった。

…やっぱり一発殴っても…

「ありがとう、遊君。はい、これ買っておいたの。」

強く握りしめたこぶしをいざ茶髪頭に振り下ろそうかと言ったところで、横から青色の缶ジュースが渡される。

「スポーツドリンク…わざわざ俺のために…ありがとう、ムギ！」

近くにいた天使からのご加護により俺の怒りゲージは急降下していった。

「やっぱりムギは気がきくな〜！どっかの誰かとは大違いだぜ！」

「でもそれを買うのを提案したのは律よ。」

「へっ？」

湊が言うことについて俺は間抜けな声をあげてしまう。

律が…俺のためにジュース？

律のほうを見ても全く顔を合わせようとはしないで、演劇のほうを集中してみているため真偽はわからなかった。

その律の奥には必死の形相で役に入り込む演劇部の生徒たちの姿が見えた。

…そういえばこの演劇終わったら俺らの初ライブなんだよな。

「湊、これってあとどのくらいで終わりそうなん？」

「さあ？私が知るわけないでしょ？」

「この演劇部の時間が後5分くらいだから、軽音部は今から約7分後の出番です。」

スポーツドリンクに口をつけながら、隣に立っていた黒を基調とした衣装…いわゆるゴスロリ湊に話しかける。

しかしその質問の答えが返ってきた方向は隣からではなく後ろ。

くるつと後ろを振り返るとそこには眼鏡をかけた女子生徒が何かしらのファイルを持って立っていた。

「和、こんなところで油売ってていいの？」

「これが仕事なのよ。」

顔見知りのない子に話しかけられて、どうやって話を盛り上げてメアドを聞こうか考えている際に横の湊が先に話しかけていた。

「えっと…お知り合いさん？」

「はじめまして、私は湊と同じクラスの「わざわざこんなやつに挨拶しなくてもいいわよ。」…もっとお兄さんにやさしく接しなさいよ。えっと…申し遅れました。真鍋和です。白木遊…さんでよろしかったですでしょうか？」

「ああ…これはご丁寧に…白木湊の最愛の兄こと白木遊です。どうぞよろしく。」

湊の茶々にも負けずしつかりとあいさつしてくれた真鍋さんはきつ
といい人なんだろう…

「きつと真鍋さんには軽音部が苦勞かけてるんでしようね。唯と
か湊とか」

「それはもう…」

「私はかけられているほうよ。」

隣から何か聞こえるが気にしない。

もう俺の中では真鍋さんはめっちゃくちゃいい人！という認識がされ
てしまったのだから。

「えっと…ここにいてことは真鍋さんは演劇部の方とか？」

「私は生徒会としてステージの裏方に来ています。こうして時
間の調整とか…そうしないと発表に熱が入りすぎて時間を大幅にオ
ーバーする団体も出てくるので、ここでこうやって終了5分前には
合図を出すように指示されているんです。」

そういつて真鍋さんは黄色のプラカードを舞台に向けて掲げた。

舞台上の生徒がちらりとこちらを見たのが確認できた。

「なるほどねえ、そんな決まりがあったんか。」

「私もここに来るまで知らなかったわ。」

「部長会で言ったはずなんだけど…」

なるほどそれなら伝わっていないなくても納得できるな。

なんせうちの部長はあのチンパンカチューシャなんだから。

「それじゃあ軽音部の方々ももうすぐ準備なので、用意お願いします。」

そういつて真鍋さんは近くにいた女子生徒のところへと離れて行った。

なにやら話があったらしく、ここからは聞こえないが何か入念な打ち合わせをしているようだ。

「よし、それじゃ初ライブ頑張りますか、湊。」

「…そうね、遊。」

俺たちはこぶしを作ってこつんとぶつけ合う。

舞台上の物語が終幕を迎えたとき、それが俺たちの第一歩になる。

舞台上に集中する女子4人を呼んで、円陣やらなんやらをしたらもうそこには俺たちの会場がある。

少し湿った掌に空調が当たりひんやりとする。

ハンカチなんて常備していない俺は来ていたタキシード服の裾でそれをふき取った。

…そして大歓声の音とともに幕が静かに下りていった。

第24話(後書き)

次回ようやく本番になります。

出来ればすぐ更新しますので、少々お待ちください。

第25話(前書き)

…明けましておめでとございます。

文化祭その3です

第25話

シールドをアンプに差し軽くストロークする。

小さく音が響くと幕の向こうからざわざわと人の話し声が聞こえてくる。

そこまで大きいとは言えない舞台上の上にたった6人といえど、楽器やらコードやらが人数分並ぶとそれはもう手狭になってしまい、確認のために歩き回るとついぶつかったり足を引っ掛けてしまいそうになる。

「澁く、準備できたか？」

ドラムの位置の確認をしながらベースを持ちつつずっと深呼吸を繰り返している澁に話しかける。

「だ…だい…じょ…ぶ…」

「絶対大丈夫じゃないだろ…」

先程まで演劇部の演技に心奪われていた澁も、今は膝をがくがくと震わしている。

今思えばあの心奪われていた澁は一種の現実逃避だったのかもしれない。

それでも必死に一人で何とかしようとしている澁は本当に頑張っていると思う。

その姿に俺たちの士気は格段に上がる。

特に唯はかなり影響を受けているようで、ふんすっ！と意気込みが聞こえてくるくらいだ。

それぞれが目の前に控えている本番（お客さん）の雰囲気をはしひしと感じ取っていた。

いつもは軽口を叩く律ですら緊張した面持ちだ。

相変わらずなのは…こういう雰囲気慣れてる湊だけだろうが、如何せんリーダーシップを発揮して、みんなの気持ちをまとめあげる…なんてことするはずもなく、1人準備を先に終え舞台袖にいる真鍋さんと何か話しこんでいる。

ここで湊の立ち位置を舞台袖近くにしたことを後悔する。

ど真ん中にしておけば…いや、状況は変わらないか。

「ゆうぐん。準備できたよ。」

「遊君、私も大丈夫よ。」

「私もバッチリだぜ。」

右後方で話している湊を気にしていると、今度は左方から準備完了の聲がかかる。

白、もしくは黒を基調としたドレスを身に着けた女の子がこちらへ

と視線を送る…なんか変な気持ちになるな。

「オツケー。よし、漣。もう本番始めるからな。」

俺は隣に立つ漣の肩をポンと叩く。

たったそれだけのことなのに、漣はやたらと驚いていた。

「おしつ、それじゃあ漣。何か一言。」

「…なんで私が…まあいいわ。…律、リズムキープ気を付けるように。」

「なんで私だけそんな事言われなきゃなんないんだよ！」

…ざわざわ

「ほらっ、お客さんに聞こえるでしょ。少し静かに。」

「…あとで覚えてやがれ…」

ボソツとなんか物騒な事が聞こえたが、とりあえず今は本番だ。

早めに済ませよう。

「それじゃあ…漣、あなたが律を支えるの。良いわね？」

そこで漣は1人ガクガクと震える漣に目を向ける。

弱いところを攻める…という訳ではない事を祈る。

「えっ…」

「あと歌も頑張つて。お客さんにとってあなたが中心なんだから。」

漣の立ち位置…右には俺と湊、左には唯、ムギ、律と並ぶ…唯と2人で一步前に出ている位置。

客席から見たら間違いなく2人がメインのバンドに見えるだろう。

「漣が弾かなきゃ画が映えない。漣が歌わなきゃ誰も演奏に乗ってこない。」

「あっ…あっ…」

「漣が何もしないだけで、私達の演奏は失敗なの。」

幕の向こう側を気にしてか普段より低く小さく話す湊の声はやけに冷たく感じる。

「おい、湊。そこまで言わなくても…」

「そ…そうよ、漣ちゃんはきつと出来るわ!」

ざわざわ…

ムギの位置から一番遠くにいる湊に話しかけるには大声が出るのは仕方ない事だが、ムギの音量が増したのはそれだけが原因ではない。

ようは漣を守りたいのだ。

見て分かるほど緊張し、この雰囲気嫌がっている漣がここまでしているのだ。

だからそんな酷なこと言わないで…と。

俺はそんな一触即発の様相を呈する場に介入することはなかった。

だって俺は知っているから…

「ぞうだよ、みなちゃん！み、おちゃんなら…」

湊は周りが思う以上に周りを大切にしているやつだと。

「何を勘違いしてるの。ムギ、唯、あなた達もよ。」

ざわざわ…

「私達の誰か一人でも手を抜いたら、それは会場のお客さんに気付かれてしまう。ムギが何も弾かず、ただボーッと突っ立ってたらダメでしょ？唯がつまらなさそうにギターを弾いていたらお客さんも楽しめないでしょ？どう、漣。言ってること間違ってると思う？」

「…いや…正しい…と思う…」

気のせいかな漣の身体の震えが少し落ち着いてきた気がする。

それにしたってマグニチュード7から6に下がった程度だが。

「…ここで私から一ツアドバイス。」

ピンと人差し指を伸ばす。

凄く湊に似合わない動作だが、それは本人も自覚しているみたいで少し顔が朱い。

「ライブではミスが当たり前。だからミスは笑い飛ばす。…それがコツ。」

話し終わると真鍋さんの方を向き、目線を配る。

それを合図にしたか、前方の垂れ幕は徐々に上がっていった。

「全員が今出来ることをしましょ。それがベストなんだから。」

軽音部全員の視線を集めていた湊は1人前を向く。

俺達が今日演奏を聞かせるお客さんを迎えるように。

「チツ…カツコつけやがって…そういうのは俺の役目だろ…」

俺はいつものように鋭い視線をして前を向く湊に倣って、両脚を軽く開いギターを構え直した。

4人も突然の開幕に咄嗟に反応し、それぞれの準備を済ませた。

幕はどんどんと上がっていき、続いて視界がどんどんと開けていく。

幕が上がりきるか、といった所ではば満員の客席から盛大な拍手が起こった。

もう後には退けない…湊の台詞じゃないが、自分達の今出来るベストを示そう。

「1 / 2 / 3 / 4！」

俺たちとしてはおなじみのドラムスティックのぶつかる音と掛け声が始まる。

それに合わせて湊が一人先にギターを掻きならす。

1フレーズ独奏を終え、全員の楽器が勢いよく講堂内に響き渡った。

それと同時にお客さんは大いに盛り上がってくれる。

最初の曲は『ふわふわ時間』

一つ集団から前へと出ている溼（コーラス唯）によるポップな曲調の…まあ甘ったるい曲。

すごく作詞者の世界観が出ていて、なかなか癖のある曲だ。

それでも曲の雰囲気などいろいろ検討した結果、『ふわふわ時間』を先に演奏することにした。

…まあ『わをん』はバラードっぽいからなあ。

「キミを見てると、いつもハートDOKI DOKI!」

前奏を終え、漣はしっかりとした歌声を響かせる。

今朝の練習段階ですでに緊張しまともに歌えなかった影はもうない。

「夢の中なら、二人の距離縮められるのにな〜!」

いや…緊張して力が出ないなんてものではなく、これまで練習で聞いてきた中で最高の出来なんではないかと思わせるほど、漣の唄声は講堂の中を包み込むように広がっていた。

もちろん漣の唄声だけではない。

トリプルギターが作るぎこちない主旋律

漣を底から押し上げるように力強く叩かれるドラム

その荒々しいメロディーに柔らかさをもたらすキーボード

すべてが合わさって講堂中のお客さんの鼓膜を振動させていた。

俺はちらりとステージ下のいちばん近い客席を見渡す。

真剣にステージ上を見上げ俺たちの演奏をかぶりつくように見る男性、手拍子を取りながら体を揺らす女子生徒、不敵な笑みを浮かべながらこちらを見てくる女性など様々な人がいたがおおむね反応は良さそうだ。

「ふわふわタイム（ふわゝふわゝタイム）、ふわふわタイム（ふわゝふわゝタイム）、ふわふわタイム！」

一番のサビを終えたところには意外と観客のハートをわしづかみで来ていたみたいだ。

俺は斜め後ろにいる湊に目配せをする。

湊も軽くうなずいて目を合わせた。

「ああカミサマどうして好きになるほど、Dream night
せつないの」

簡単にしてもらったギターのコードを間違えないように細心の注意を払いながらステージ上を見渡す。

湊と唯は顔が見えないが、ムギと律の顔ははっきりと見える…ものすごく楽しそうだ。

それを見てなおさら俺の気合も上がってくる。

たくさんライブを積み重ねている湊、そして初めてのライブである4人の演奏が重なって俺の耳に聞こえてくる。

不思議な気分だった。

少ない経験だがライブなら自分の音と歓声しか耳に入らなかったのに、今はバンド全体の音がはっきりと聞き取れた。

後はそこに足りない音をはめ込んでいくだけ…そんな感覚に陥ったのは初めてだ。

「ふわふわタイム（ふわ`ふわ`タイム）、ふわふわタイム（ふわ`ふわ`タイム）！」

リードしている湊の音に合わせて、6つの楽器からの音色がぴったりと重なって放たれる。

俺は体全身でギターの震える声を受け止めながら、会場を見渡した。

講堂全体が湧きあがっているような歓声。

その歓声をもかき消す大音量の拍手。

俺は汗をぬぐいながらその光景に戸惑っていた。

だって今まで体験してきたものと違う。

割れるような歓声、拍手…それが違うというわけではない。

違うのは俺自身。

ここまでの高揚感をライブで味わったことがあるだろうか？

ただ単にライブから長いことはなれていたから？…いや違う。

はっきりとした理由は分からないけれど、それだけは違うことははっきりとわかる。

タタンと小気味の良い音が鳴るとともに、聞きなれた声が普段にもまして大音量で講堂内に響く。

「どうも〜！軽音部です！容姿端麗、頭脳明晰、パーフェクトな部長…」

ボーっとしていて気付かなかったが、そういえば曲の間にメンバー紹介を挟もうという取り決めをしていたな…

「ほらっ、ぼんやりしてないで。次は遊の番。」

「あっ…悪い。」

大げさなメンバー紹介を行う律の声に合わせて、一歩前に出てギターを高く掲げる。

「軽音部のお調子者筆頭！ちなみに身分は最下層！白木遊〜！」

「嘘はやめろ〜！」

「どっちが否定したいのかしら…」

「どっちにも決まってるだろ〜！」

ぼそつと後ろから茶々を入れる湊にもしっかりとツッコミを入れる。

たまに思うが、澁やムギですらそう思っているのではないかと勘ぐってしまつことがある。

それくらい扱いがひどいものだとはい覚している。

「そしてそのお調子者の手綱を握る実の妹！白木湊〜！」

「…どうも。」

「え〜みな〜ちゃん、もっどかわ〜いらしくアビールしでよ〜！」

「そつだそつだ〜！」

仕返しとばかりに茶々を入れ返すも、どこ吹く風といった感じでツンとしている。

まあそれでこそ湊なんだろう。

「それじゃあ次が最後の演奏になります！」

その一言を合図に俺と澗の立ち位置を入れ替える。

コードが引つ掛かりそうになるが慎重にゆっくりと入れ替わり、立ち位置が決まったところで合図を送る。

合図を受け取るのは律。

「聞いてください！『わをん』！」

講堂が静寂してきたのを見て、ムギが柔らかく優しい音色を紡いでいく。

キーボードの独奏。

ムギの性格が表れているかのようなしっとりとした音が講堂を包み込む。

俺はその空気を壊さないように、出来るだけ優しく詩を紡いでいく。

「校庭、教室、廊下に部室

いつものざわめき、生まれては消えた

共鳴、反響繰り返して

1つの音色が色づいていく

ピッチの違う音が重なって、

僕らだけの和音が生まれた

指で奏でる音に思い乗せて

音と音を繋げてく

僕達の和音」

そうだった…なんでじゃないだろ…

「2つの音に加わる単音

また1つ1つ、重みが増してく

作られた暖かいこの空気も

時の重みでほら、寒さ増してく

考えの違う意志が繋がって、僕らだけの輪音が生まれた

数瞬の輝きを刻み込んで
音と音が離れてく
君だけのスコア」

なんで俺はこんな歌詞にしたんだ？

湊の曲に何を感じて、この歌詞を書いたんだ？

「並びあうから、不協和音も生まれる
音が鳴るから和音も紡がれていく
ポリリズム最大でかき鳴らすんだ
思いと想いが手を取り、輪を作るよ」

俺が望んだものだろ？

俺が大切にしたいものだろ？

そして…湊が言う未来を変えたいからだろ？

「鮮やかな音色が無音に変わる
音もなく時だけ過ぎていく
目を閉じれば浮かぶ昨日のメロディー
柔らかさ、色、時を越えて

僕らで作る思いをメロディーに乗せて
離れていく君に届けよう

寒くて重い無音が続こうとも
この和音が僕達を
繋いでいてくれる」

第25話（後書き）

結局年内完結が出来ませんでした。
すみません…

ようやくオリジナル歌詞を出せました！

メロディー自体はとある曲を意識して作ったので、替え歌のような
感覚になってます。

何の曲か分かった方がいましたら、是非お教えてください！（案外分
りやすいかもしれせん）

今後出来るだけ早めに更新できるように頑張りますので、良かった
らお待ちください！

第26話(前書き)

ようやく第2部に向けての話を書くことができました。
遅れてすみません。

第26話

夕方というには少し遅い時間。

太陽はほとんど沈んでいて、明るさを侵食していくように夜の闇が空の色を塗り替えていくこの時間。

俺はようやく軽音部の部室として認められた音楽準備室で1人ベースを片手に窓の外を眺めていた。

外には学園祭を終えてなお意気揚々としている学生の集団が、一人また一人と校門を抜けていく。

大歓声を受けたままライブを終え、今現在窓から眺めることができず校門付近に見える、身振り手振りしながら楽しそうに話を繰り広げている我が軽音部のガラガラ声の歌姫のように大興奮していた俺たちは、ライブの熱をそのまま部室まで持って帰り、下校時間になるまで4人は大盛り上がりを見せ、さわちゃんが下校するよう注意するまで話し込んでいた。

ボンツと体を震わせる重低音が一音だけ鳴り響く。

その音は俺の手から生み出されたもので、ライブの間には一度も俺の手の中から生まれることはなかったものだ。

電気もつけず窓の近くに椅子を移動させ、ベースを握りながら窓の外に目を向ける。

「哀愁漂うその表情に影がかかり、それがまた少年の影を際立たせ

る…」

「一人で何言っただよ。」

ガチャリとドアを開きながら男がため息交じりに呟いた。

「あつ、わざわざすみません。」

「まあいいさ。俺も軽音部の部室に興味はあつたからな。」

「へえ、何か気になるようなことがあるんだ？」

「まあ…な。」

先に部室へと入ってきた短髪の男に続いて長髪の女性が部室へと入ってきて、茶化すように男に話しかける。

「へえ、それは気になる気になる！今日はそれを着にクイツといつちやいますか？」

「それは遊の返事次第だな。それじゃあさつそく聞かせてくれないか？」

男はいつもは溲が座る席に、女は律が座る席に座り俺の返事を待つ。

2人の腕には同じ形の銀のネックレスが巻かれていて、それが最後の力を振り絞った太陽によってきらりと輝いた。

電気のついていないためか少し重苦しい雰囲気、軽く微笑みながら俺が話しやすいような空気へと変えようとしている男。

その表情には少しのあきらめを含まれていたことが俺には分かった。律の席からこちらを期待するように見ている女は、特有のヒマワリのような満点の笑顔をまったく崩すことはない。

「いや〜あ、もてる男はつらいですね〜！」

「今日はすっかりベースの子に注目を持っていかれてたじゃない。」

「溇の野郎！？せっかく俺のファンクラブが作られる間近だったのに〜！」

「その時点で怜には負けてるわ〜？怜は入学して2カ月で50人の非公認ファンクラブを作ってたんだから！」

「その言い方だと俺が作ったみたいだろうが…。」

女…藍さんは自慢するかのように腰に手を当てて豊満な胸を突きだしている。

怜さんは藍さんに振り回された後必ずするため息をいつものように1つ吐いた。

「怜さんは天然ジゴロだからなあ〜。だから他の部員は先に帰ってもらったんですからね。」

「遊もいい加減にしてくれ…。俺は藍一筋だっけいつも言ってるだろ。」

「遊……ゆづ……っ!!」

「ちよっ…今は抱きつくなくて。ほら、な？」

机越しに首に腕を回す藍さんを怜さんは押しとどめ、乱れた上着を整えた。

「はいはい、ごちそうさまです。そろそろ本題入ってもいいですか？」

「…お前、高校入ってから変わったな…」

そんな汚れちまったな…みたいな言い方やめてくださいよ。

「それですね、俺はやっぱり軽音部にします。」

あっさりとした口調で軽く告げる。

その一言に藍さんは驚きの表情を隠せず、怜さんは不敵な笑みを浮かべた。

「えっ…えっ！え……っ!!!!」

「藍…少しボリュームを絞ってくれ。」

「だって!?!?だって!?!?だってだって……!?!?」

「とりあえず遊の意見を聞こうじゃないか。遊も理由を聞かせてくれるんだろ？」

「そんなに御所望ならお任せくださいよ。」

机をバンバンと叩く藍さんを見無視するようにこほんと咳払いをし、姿勢を整える。

「つつても理由って言ったらくれくらいですかね。」

ネックを右手に持ち替えて左腕を前に出す。

その左手首には湊からもらった銀のブレスレットが輝いていた。

「俺はこっちの方が良かった…そんだけですよ。」

「でもでもでも！？今日だって下手くそなギター担当してたじゃない！ー！私たちとなら絶対ベースを任せるのに！ー！」

「…相変わらず無意識にボディブローをぶち込みますね、藍さん…」

「でもトリプルギターは意外とうまくまとまってたじゃないか。そりゃあみなちゃんが上手くまとめあげてたように聞こえたけども。」

「…怜さんも事実をズバズバと言っちゃうところは昔から変わらませんね…」

俺のライフはすでに0ですよ…

「どうしてどうして！？遊君のベース、私好きだよ！ーおじさんにも負けないくらいの腕も持ってるのに、どうしてギターにしちゃうの？」

「だから少し落ち着けて、藍。遊が困ってるじゃないか。」

「それでこれは返しますよ。別に壊しちゃいないんで、クーリングオフはまだ効きますよね？」

「ったく…クーリングオフは最大20日くらいだろ。」

俺がポケットから取り出した銀のネックレスを怜さんに返す。

「今日のライブで着けてなかったのを見たときから、こつなるんじゃないかと思ってたよ。」

「『首輪として着けてなさい!!』って言われてから毎日のように律儀に着けてましたけど…すみません。」

銀のネックレス…それは夏休み前に怜さんたちからもらったもので、怜さんと藍さん、2人のインディーズバンド『U^{ユニ}A^キ』のバンドグッズである。

バンドグッズといっても非売品であり、バンドメンバーだけが身につけることができるもの。

俺は夏休みに入る直前、怜さんたち…というより藍さんに『今うちから唾つけとけばいいのよ!』と、ある程度混雑した喫茶店で大声で言っていたのを今でも覚えている。

その時怜さんがコーヒーを吹き出し、なぜか俺の胸元をつかみ上げてきた時はどうしようかと思ったものだ。

「それにほら。俺がいなくなっちゃあいつらが寂しくて泣いちゃう

って言うんで。女の子を泣かすような男にはなりたくないんすよ。うわ、俺今めっちゃ輝いてるな！フェミニストってやつ？」

「…じゃあ私、遊君が私たちのバンドに入ってくれなきゃ泣いちゃうぞ。」

「千と千尋じゃないんですから。それに女の子って歳じゃ…」

「遊ぶ〜ん、ちょ〜と聞き捨てならないこと言わなかった？」

再び藍さんは満面の笑みを見せる。

しかしその笑顔はさっきのとは全くの別物で、さっきの笑顔が『期待70：信頼30』で作られているとしたら、今の笑顔は『怒り99：殺意1』で構成されているに違いなかった。

せめてバファリンレベルにしておいてほしいところである。

「それはともかく、そろそろ学校からでないと怒られますよ？」

「もうそんな時間か…まあ軽音部の部室も見れたし帰るとするか。」

「…？なんでそんなに音楽準備室が見たかつたんですか？」

そういえば部室に入っただけでそんなことを言っていたなあ、と思いつ出した。

「昔ここに通ってた頃…2年の頃に告白されてな。同級生の軽音部員に。」

懐かしいものを眺めるように遠くを見つめる怜さん。

表情がものすごく柔らかであるため、それは遊さんにとって大切な思い出なんだろうと俺にも察することができた。

「ふうん。さっすがファンクラブをお持ちの方ですね。いい思い出をお持ちで。」

もちろん彼氏のそんな昔の色恋沙汰を聞いても藍さんは面白い反応をしないわけで、ものすごく不機嫌そうな表情と声を表に出していた。

「ああ、いい思い出だよ。自分の気持ちに気付けたからな。」

「えっ?」

「その軽音部員の子に告白された時、断る理由に咄嗟に出てきた答えが『俺、ワイルドな人が好きなんだ』ってことに気付けたからな。」

「えっ?断ったの?」

「おいおい、俺と藍が付き合いたしたのいつだったのかも忘れたのかよ?」

藍さんは頭をかしげ、指折りながら昔を思い出す。

「…高2の夏?」

「正確には6月の中旬な。それで告白されたのは春のことだよ。」

「2か月で女をとつかえひつかえ…やりますね、怜さん！」

「あの子に告白してもらったおかげで俺は気づいたんだよ。…昔からずっと近くにいてくれた『ワイルドな人』に惹かれてるってことがな。」

「怜…」

「何で俺、こんな大学卒業間近の学生カップルの逢瀬を見せられないじゃないんだ…」

「だからあの子には感謝してるんだ。それに高校の時から音楽はやってたけど、外バン組んでたから軽音部に興味持っても入ることなかったしな。…って藍!？」

「リョ〜!!リョ〜!!私もずっと好きだったよ〜!!!!」

「あの〜、俺もう帰ってもいいですか〜?鍵置いていくんで閉めといてくださいね〜。」

「お、おいっ遊!?!藍をどうにかしてくれ!ちょっ、藍!?!やめ…」
ガチャン

…俺は天然ジゴロとして伝説の存在となった怜さんのことを忘れな
い。

…てかつらやましすぎて、少しくらい地獄に落ちちまえ、と思ったのは独り身男子高校生として避けられないことであった。

「…帰ってきたみたいね。」

私の部屋から眺めることができる自宅の玄関に一つの影が近付いて行く。

右手にはギター、左手にはベース、そして肩にカバンをひっかけて重そうにしている。

今日の学園祭で使ったのはギターだけのはずであり、朝出るときにもギターとカバンしか持っていなかったのに、なぜかベースも持って帰ってきていた。

「…やっぱりベースがやりたかったんじゃない。」

ギターで満足しているような素振りを見せておきながら、こうしてベースを手放すことができない。

遊のベースの腕はかなりのもので、…正直に言つと溻よりもテクニカルな演奏をすることができる。

それでも濛にベースを譲ったのは、きつと私たち『放課後ティータイム』のドラムである律との相性を見て、それが最善であると判断したのだろう。

ギチツと歯車が止まる音がしたのを聞くと、私は再び遊から誕生日のプレゼントとしてもらったオルゴールのねじを回す。

巻き終えてねじを離すと再びピンと音色を紡いでいく。

『わをん』のメロディーはこのオルゴールの奏でる曲の1フレーズをそのまま使っているためか、やはりこの曲を聴くとどうしても遊の事を頭に浮かべることが多くなる。

遊のくれたオルゴールのメロディーと、遊の作った歌詞が重なり合っただけの曲。

私はそれにほんの少し手助けをしただけ。

…やはり私はダメなままだった。

これでは私はまだ認められない。

バンドの一員として認められない。

…遊の隣にいることはできない。

そんな思いが学園祭が終わったばかりだというのに、私に作曲活動をさせていた。

「次こそは私の力で納得のいく曲を…」

時刻はすでに19時を回っている。

もうそろそろお母さんが食事の準備に疲れて、私を呼びに来るころだろう。

五線譜だけが書かれたぼぼ真つ白なルーズリーフを机の一番上の段の引き出しに仕舞い、何か言われる前に下の階へと降りていく。

「…私も見つけて見せる。」

廊下で自室に向かう遊とすれ違う直前、ぼそつと呟いたその一言。

それは遊の耳に届くこともなく、私の心の中だけで響き渡った。

第26話（後書き）

まったく更新しないまま2月を終えてしまつところだった…

今現在就活中であまり書いている暇がないのですが、?ヶ月に1回は更新していきたいと思いますので気長にお待ちください！

よろしければ感想お願いします!!
めっちゃ待ってます!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5476n/>

けいおん！ 2つのこたえ

2011年2月28日03時51分発行